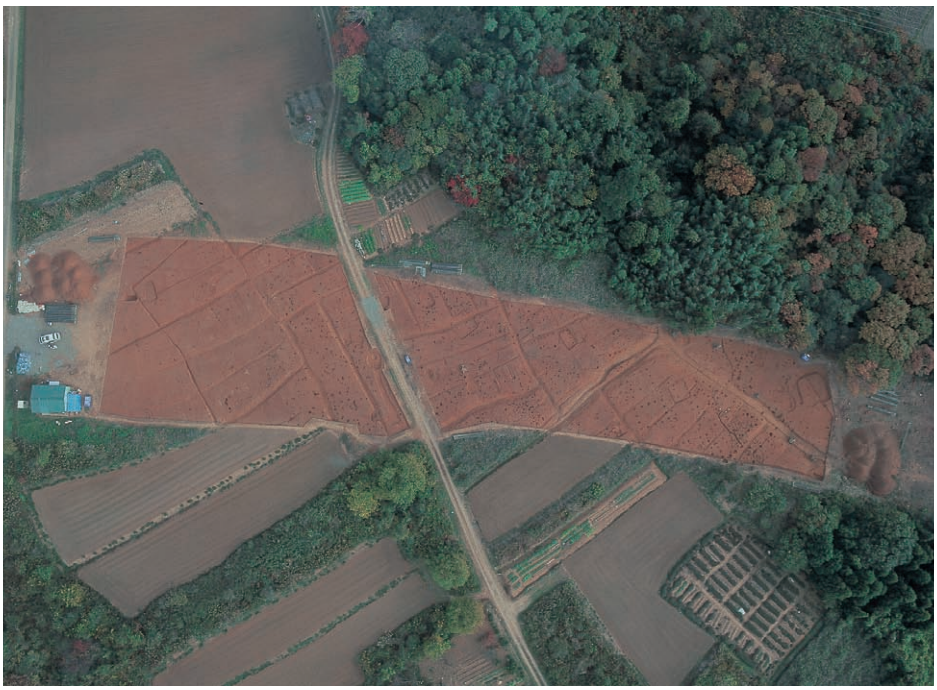
小牧北遺跡発掘調査報告

2007（平成19）年３月

三重県埋蔵文化財センター

調査区遠景（南から）



調査区遠景（上空から）

調査区南部分（上空から）

調査区中央部分（上空から）

方形周溝墓群と調査状況（北から）

S×135（北から）

SH46（東から）

SK15（西から）

序

埋蔵文化財は、それぞれの地域における大切な過去の遺産であり、現代に生きる私たちの責務としてこれを積極的に保護し後世に伝えていくとともに、更なる文化の向上のための礎とすべきものであります。しかし、一方では私たちの生活が便利で豊かなものになっていく過程で、それらの多くの埋蔵文化財はその犠牲となってきたのも否定できない事実です。そこで、現状保存が困難であると考えられる遺跡については、発掘調査を実施し記録の保存を図ってきているところであります。

ここに報告いたしますのは、平成13年度国道365号員弁バイパス国補道路改築事業に伴って発掘調査を実施したものであります。この発掘調査成果が、より多くの方面で活用されることを切望するものであります。

なお、調査にあたっては、地元の方々をはじめ、四日市市教育委員会、および関係各位から多大なるご協力と、温かいご配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意あるご対応に、心から御礼申し上げます。

2007年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長　吉　水　康　夫

例　　言

1．本書は、三重県四日市市小牧町字小牧北に所在する小牧北遺跡の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の調査は、平成13年度国道365号員弁バイパス国補道路改築事業に伴い、三重県教育委員会が三重県県土整備部道路整備課から経費の執行委任を受けて実施した。（旧称のまま）

3．調査および整理は次の体制により実施した。（旧称のまま）

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課
　　主事　小濵　学
　　技師　金子　智子
面　　積　　5,900㎡
期　　間　　平成13年9月3日～平成14年1月21日

4．調査に当たっては、地元の方々をはじめ、三重県県土整備部道路整備課・北勢県民局建設部道路整備課・四日市市教育委員会からの協力を得た（旧称のまま）。

5．本書の執筆・編集は小濵学・伊藤文彦・野嶌美沙子が行い、執筆分担については、目次に示したほか文末にも記入した。なお、室内整理作業、図面作成等は調査担当者と情報普及グループが行った。本書の作成に当り、深井明比古氏からご教示をいただいた。

6．当地は旧国土座標第Ⅵ系に属し、本書の方位はこの座標北を用いた。なお、磁針方位は、西偏6度（平成４年、国土地理院）である。

7．本書で報告した記録・遺物等は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

目　　次

Ⅰ　前　　言・・・・・・・・・・・・・・・（小 濵 学・野嶌美沙子）・・・ 1

Ⅱ　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（伊藤文彦）・・・ 4

Ⅲ　遺　　構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（小 濵 学）・・・ 7

Ⅳ　遺　　物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（伊藤文彦）・・・44

Ⅴ　結　　語・・・・・・・・・・・・・・・・・（小 濵 学・伊藤文彦）・・・57

挿図目次

Ⅰ　前言
第1図　調査区位置図 ……2
第2図　調査区地区割図 ……3
Ⅱ　位置と環境
第3図　遺跡位置図 ……5
第4図　遺跡周辺図 ……5
Ⅲ　遺構
第5図　調査区土層断面図① ……7
第6図　調査区土層断面図② ……8
第7図　遺構平面図① ……9
第8図　遺構平面図② ……10
第9図　遺構平面図③ ……11
第10図　SX1・5・127・135平面図・断面図 ……12
第11図　SX2平面図・断面図……13
第12図　SB36・41平面図・断面図……14
第13図　SB95・99平面図・断面図……15
第14図　SB100・121・101・102平面図・断面図 ……16
第15図　SB103・104・105・106平面図・断面図 ……17
第16図　SB108・109・110・111平面図・断面図 ……18
第17図　SB112・113・114・115・116平面図・断面図…19
第18図　SB119・120・125平面図・断面図 ……21
第19図　SH25・42平面図・断面図……22
第20図　SH28・32平面図・断面図……23
第21図　SH35平面図・断面図 ……24
第22図　SH43・SK44平面図・断面図 ……25
第23図　SH45平面図・断面図 ……26
第24図　SH46・47平面図・断面図……27
第25図　SH64平面図・断面図 ……28
第26図　SH85・89平面図・断面図……29
第27図　SH91・SK96平面図・断面図 ……30
第28図　SH98平面図・断面図 ……31
第29図　SH107平面図・断面図 ……32
第30図　SH136平面図・断面図 ……33
第31図　SH139平面図・断面図 ……34
第32図　SK90平面図・断面図 ……35
第33図　SK15・34・38平面図・断面図 ……36
Ⅳ　遺物
第34図　SX5出土遺物実測図……44
第35図　SX1・2出土遺物実測図 ……45
第36図　SX127・135出土遺物実測図……46
第37図　SB36・100・101出土遺物実測図 ……47
第38図　SH26・28・32・35・42・43・46・47・52
出土遺物実測図 ……48
第39図　SH64・91・98・126・139出土遺物実測図 …49
第40図　SK15・34・72・86・88・134出土遺物実測図…50
第41図　SD9・18・131・ピット・包含層出土遺物実測図…51

写真図版目次

巻頭写真1　調査区遠景
巻頭写真2　調査区南部分・中央部分
巻頭写真3　方形周溝墓群と調査状況・SX135
巻頭写真4　SH46・SK15
写真図版1　SZ5遺物出土状況 ……61
写真図版2　SZ1遺物出土状況 ……62
写真図版3　SX127土器棺、SX127遺物出土状況 ……63
写真図版4　SX135遺物出土状況、SX2完掘状況 ……64
写真図版5　SX2遺物出土状況 ……65
写真図版6　SD133完掘状況、SX2・133・143完掘状況 …66
写真図版7　SB36完掘状況、SB41完掘状況 ……67
写真図版8　SB95・99完掘状況 ……68
写真図版9　SB101完掘状況、SB102完掘状況 ……69
写真図版10　SB103完掘状況、SB104完掘状況 ……70
写真図版11　SB105完掘状況、SB106完掘状況 ……71
写真図版12　SB108完掘状況、SB109完掘状況 ……72
写真図版13　SB110完掘状況、SB111完掘状況 ……73
写真図版14　SB113完掘状況、SB114完掘状況 ……74
写真図版15　SB119完掘状況、SB125完掘状況 ……75
写真図版16　SH25・26・42完掘状況、SH28完掘状況…76
写真図版17　SH28カマド、SH32完掘状況 ……77
写真図版18　SH32カマド、SH35完掘状況 ……78
写真図版19　SH43・SK44完掘状況、SH46完掘状況……79
写真図版20　SH47完掘状況、SH64完掘状況 ……80
写真図版21　SH85完掘状況、SH91遺物出土状況 ……81
写真図版22　SH107完掘状況、SH136完掘状況 ……82
写真図版23　SK137・139・140完掘状況、SK88完掘状況…83
写真図版24　SK96遺物出土状況、SK134完掘状況 ……84
写真図版25　SK15遺物出土状況、SK34遺物出土状況 …85
写真図版26　遺物写真① ……86
写真図版27　遺物写真② ……87
写真図版28　遺物写真③ ……88
写真図版29　遺物写真④ ……89
写真図版30　遺物写真⑤ ……90

表目次

Ⅲ　遺構
第1表　遺構一覧表① ……38
第2表　遺構一覧表② ……39
第3表　遺構一覧表③ ……40
第4表　遺構一覧表④ ……41
第5表　遺構一覧表⑤ ……42
第6表　遺構一覧表⑥ ……43
Ⅳ　遺物
第7表　出土遺物観察表① ……52
第8表　出土遺物観察表② ……53
第9表　出土遺物観察表③ ……54
第10表　出土遺物観察表④ ……55
第11表　出土遺物観察表⑤ ……56

Ⅰ　前　言

1　調査の契機

今回の発掘調査は、平成13年度国道365号員弁バイパス国補道路改築事業に伴い実施した。小牧北遺跡は、四日市市小牧町に位置し、遺跡番号235の周知の遺跡である。小牧北遺跡が存在する道路建設予定地沿いには、平成11年度に発掘調査された門ノ上遺跡、門ノ上古墳群、居林古墳群、北山城跡などがみられる。

現地発掘調査に先立ち、平成11年度に範囲確認調査を実施した。その結果、遺構及び遺物の存在が確認された。これを受けて、県土整備部と文化財保護の協議を重ねてきたが、現状保存が困難なことにより、5,900㎡について本調査を実施し、記録保存することになった。なお、発掘調査の体制については、民間調査機関（安西工業株式会社）に委託し、県調査員の指示のもとに実施する方式を導入し、業務の円滑化を図った。

2　調査経過

（1）調査経過

調査期間は平成13年9月3日から平成14年1月21日である。重機による表土除去の後、直下に縄文時代の土器棺墓、弥生時代の方形周溝墓、古代の掘立柱建物、竪穴住居、土師器焼成坑など、多くの遺構を確認することができた。縄文時代から中世にわたる人々の生活の跡が認められ、当該地域の歴史を解明するうえで大きな成果をあげることができた。

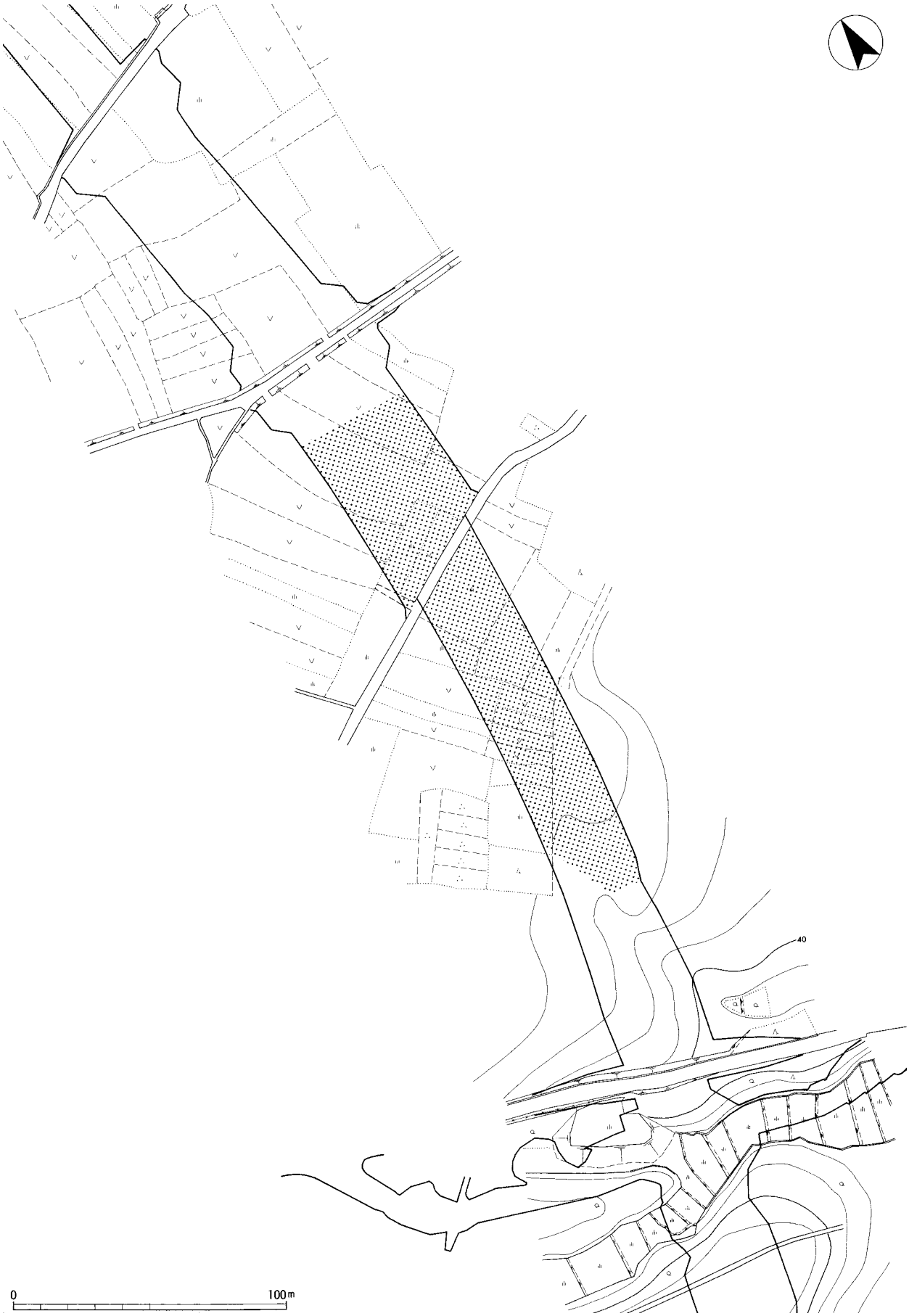
炎天下や寒風にもめげず、現地作業にあたっては、以下の方々の協力によって、無事に調査を終えることができた。芳名を記し心から感謝の念を表したい。

荒木紀夫、井澤孝文、伊藤しず子、伊藤平雄、
稲垣美奈子、井上佳和、岩田十三夫、大川克弘、
大谷武司、加藤恵子、加藤省三、加藤徹也、
加藤　稔、亀田勝士、小林ひさ子、小鮒幸雄、
斉藤清枝、斉藤澄江、斉藤ひろみ、斉藤満雄、
斉藤ゆり子、坂口秀郎、坂本喜美、成田君子、
鈴木はつみ、田浦トメ子、田浦治雄、城　佳男、
中嶋俊隆、中田成子、中田　稔、長棟たゑ子、
中村　幸、中村清六、中村善吉、西村和江、
西村年男、野呂明男、長谷川清、日置四一、
日沖年治、日沖ヒサ代、福田和夫、福田輝男、
福田　弘、福田義久、藤原武好、堀木　勉、
増田久郎、松下一彦、水谷　豊、村上のり子、
村木秀和、森下愛子、森　節子、山下敏男、
山田　尚、山本文男（五十音順、敬称略）

（2）調査日誌（抄）

平成13(2001)年

9月 4日	重機による表土除去開始。
9月11日	Ａ地区遺構検出開始。
9月17日	ＳＸ１（土器棺）を検出。
9月18日	土器焼成坑検出。 方形周溝墓ＳＸ２掘削開始。弥生土器出土。
9月21日	表土除去終了。 山梨学院大学椎名教授来訪。
9月26日	ＳＨ35において、土留めと思われる人頭大の河原石列を確認。
10月 3日	ＳＨ45検出。壁溝に沿って並べられた石を確認。工房跡か。
10月 5日	ＳＫ15掘削。土器焼成坑であることを確認。
10月11日	ＳＨ35の壁溝に板を差し込んだ可能性のある溝を確認。 ＳＸ５を半割り後、写真撮影。縄文晩期と判断する。
10月19日	Ｂ地区遺構検出開始。
10月25日	ＳＸ２方形周溝墓、写真撮影。
10月30日	Ｂ地区遺構検出終了。
11月26日	Ｂ地区遺構掘削終了。
11月27日	Ａ地区清掃、写真撮影。
11月28日	ラジコンヘリによる空中写真撮影。
11月29日	Ｂ地区、平面実測（1/20）。
11月30日	拡張区の表土除去作業開始。
12月 3日	Ａ地区、平面実測。
12月 5日	拡張区の遺構検出開始。



第１図　調査区位置図（１：2,000）

12月 9日　現地説明会。約140名の参加。

12月10日　拡張区において方形周溝墓検出。

12月14日　拡張区遺構掘削開始。

平成14(2002)年

1月 7日　拡張区、ＳＸ135の土器取上げ。

1月 9日　拡張区、平面実測後、埋戻し開始。

1月12日　片付け、清掃。

3　文化財保護法に関する諸通知

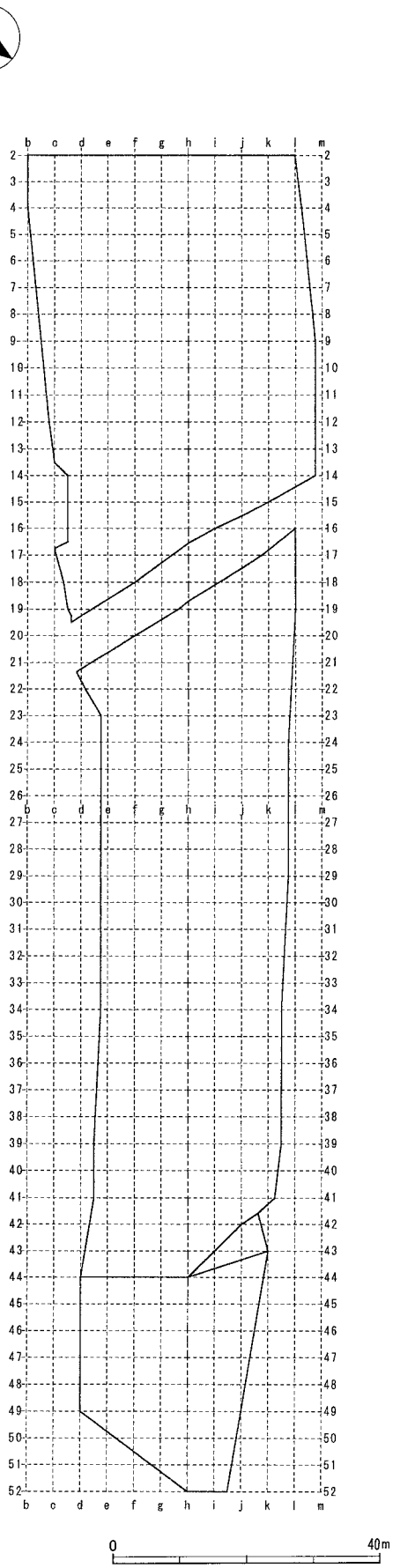
文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は以下のとおり行っている。(法の条文は当時のまま)

・法第57条の３第１項（文化庁長官宛）
　平成13年7月31日付、道整第152号（県知事通知）

・法第98条の２第１項（文化庁長官宛）
　平成12年3月28日付、教生第1711号（県教育長通知）

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（四日市市西警察署宛）
　平成14年3月28日付、教ス生第8-20号（県教育長通知）

（小濵　学・野嶌美沙子）



第２図　調査区地区割図（１：1,000）

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

小牧北遺跡（1）は三重県北部、四日市市に所在する。[①] 三重県北部の地勢は、西に標高1,000ｍをこえる鈴鹿山脈が南北に連なり、東に伊勢平野と伊勢湾が広がる西高東低の様相を呈する。鈴鹿山脈からは員弁川、朝明川、海蔵川、内部川、鈴鹿川などの河川が台地・丘陵を開析しながら概ね東流し、沖積低地を形成して伊勢湾に注ぐ。河川が東流するため、台地・丘陵も東西に広がる地形である。小牧北遺跡は四日市市小牧町の東部、朝明川の左岸、朝明丘陵上に位置する。標高は約50ｍで、朝明川の形成している沖積平野との比高差は約17ｍである。現状は畑地および荒地であった。

2　歴史的環境

（1）旧石器時代

三重県北部における旧石器時代の遺跡は鈴鹿川流域に西ノ岡Ａ遺跡をはじめ集中した分布がみられる。一方、小牧北遺跡の立地する朝明川流域では野呂田遺跡（2）において旧石器時代に属する可能性のある石器片が採集されているものの、確実な当該時期の遺跡は今のところ確認されていない。

（2）縄文時代

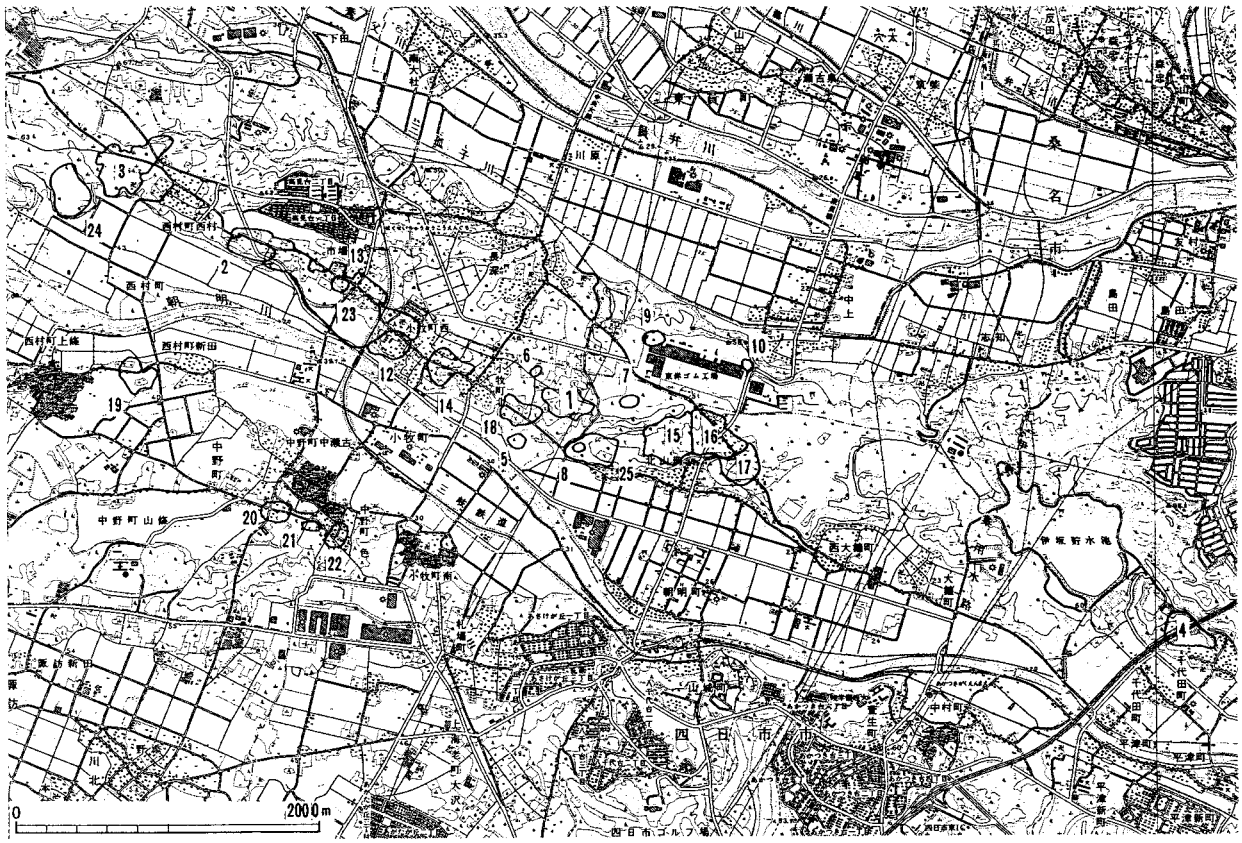
朝明川の中流域において良好な縄文時代の遺跡は今のところ知られていない。縄文土器が認められている遺跡としては、西ヶ広遺跡[②]（4）や野呂田遺跡が挙げられる。西ヶ広遺跡においては土坑から比較的まとまった縄文時代中期後葉の土器が出土している。また野呂田遺跡においては石鏃、石鏃未製品、石錘、削器などが採集されており、石材から縄文時代の遺物であることが推定されている。しかしいずれにしても朝明川中流域に縄文時代の遺跡分布は希薄であって、人間集団の生活の場として本格的には定着していなかったと考えて良いのだろう。[③]

（3）弥生時代

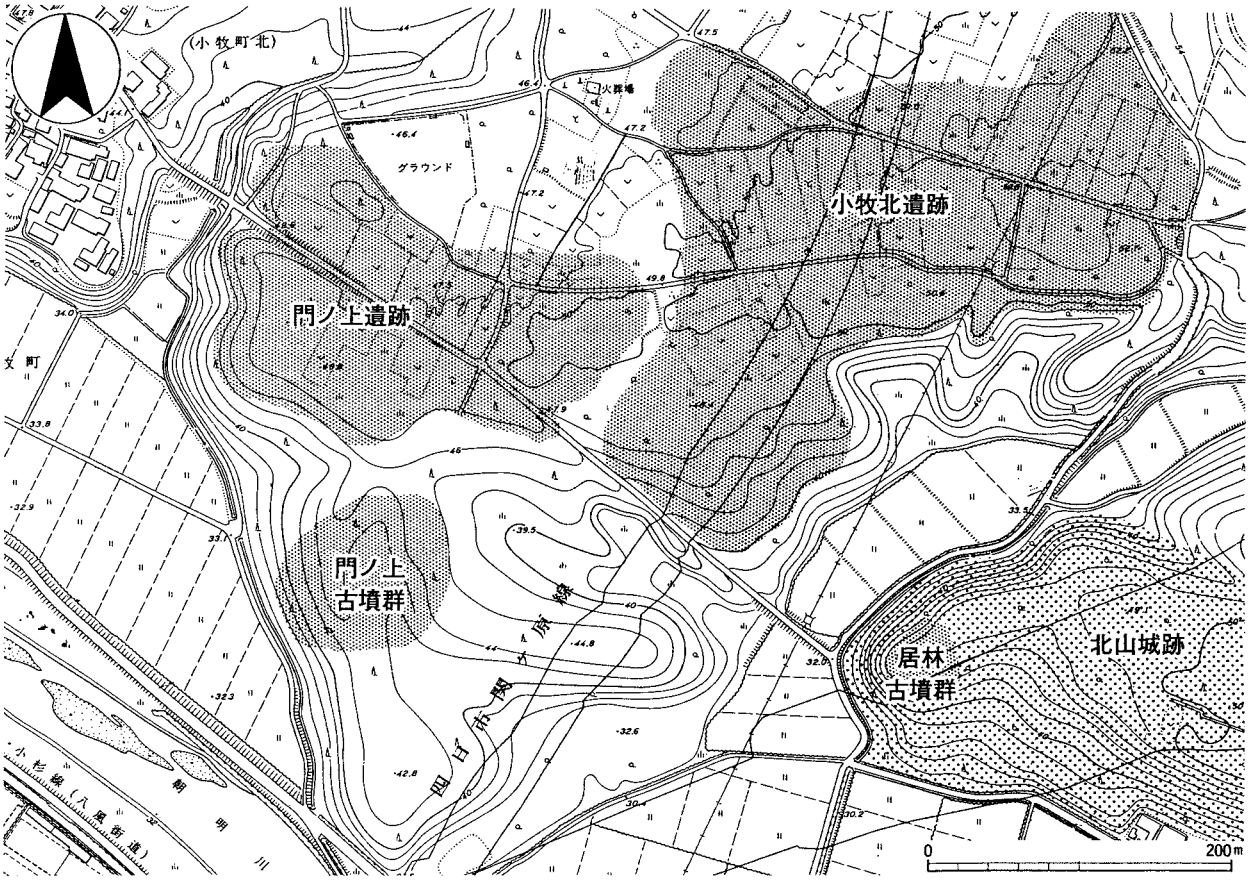
弥生時代になると、朝明川中流域左岸でも、比較的規模の大きい集落が見られるようになる。丸岡遺跡（3）では試掘調査が行われ、遺構は明確ではないものの中期の土器が検出されていると報告されている。朝明川左岸でもやや下流に近い菟上遺跡においては、中期の大型竪穴住居を含む120基の竪穴住居、独立棟持柱建物４棟を含む掘立柱建物33棟が確認されている。[④] 西ヶ広遺跡においては後期の竪穴住居が23棟検出されており、いずれも方形プランに主柱穴が４本、南側の壁面中央に貯蔵穴を備える画一的な構造を持っていたとされる。また平均一辺５～６ｍの規模の竪穴住居が多い中で一辺10ｍに達する大型住居が検出されており、集落内の集会など公的な建物に利用されたものと考えられている。弥生時代後期の集落の様相を具体的に示す事例である。

（4）古墳時代

古墳時代前期から中期にかけての遺跡については不明な点が多い。朝明丘陵の小牧北遺跡周辺では、古墳時代後期に入って門ノ上古墳群（5）、若宮古墳（6）、筆ヶ崎古墳群（7）、居林古墳群（8）などが営まれるようになる。門ノ上古墳群は６基の円墳からなる。これまでに発掘調査は行われていないが、横穴式石室の存在が想定されている。若宮古墳は「殖栗連」の墓と地元で伝承されていた古墳で、直径約14.4ｍ、高さ約2.4ｍの規模を持つ。明治15年に発掘が行われ、横穴式石室から金環や須恵器が出土したという。現在は若宮古墳のみが残るが、昭和初期までは周辺に複数の古墳が存在したらしい。筆ヶ崎古墳群は８基の円墳からなる。各古墳はいずれも未調査であるが、埋葬主体部は小形の横穴式石室が想定されている。居林古墳群は２基の円墳からなる。一号墳は直径12ｍ、高さ１ｍ、２号墳は直径８ｍ、高さ0.8ｍと小形である。内部主体、出土遺物などは不明である。いずれも古墳時代後期の古墳であると考えて良いだろう。朝明丘陵に展開する古墳時代の集落としては西ヶ広遺跡が挙げられる。この遺跡では古墳時代後期の竪穴住居が14棟、掘立柱建物２棟などが検出されている。このほか特徴的な遺物としてフイゴ羽口が10点出土しており、この集落では金属器生産が行われていたことを示唆する。



第３図　遺跡位置図（１：50,000）　　国土地理院『菰野、桑名』（１：25,000）から



第４図　遺跡周辺図（１：5,000）

（5）古代以降

律令期、朝明川流域には朝明郡が置かれた。久留倍遺跡は朝明川南岸の丘陵東端に展開する遺跡で、八脚門と掘立柱列に囲まれた正殿・両脇殿等の掘立柱建物が東面して「コ」字形に配置される７世紀末頃の政庁跡や、区画溝で囲まれた総柱建物を中心に構成された正倉院跡が検出されるなど旧朝明郡における郡衙跡に比定されている。[⑤] 一方朝明川北岸の朝明丘陵において、律令期の集落の様相が明らかになっている遺跡は多くない。西ヶ広遺跡では、大型の庇付建物を含む48棟に及ぶ掘立柱建物が確認されているほか、陶硯も出土しているなど官衙的様相を示す。東員町西山遺跡（9）、新野遺跡（10）は古墳時代以降平安時代まで継続する集落で、フイゴ羽口や鉄滓が出土しており、製鉄を行う集団の存在が推測されている。[⑥] このほか、丸岡遺跡、野呂田遺跡、大丸遺跡（12）、的場遺跡（13）、千栗Ｂ遺跡（14）、中野山遺跡（15）、北山Ａ遺跡（16）、北山Ｂ遺跡（17）などで当該期の遺物が採集されており、集落を形成していたと思われる。

朝明丘陵において平安時代以降の明確な遺構は、ほとんど確認されていない。小牧北遺跡の西側に位置する門ノ上遺跡（18）において平安時代の土師器焼成坑が検出されている。[⑦] このほか野呂田遺跡で遺物が採集されている。丘陵地での遺跡の分布が希薄になっていることが伺える。

中世城館については、朝明川流域に比較的良好な状態で遺存する城館跡が多い。小牧北遺跡の周辺だけでも市場城跡（23）や保々西城跡（24）、北山城跡（25）などがあり、いずれも比較的良好に土塁が確認できる。

（伊藤文彦）

〔註〕

①この項を記述するに当たっては、基本的に以下の文献を参考にした。

三重県『三重県史　資料編　考古１』(2005年)。

四日市市『四日市市史　第二巻　史料編　考古Ⅰ』(1988年)。

四日市市『四日市市史　第三巻　史料編　考古Ⅱ』(1993年)。

②日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会「西ヶ広遺跡」(『日本道路公団東名阪道路埋蔵文化財調査報告』1970年)。

③穂積裕昌「第２章位置と環境」(『莵上遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2005年)。

④三重県埋蔵文化財センター『莵上遺跡発掘調査報告』(2005年)。

⑤四日市市教育委員会『一般国道北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅶ』(2003年)。

⑥三重県教育委員会『新野遺跡発掘調査報告』(1972年)。

⑦三重県埋蔵文化財センター『門ノ上遺跡発掘調査報告』(2000年)。

Ⅲ　遺　構

はじめに

遺構の詳細については、第１～６表に譲りたいと思う。また、例言でも述べたが、座標系については旧座標となっている。新測地系への対応については、以下の通りである。第７～９図に掲載している数値である。[①]

＜①＞旧座標

Ｘ＝－１０５，６５０

Ｙ＝　５３，０５０

＜①＞新座標

Ｘ＝－１０５，３０３．９８２６

Ｙ＝　５２，７８７．９９３１

＜②＞旧座標

Ｘ＝－１０５，７５０

Ｙ＝　５３，０５０

＜②＞新座標

Ｘ＝－１０５，４０３．９８１０

Ｙ＝　５２，７８７．９９１０

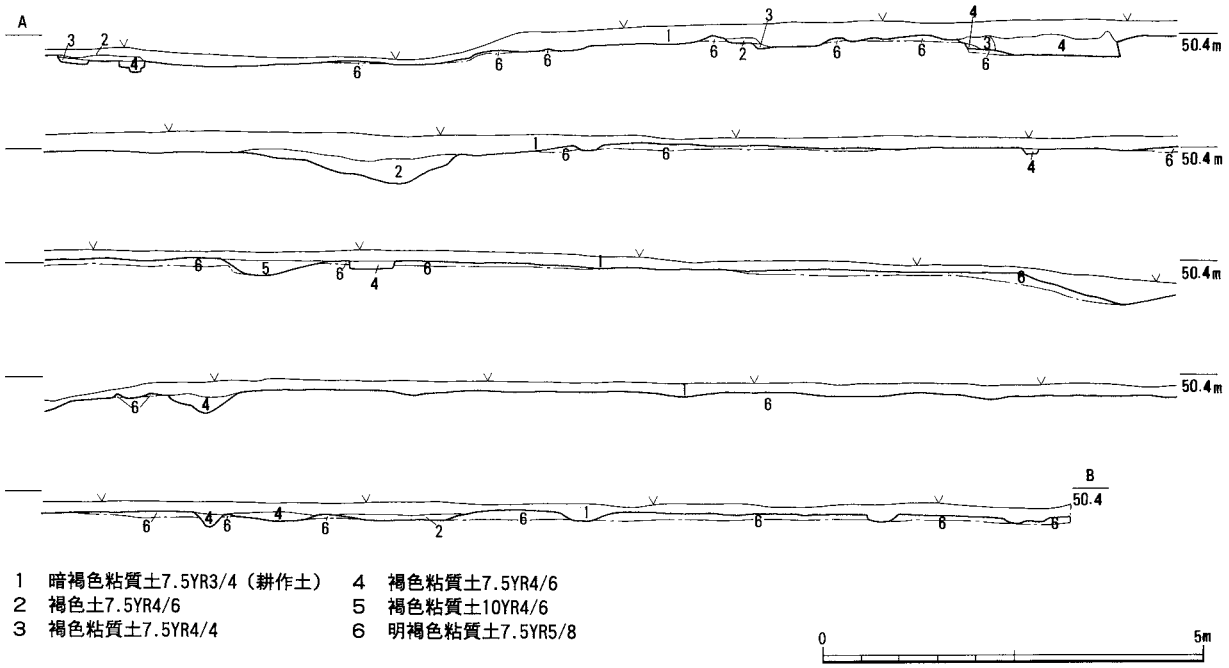
１　基本層序

遺跡の現況としては、畑地、荒れ地であった。朝明川に向かって緩やかに下っていく斜面上に立地している。基本的には、上から表土（暗褐色粘質土・7.5YR3/4）、遺構検出面（明褐色粘質土・7.5YR5/8）となる。表土の直下が遺構検出面となる。地元住民の聞き取りにより、1950年代に当遺跡周辺で農地開拓が行われたことが判明している。[②] そのことからも、遺跡自体が削り取られたものと考えられ、その事実を追認できる結果といえよう。

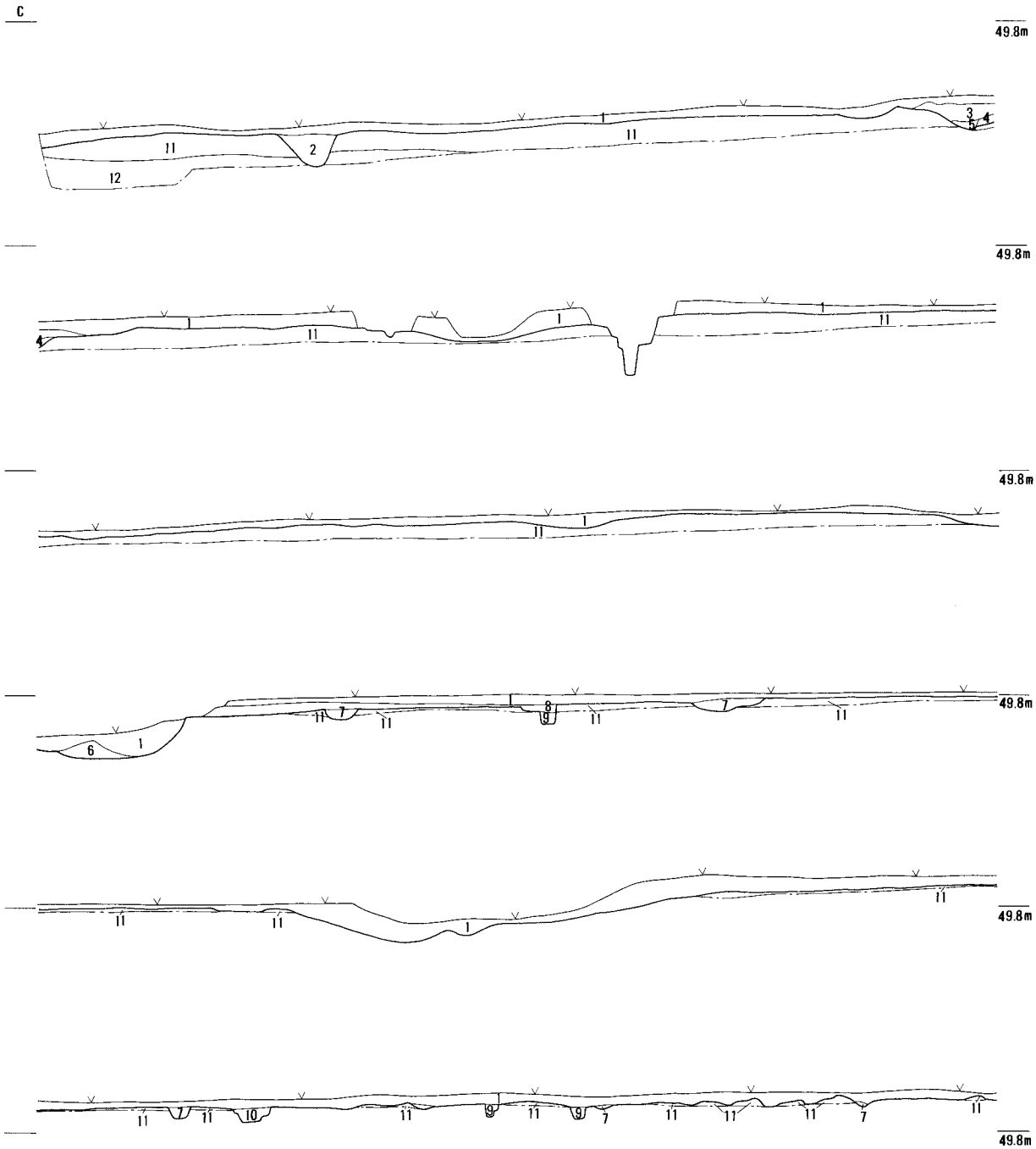
２　縄文時代の遺構

＜土器棺墓＞

ＳＸ５　　径0.5ｍ程度のほぼ円形の掘り形に、縄文土器深鉢が斜位に埋設されていた。口縁部から体部にかけての半分ほどが欠失していた。後世の削平を受けたものと思われる。縄文時代晩期、突帯文期のものと考えられる。



第５図　調査区土層断面図①（１：100）



1　暗褐色粘質土7.5YR3/4
2　明黄褐色粘質土10YR6/8
3　褐色粘質土7.5YR4/4
4　暗褐色土7.5YR3/4
5　暗褐色粘質土7.5YR3/3
6　橙色粘質土7.5YR6/8（撹乱）
7　褐色粘質土7.5YR4/6
8　暗褐色土7.5YR3/3
9　灰褐色粘質土7.5YR5/2
10　灰褐色粘質土7.5YR6/2
11　明褐色粘質土7.5YR5/8
12　明褐色粘質土7.5YR5/6

0　5m

第６図　調査区土層断面図②（１：100）

第７図　調査区平面図①（１：400）

第８図　調査区平面図②（１：400）

第９図　調査区平面図③（１：400）

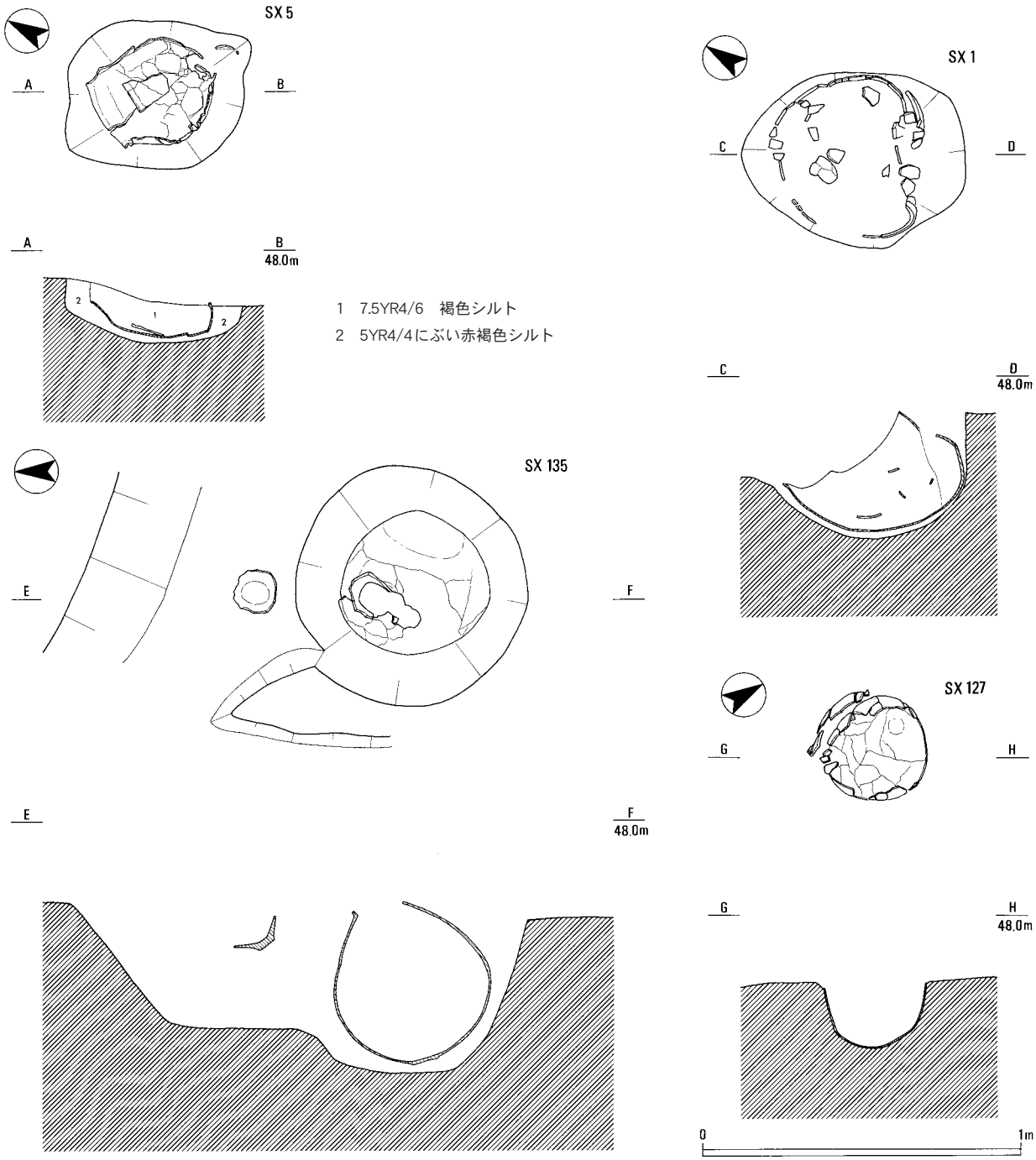
3　弥生時代の遺構

＜土器棺墓＞

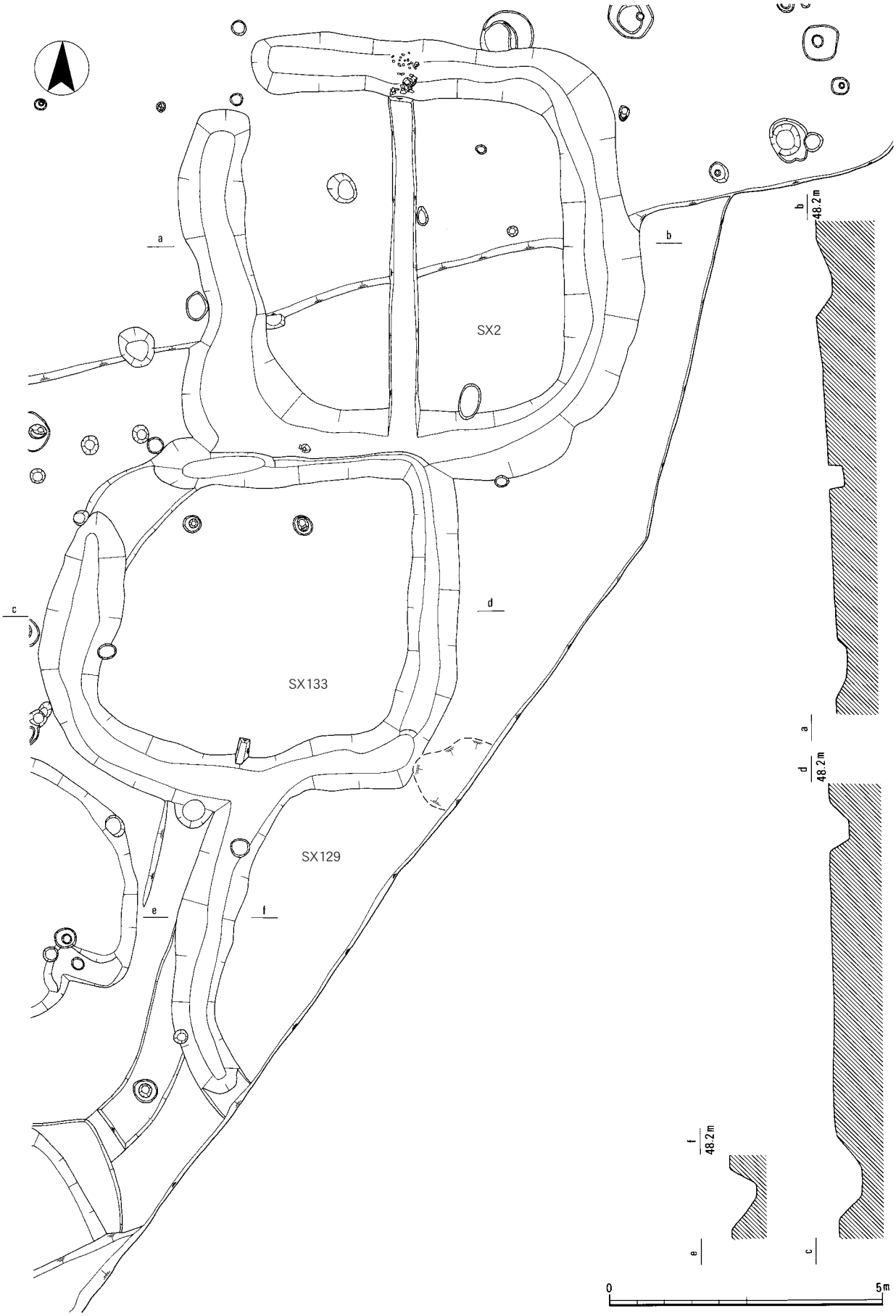
ＳＸ１　　径0.5ｍ程度のほぼ円形の掘り形に、弥生土器壺が斜位に0.25ｍほど埋設されていた。土器棺墓といえよう。口縁部がなく、体部上半部が、土圧または後世撹乱などを受けたのか、上からつぶれたかのような出土状況であった。土器については弥生時代後期前半期のものであろうか。

ＳＸ127　　長軸3.7ｍ、短軸3.4ｍ、深さ0.22ｍの楕円形の掘り形に、弥生土器壺が斜位に埋設されていた土器棺墓である。土器については弥生時代後期前半期のものであろうか。

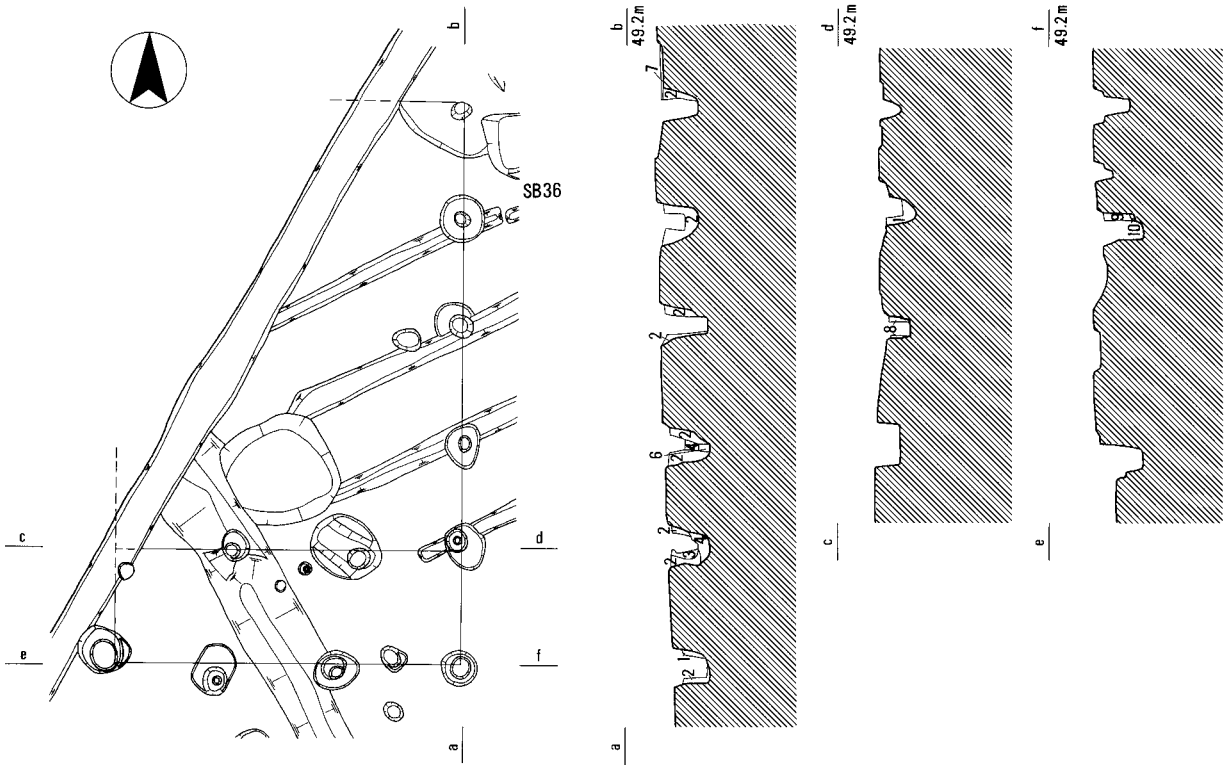
ＳＸ135　　長軸0.73ｍ、短軸0.73ｍ、深さ0.48ｍの円形の掘り形に、大型の弥生土器壺が正位に埋設されていた土器棺墓である。方形周溝墓の周溝と重複している。土器については弥生時代後期前半期のものであろうか。



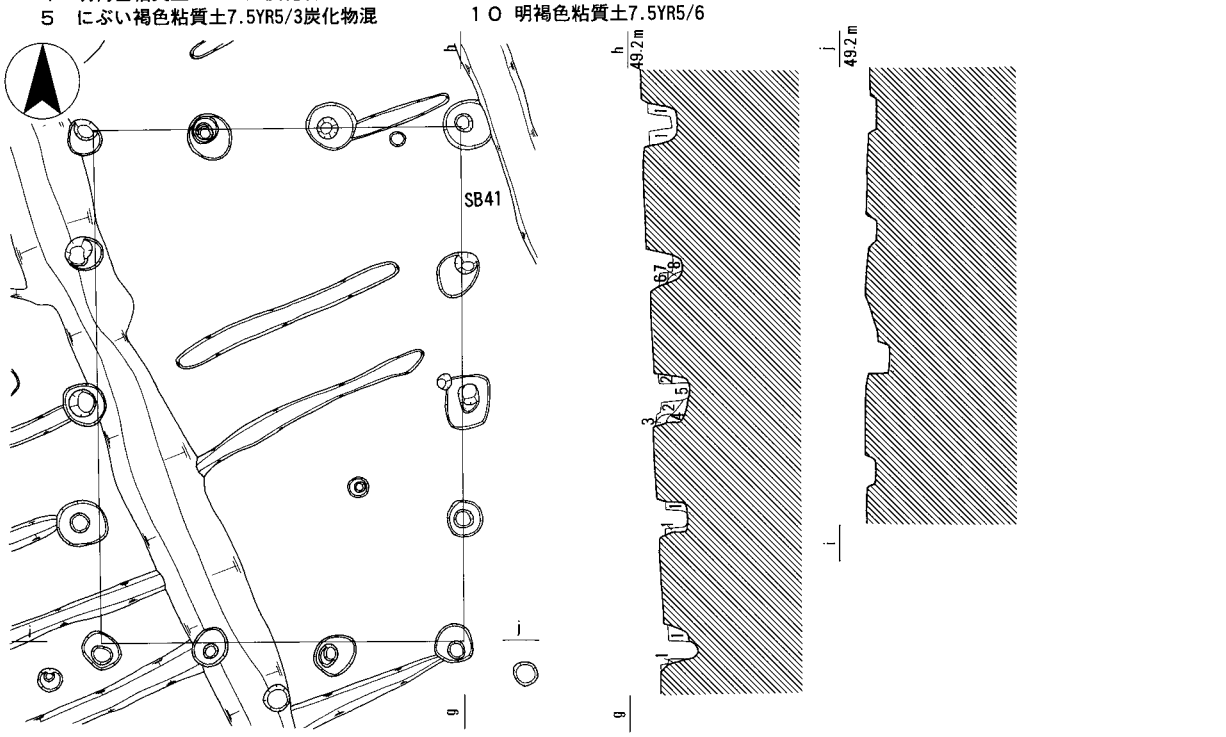
第10図　SX１,５,127,135平面図・断面図（１：20）



第11図　SX２平面図,断面図（１：100）



1　明褐色粘質土7.5YR5/8
2　灰褐色粘質土7.5YR5/2炭化物混
3　にぶい褐色粘質土7.5YR5/3
4　明褐色粘質土7.5YR5/8炭化物混
5　にぶい褐色粘質土7.5YR5/3炭化物混
6　灰褐色粘質土7.5YR6/2炭化物混
7　赤褐色粘質土（焼土）
8　暗褐色粘質土7.5YR3/4
9　褐色粘質土7.5YR4/3
10　明褐色粘質土7.5YR5/6



1　褐色粘質土7.5YR4/6
2　褐色粘質土7.5YR4/4
3　明褐色粘質土7.5YR5/8
4　明褐色粘質土7.5YR5/6
5　明黄褐色粘質土10YR6/6
6　褐色粘質土7.5YR4/4
7　明褐色粘質土7.5YR5/8
8　明褐色粘質土7.5YR5/6

0　5m

第12図　SB36・41平面図,断面図（1 ： 100）

＜方形周溝墓＞

ＳＸ2　一つの隅が途切れている形状の方形周溝墓である。周溝は幅1.1～1.4m、深さ1.2～1.7mの規模があった。周溝の内側は5.5mのほぼ正方形で盛土、主体部は残存していない。方位はＮ2.0°Ｗである。周溝から弥生時代後期前半③の壺、サヌカイトの剥片の出土を確認した。

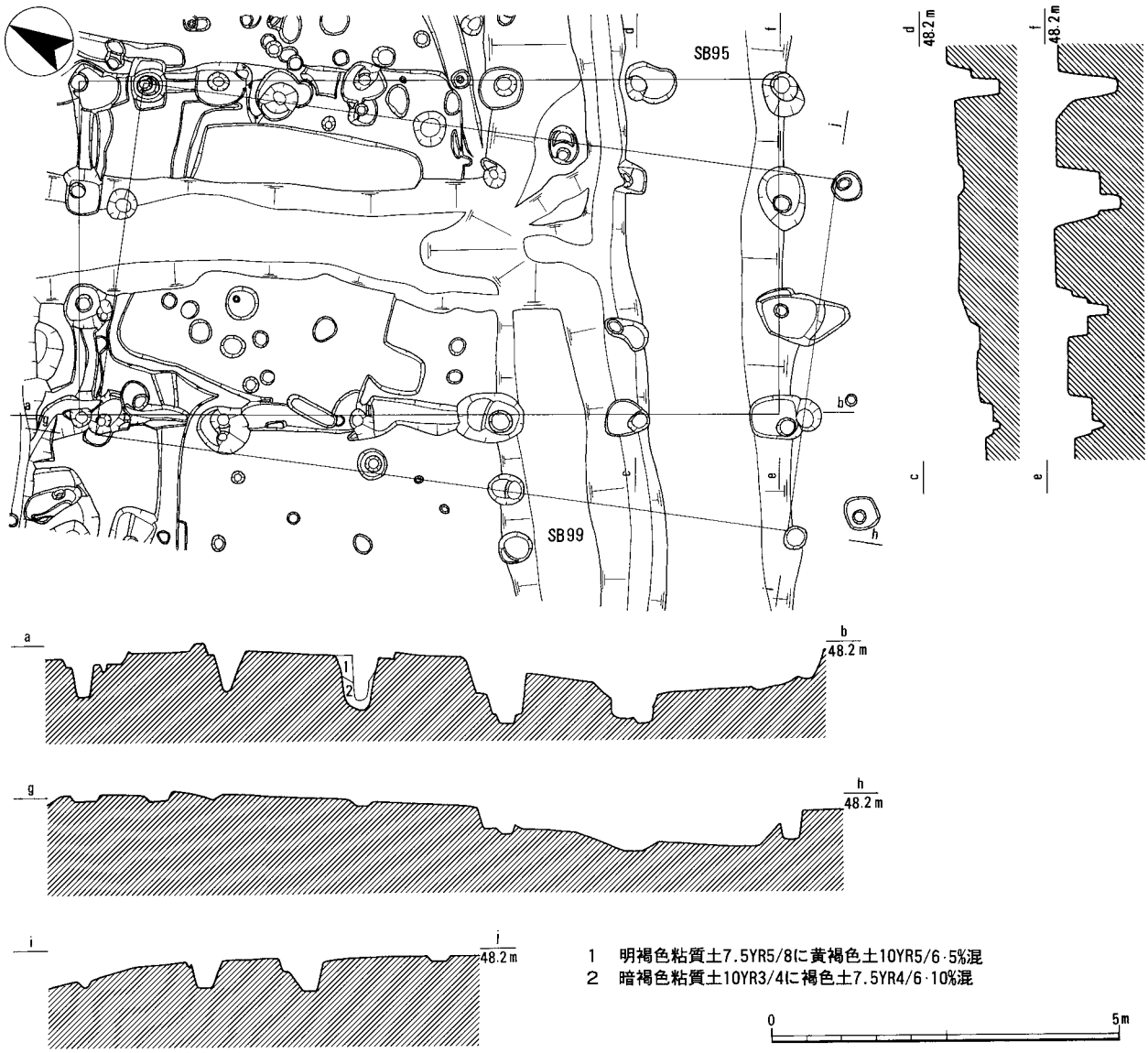
ＳＸ129　一つの隅が途切れている形状の方形周溝墓である。周溝は幅0.5～0.6m、深さ0.4mの規模があった。周溝の一つがＳＸ133の周溝と重複していた。周溝の内側は6.1mで調査区外に伸びる。周溝の内側の形はほぼ正方形になると思われる。盛土、主体部については確認できなかった。周溝から弥生土器片が少量出土した。後期に属するものであろう。

ＳＸ133　一つの隅が途切れている形状の方形周溝墓である。周溝は幅0.86～1.6m、深さ0.25～0.4mの規模があった。周溝の内側は東西5.5m、南北5.0mであった。周溝の内側の形はほぼ正方形になると思われる。盛土、主体部については確認できなかった。周溝からは土器等の遺物は確認できなかった。弥生時代後期に属するものであろうか。

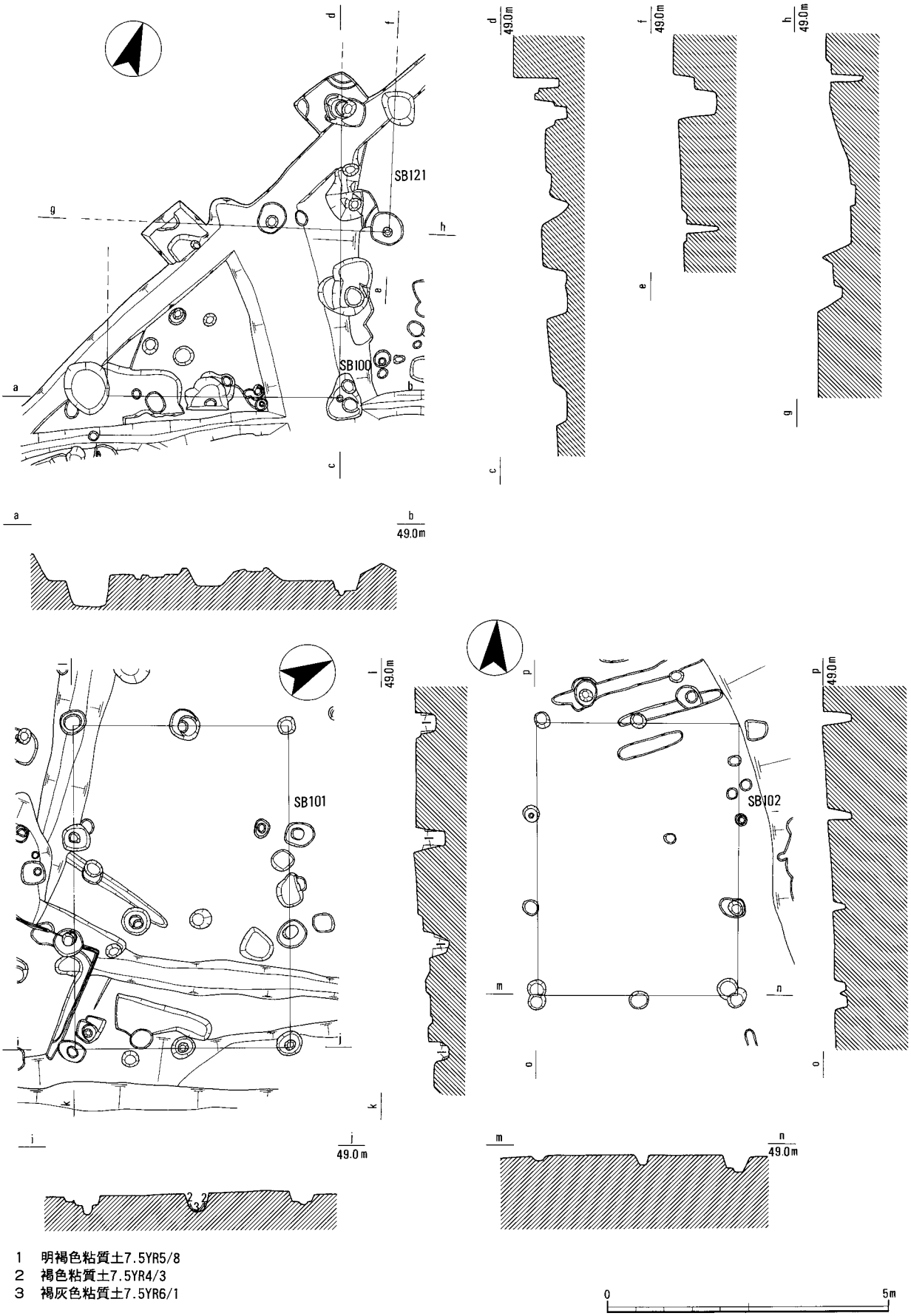
4　古代の遺構

＜掘立柱建物＞

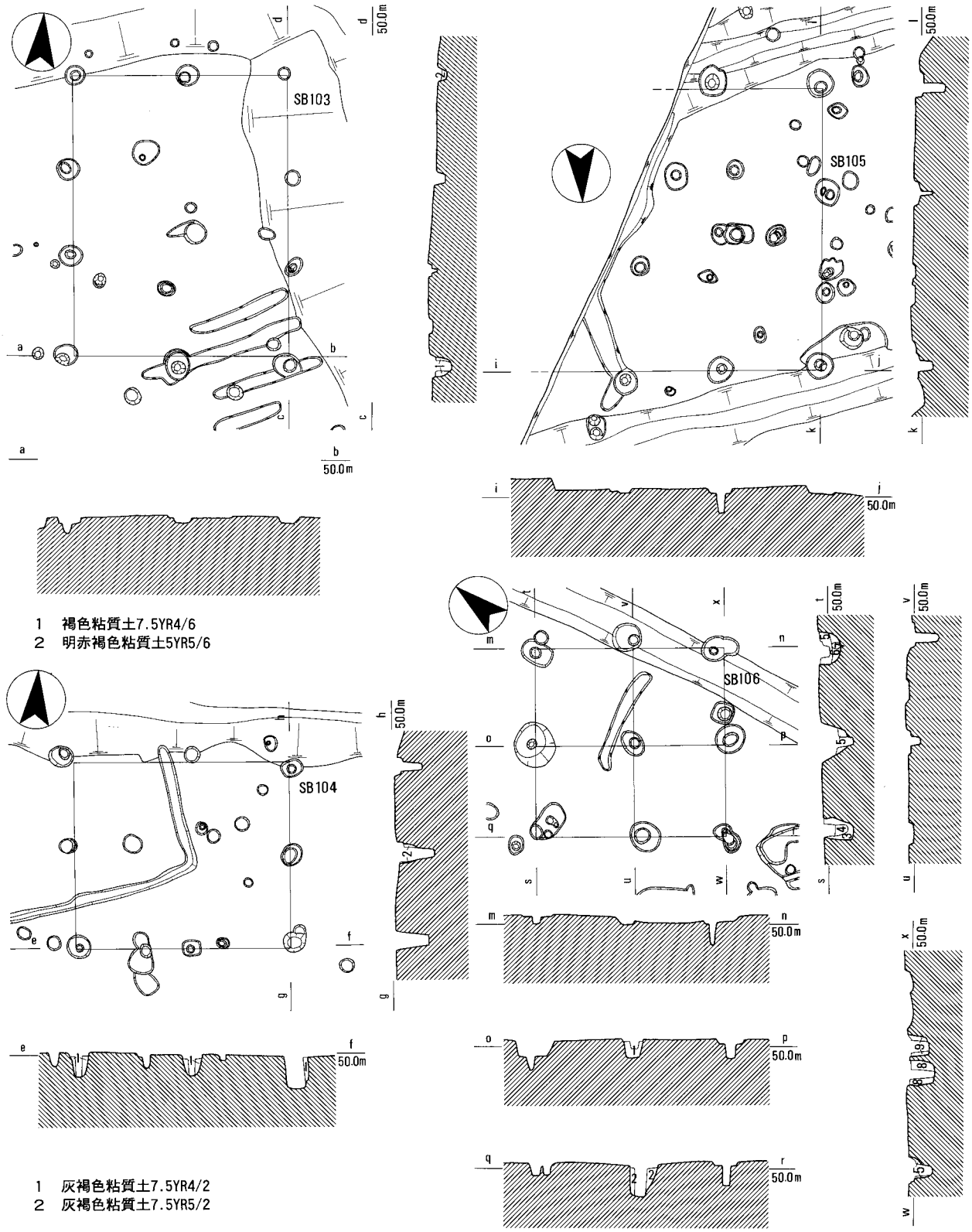
ＳＢ36　桁行４間、梁行３間の掘立柱建物である。庇１間南に延びる。調査区の西側に延びるものと考えられ、全ての柱穴を確認できたわけではない。柱



第13図　SB95・99平面図,断面図（1：100）



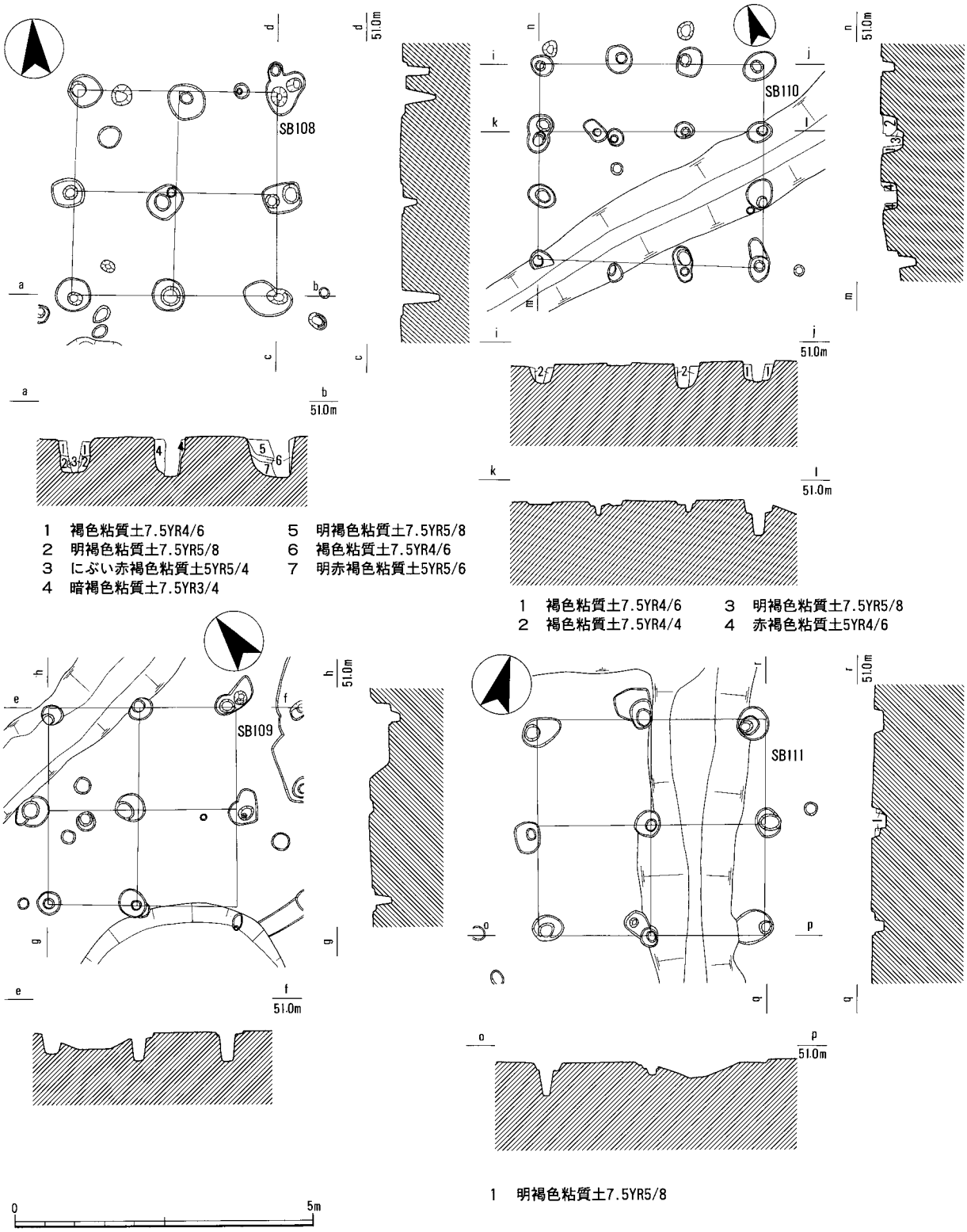
第14図　SB100・121・101・102平面図,断面図（1：100）



第15図　SB103・104・105・106平面図,断面図（1：100）

間はすべて1.7ｍの等間であった。建物の方向はＮ2.0°Ｅであった。すべての柱穴で柱痕跡を確認した。柱掘り形は円形で径0.5～0.8ｍ、柱痕跡の径0.2～0.3ｍであった。柱穴の埋土からは、土師器小片、須恵器小片が出土した。小片がほとんどであるため時期の判断が難しいが、e36pit5から須恵器短頸壺蓋が出土した。このことからこの建物は奈良時代に属するものと考えられる。

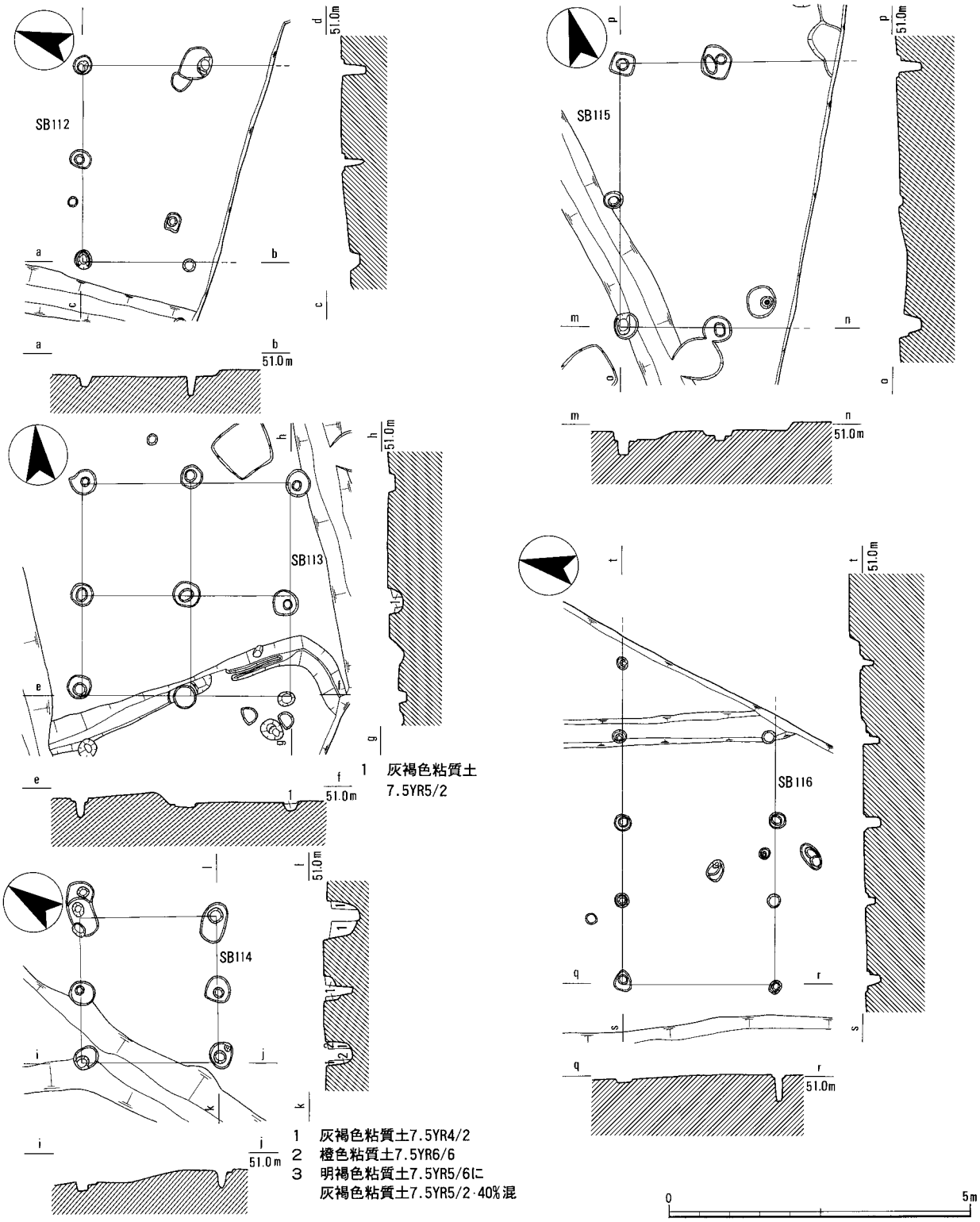
ＳＢ41　桁行４間、梁行３間の掘立柱建物である。柱穴は円形で、すべての柱穴で円形の柱痕跡を確認



第16図　SB108・109・110・111平面図,断面図（1：100）

することができた。柱間については桁行1.75m、梁行1.8mとそれぞれで等間である。建物の方向はN3.0°Eであった。それぞれの柱穴の埋土からは、飛鳥時代のものと考えられる土師器片、須恵器壺・杯身、椀状・滴状鉄滓が出土した。

ＳＢ95　桁行５間、梁行３間の掘立柱建物である。柱穴は円形で、一部で確認できた柱痕跡は円形であった。柱間については、桁行1.85m、梁行1.6mと桁行と梁行のそれぞれで等間である。建物の方向は、N28.0°Eであった。柱穴の埋土からは、飛鳥から



第17図　SB112・113・114・115・116平面図,断面図（1：100）

奈良時代にかけての土師器片、須恵器壺片が出土した。

ＳＢ99　桁行５間、梁行３間の掘立柱建物である。後世の撹乱により、全ての柱穴を確認することはできなかった。柱穴は円形で、柱間については、桁行1.95ｍ、梁行1.6ｍとそれぞれで等しくなっていた。建物の方向はＮ18.0°Ｗであった。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片、須恵器片が出土した。

ＳＢ100　桁行３間以上、梁行２間以上の掘立柱建物で、調査区外西側に延びていくようである。柱穴は円形で、柱間については、桁行1.8ｍ、梁行2.2ｍとそれぞれで等しくなっていた。建物の方向はＮ21.0°Ｗであった。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器甕片、須恵器杯蓋片などを確認した。

ＳＢ101　桁行３間、梁行２間の掘立柱建物である。柱間については、桁行1.8ｍ、梁行1.95ｍというようにそれぞれで等しくなっていた。柱掘り形は円形で、径0.5～0.6ｍで、径0.15～0.25ｍの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はＮ48.5°Ｗであった。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片、須恵器片が出土した。

ＳＢ102　桁行３間、梁行２間の掘立柱建物である。柱間については、桁行1.6ｍ、梁行1.65ｍというようにそれぞれで等しくなっていた。柱穴は円形で、径0.15～0.25ｍの柱痕跡を一部の柱穴で確認した。建物の方向はＮ5.5°Ｗであった。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向や同じ性格のものが奈良時代に属すると考えられることから同時期であろうか。

ＳＢ103　桁行３間、梁行２間の掘立柱建物である。柱間については、それぞれ1.8ｍの等間であった。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25ｍの円形の柱痕跡をほとんどの柱穴で確認した。建物の方向はＮ6.5°Ｗであった。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから奈良時代に属すると考えられることから同時期であろうか。

ＳＢ104　桁行２間、梁行２間の掘立柱建物である。柱間については、桁行1.8ｍ、梁行1.5ｍというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径0.5～0.6ｍで、径0.15～0.25ｍの柱痕跡をほとんどの柱穴で確認した。建物の方向はＮ6.0°Ｗであった。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片が出土した。

ＳＢ105　桁行２間以上、梁行２間の掘立柱建物で、調査区外に延びていくと思われる。柱間については、それぞれ1.8ｍの等間であった。柱掘り形は円形でで、径0.15～0.25ｍの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はＮ2.5°Ｗであった。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器甕片などの土師器類が出土した。

ＳＢ106　桁行２間、梁行２間の総柱建物である。柱間については、それぞれ1.6ｍの等間であった。柱掘り形はほとんどが円形で、径0.15～0.25ｍの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はＮ50.0°Ｗであった。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片が出土した。

ＳＢ108　桁行２間、梁行２間の総柱建物である。柱間については、桁行1.65ｍ、梁行1.6ｍというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25ｍの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はＮ6.0°Ｅであった。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片を確認した。

ＳＢ109　桁行2間、梁行2間の総柱建物である。柱間については、桁行1.5ｍ、梁行1.6ｍというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25ｍの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はＮ35.0°Ｅであった。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥～奈良時代に属すると考えられる。

ＳＢ110　桁行３間、梁行３間の総柱建物である可能性がある。撹乱より全ての柱穴を確認できなかったためであるが、先に述べた想定としたい。柱間については、それぞれ1.2ｍの等間であった。柱掘り形は円形で、径0.15～0.5ｍの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はＮ19.0°Ｅであっ

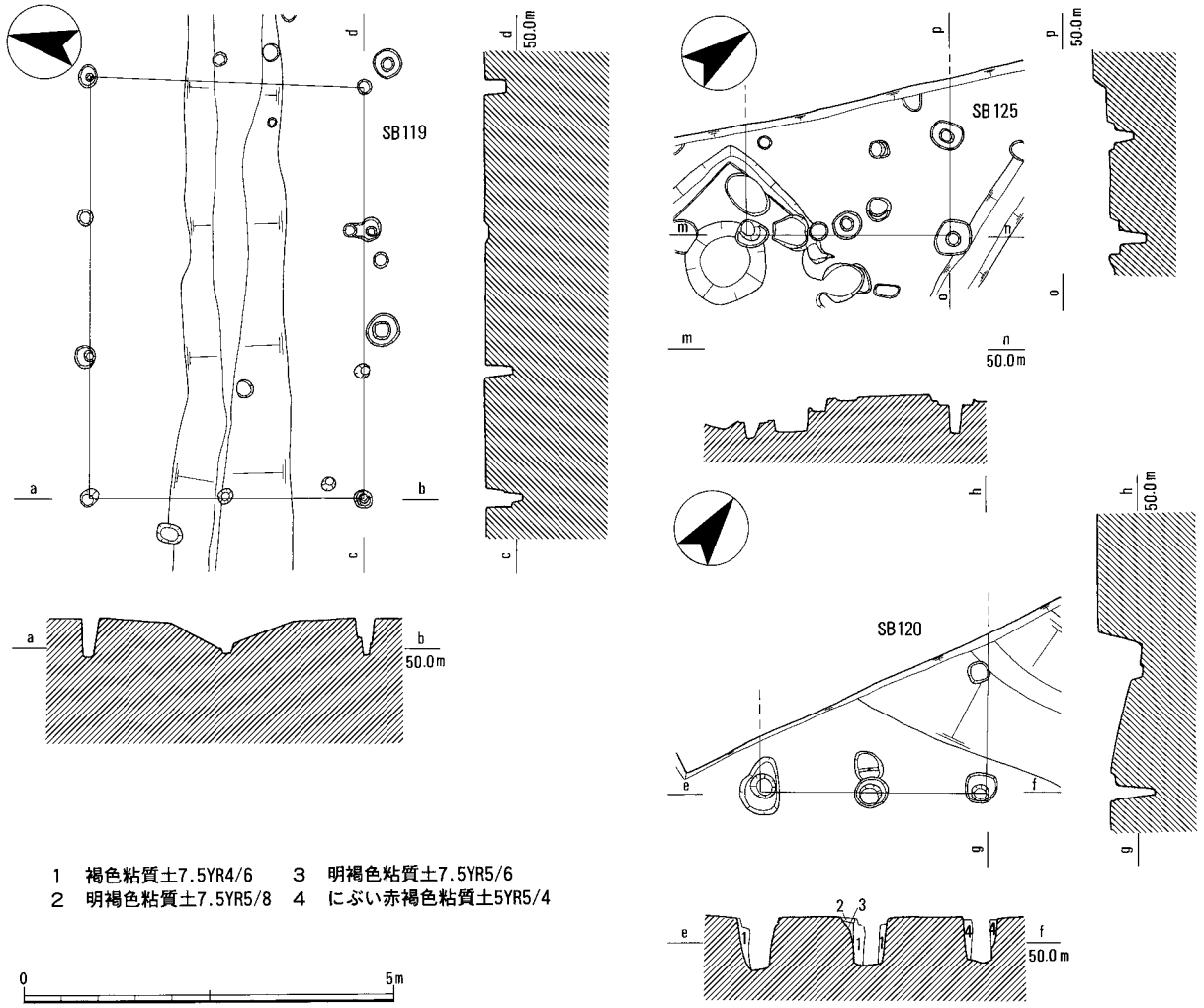
た。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥～奈良時代に属すると考えられる。

ＳＢ111　桁行２間、梁行２間の総柱建物である。柱間については、桁行1.8ｍ、梁行1.55ｍというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25ｍの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はＮ17.5°Ｗであった。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥～奈良時代に属すると考えられる。

ＳＢ112　桁行１間以上、梁行２間の掘立柱建物である。調査区外に延びていくようである。そのためすべての柱穴を確認することはできなかった。柱間については、桁行1.8ｍ、梁行1.5ｍというようにそれぞれで等しいようである。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25ｍの柱痕跡をほとんどの柱穴で確認した。建物の方向はＮ18.5°Ｗであった。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥～奈良時代に属すると考えられる。

ＳＢ113　桁行２間、梁行２間の総柱建物である。柱間については、それぞれ1.7ｍの等間であった。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25ｍの柱痕跡をほとんどの柱穴で確認した。建物の方向はＮ4.5°Ｅであった。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥～奈良時代に属すると考えられる。

ＳＢ114　桁行２間、梁行１間の掘立柱建物である。柱間については、桁行1.25ｍ、梁行2.1ｍというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径

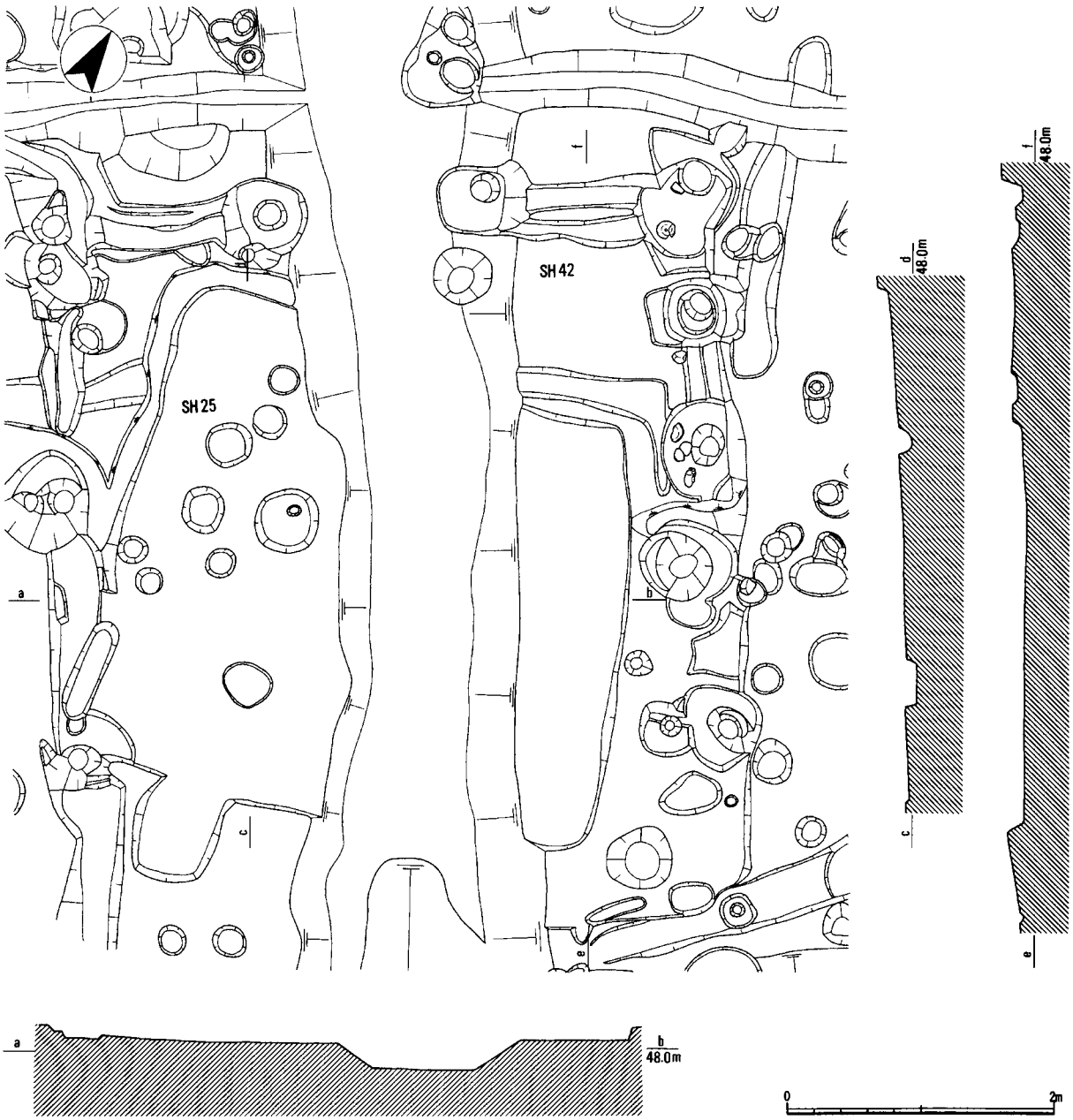


第18図　SB119・120・125平面図,断面図（1：100）

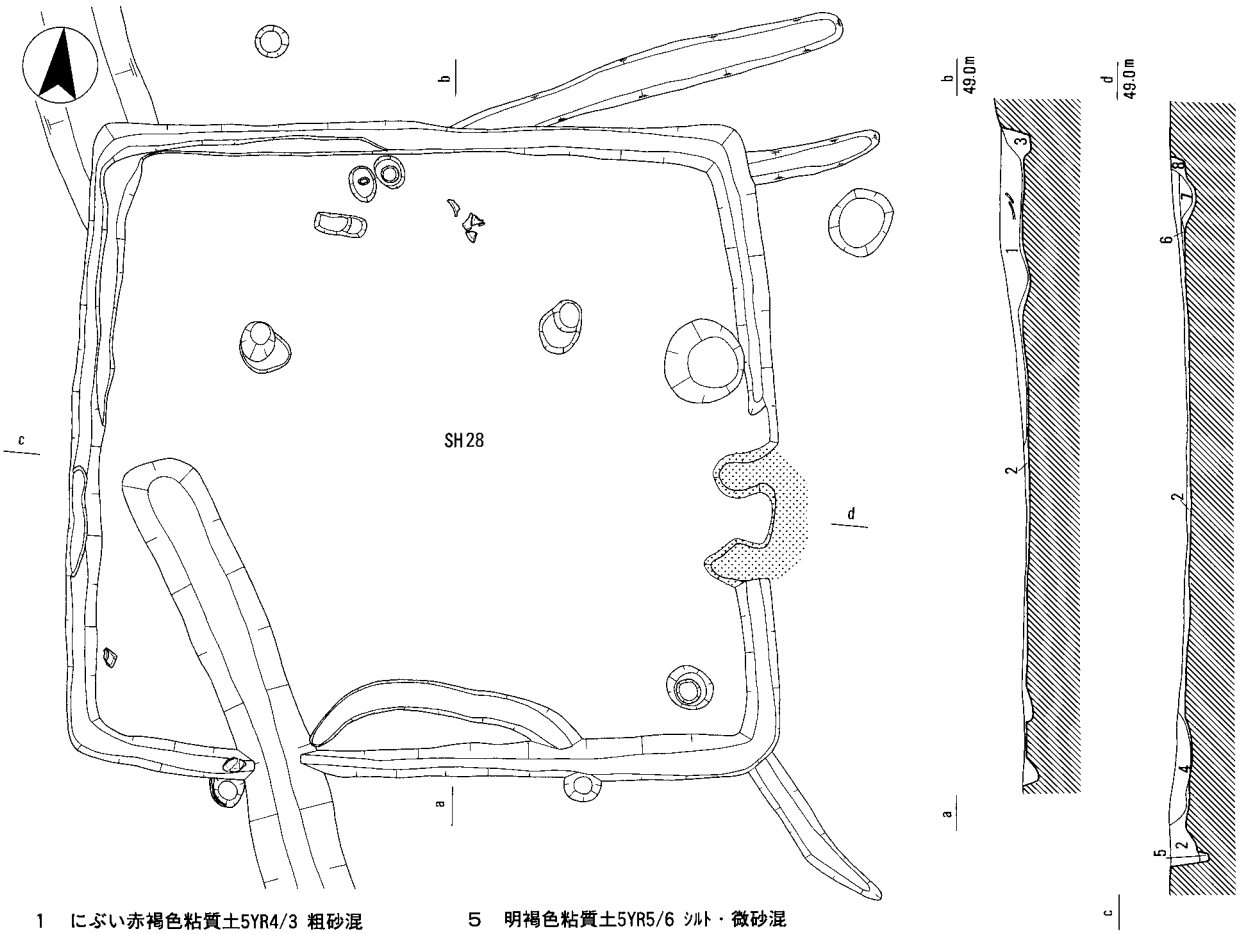
0.15～0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片がK11pit1から出土した。

ＳＢ115　桁行1間以上、梁行2間の掘立柱建物である。調査区外に延びていくようである。すべての柱穴を確認することができなかったため、全容は把握できていない。柱間については、桁行1.6m、梁行2.0mというようにそれぞれで等しいようである。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はＮ15.0°Ｅであった。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向や同じ性格のものが飛鳥時代に属すると考えられることから同時期であろうか。

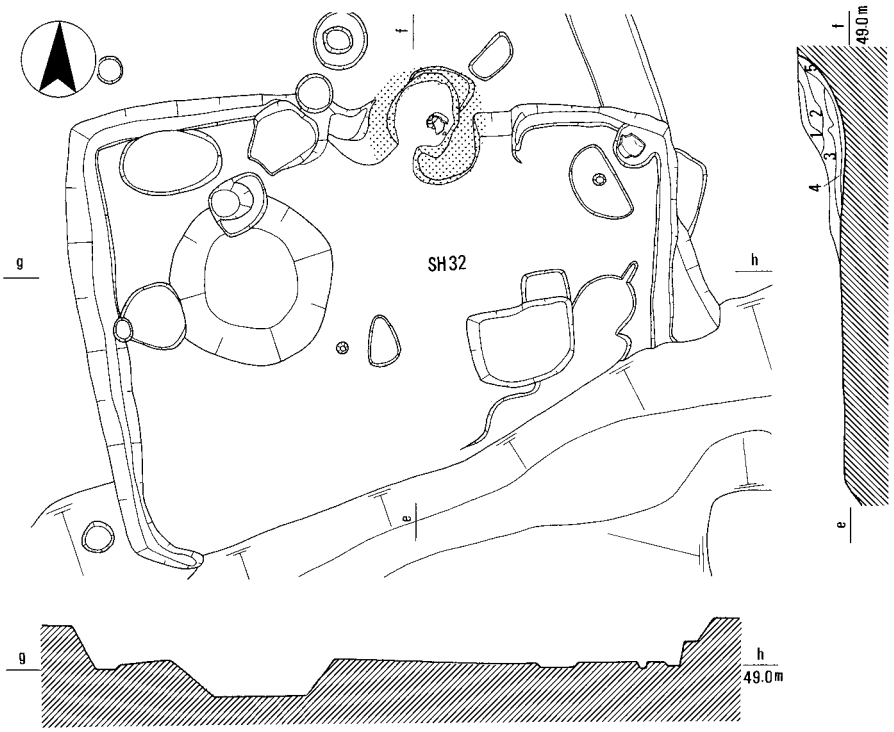
ＳＢ116　桁行４間以上、梁行１間の掘立柱建物である。柱間については、桁行1.3m、梁行2.4mというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25mの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はＮ79.0°Ｅであった。建物の規模から住居以外での使用が想定できよう。柱穴の埋土



第19図　SH25・42平面図,断面図（1：50）



1　にぶい赤褐色粘質土5YR4/3 粗砂混
2　にぶい褐色粘質土7.5YR5/3 粗砂混
3　赤褐色粘質土5YR4/8 細砂混
4　明褐色ｼﾙﾄ7.5YR5/6 粗砂混
5　明褐色粘質土5YR5/6 ｼﾙﾄ・微砂混
6　暗褐色粘質土7.5YR3/3 微砂混・炭化物混
7　暗赤褐色粘質土5YR3/4 焼土混
8　暗赤褐色粘質土5YR3/6 細砂混



1　にぶい褐色粘質土7.5YR6/3
2　明赤褐色粘質土5YR5/8
3　暗赤褐色粘質土5YR3/6
4　極暗赤褐色粘質土5YR2/3
5　赤褐色粘質土2.5YR4/8

0　2m

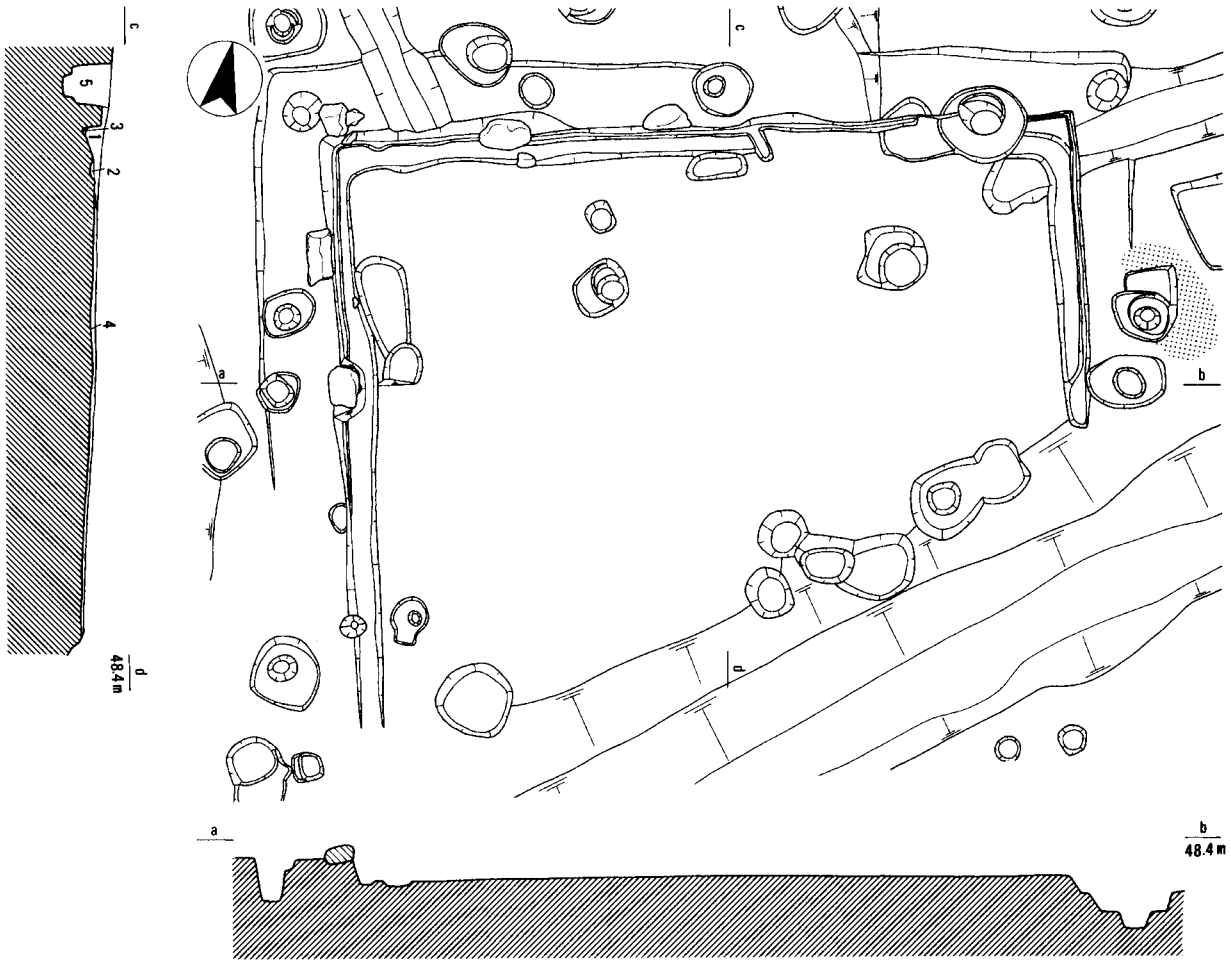
第20図　SH28・32平面図,断面図（1：50）　※網点は焼土

からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器片がK6pit1から出土した。

ＳＢ119　後世の撹乱によりすべての柱穴を確認できたわけではないが、桁行３間、梁行２間の掘立柱建物とした。柱間については、桁行2.1ｍ、梁行1.8ｍというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25ｃｍの柱痕跡をほとんどの柱穴で確認した。建物の方向はＮ73.0°Ｅであった。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥から奈良時代に属するものと考えられる。

ＳＢ120　桁行１間以上、梁行２間の掘立柱建物である。調査区外に延びていくようである。そのため、全ての柱穴を確認することができなかった。柱間については、桁行1.6ｍ、梁行1.45ｍというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25ｍの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はＮ37.0°Ｗであった。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥から奈良時代に属するものと考えられる。

ＳＢ121　桁行２間以上、梁行２間以上の掘立柱建物と考えたい。調査区外に延びていくようである。そのため、全ての柱穴を確認することができなかった。柱間については、桁行2.1ｍ、梁行2.0ｍというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25ｍの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はＮ19.0°Ｅであった。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥から奈良時代に属する



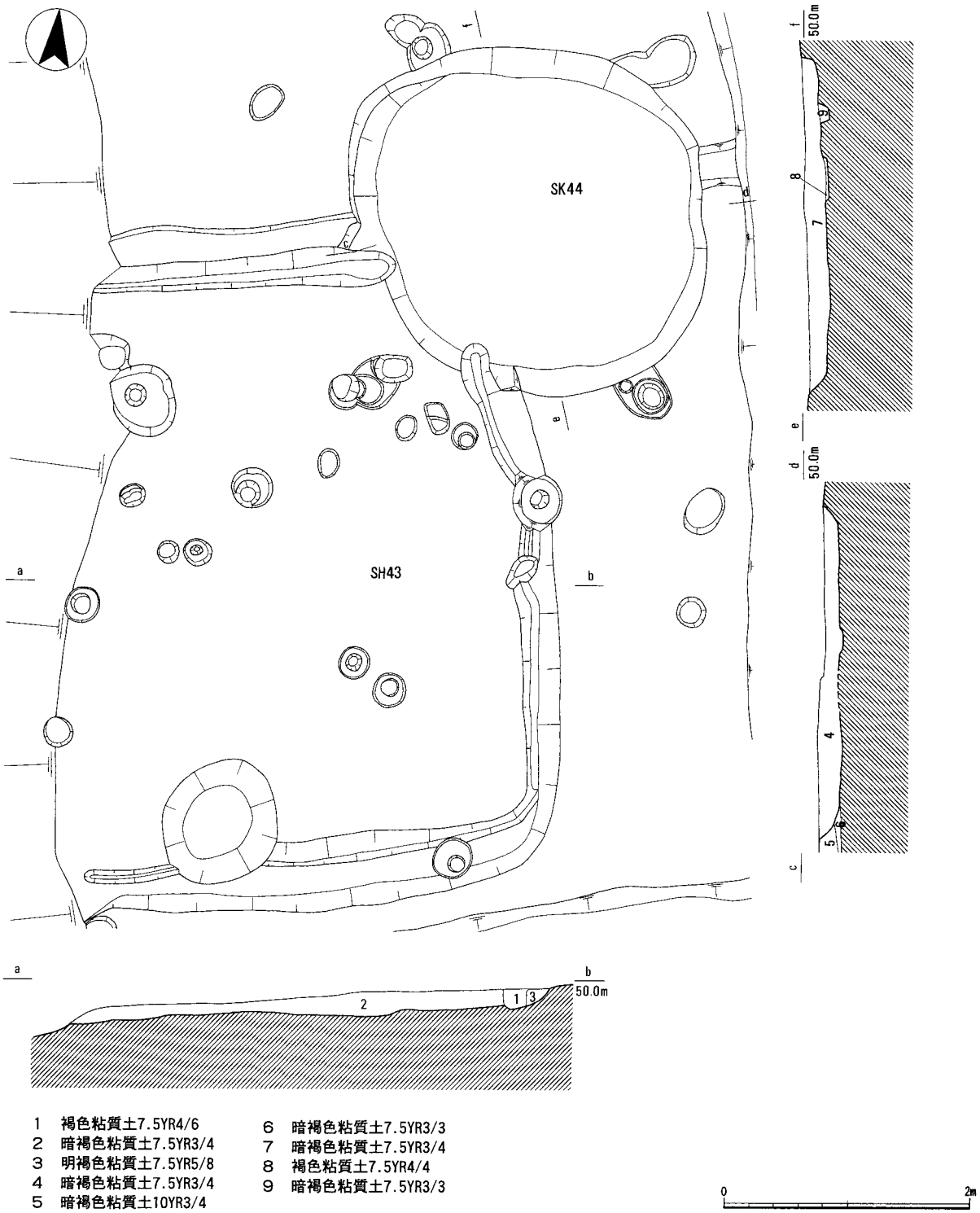
1　褐色粘質土7.5YR4/6
2　暗赤褐色粘質土5YR3/6
3　明褐色粘砂質土7.5YR5/6
4　赤褐色粘質土5YR4/6（床土）
5　にぶい赤褐色粘質土5YR6/6（柱穴埋土）

0　2m

第21図　SH35平面図,断面図（１：50）　※網点は焼土

ものと思われる。

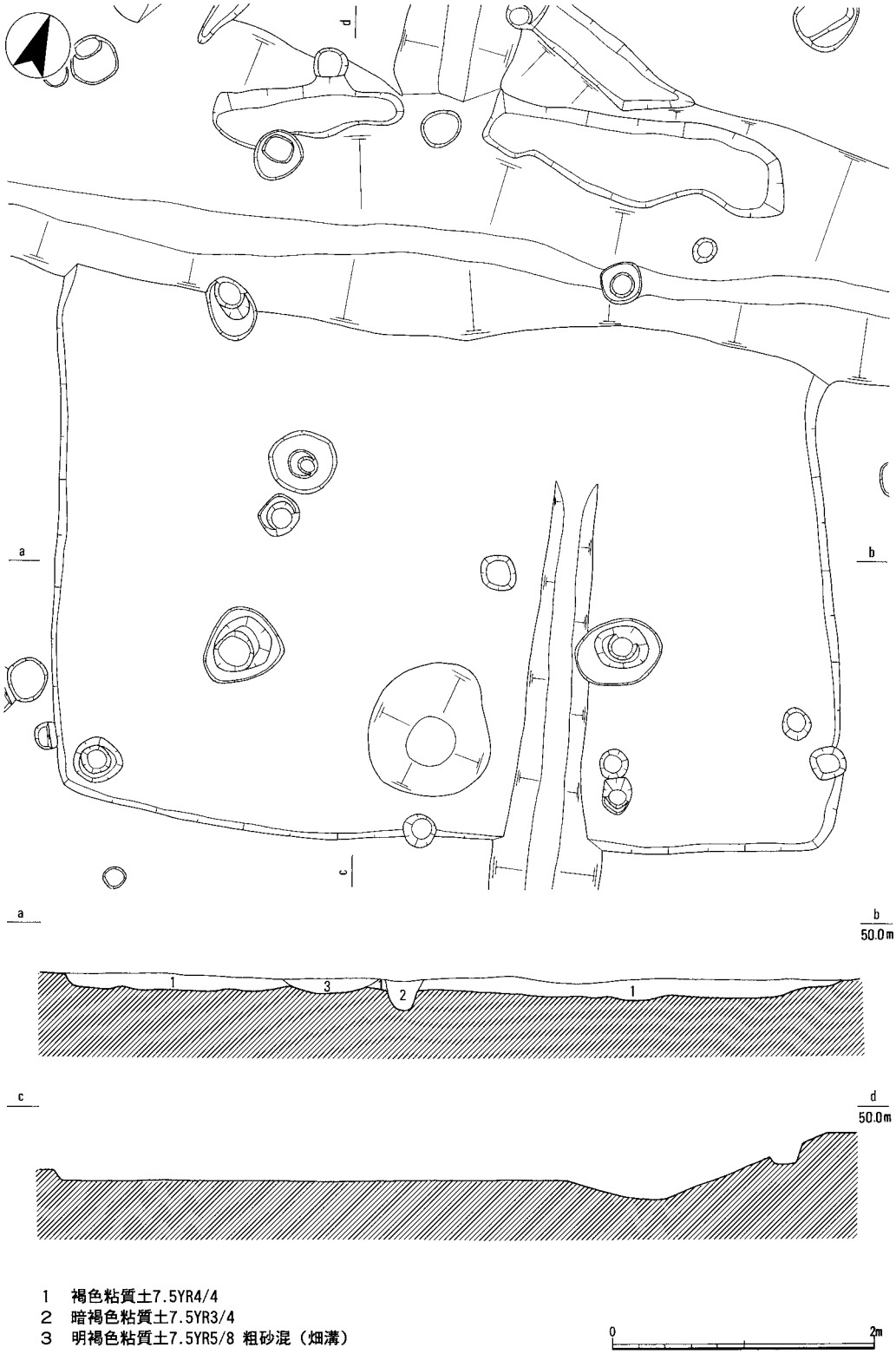
ＳＢ125　桁行１間以上、梁行３間の掘立柱建物である。調査区外に延びていくようである。そのため、全ての柱穴を確認することができなかった。柱間については、桁行1.5ｍ、梁行1.3ｍというようにそれぞれで等しい。柱掘り形は円形で、径0.15～0.25ｍの柱痕跡をそれぞれの柱穴で確認した。建物の方向はＮ34.5°Ｅであった。柱穴の埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、建物の方向などから飛鳥から奈良時代に属するものと考えられる。



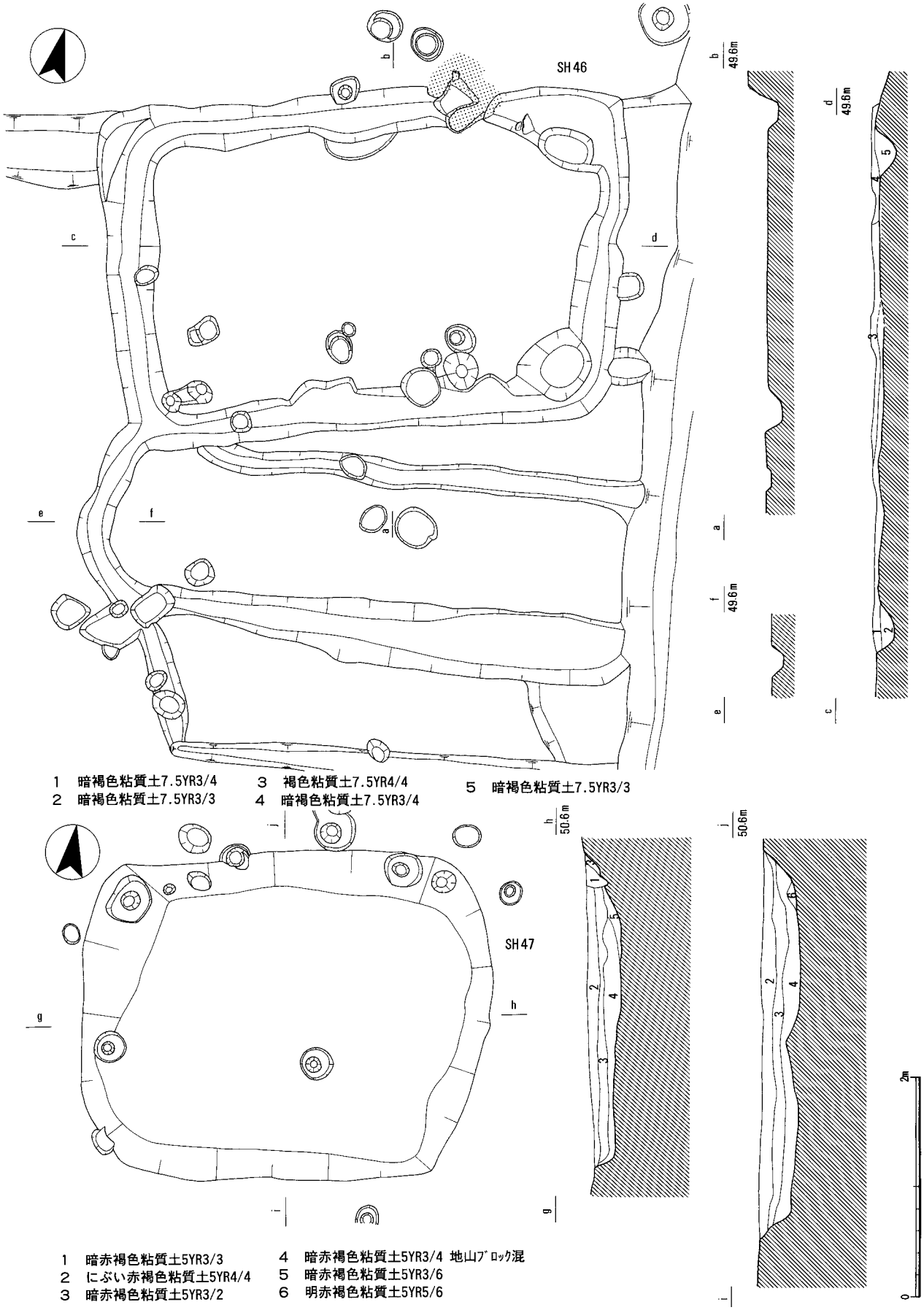
第22図　SH43・SH44平面図,断面図（１：50）

＜竪穴住居＞

ＳＨ25　一辺3.3ｍ、深さ0.05ｍ、隅丸方形の竪穴住居と考えられる。ほぼ中央が後世の撹乱を受けていて、全体を確認することはできなかった。建物方向はＮ21.0°Ｗである。先に述べたようなことから竈跡は確認できなかった。遺構埋土から奈良時代のものと思われる土師器片、須恵器片が少量出土した。



第23図　SH45平面図,断面図（1：50）



第24図　SH46・47平面図,断面図（1：50）　※網点は焼土

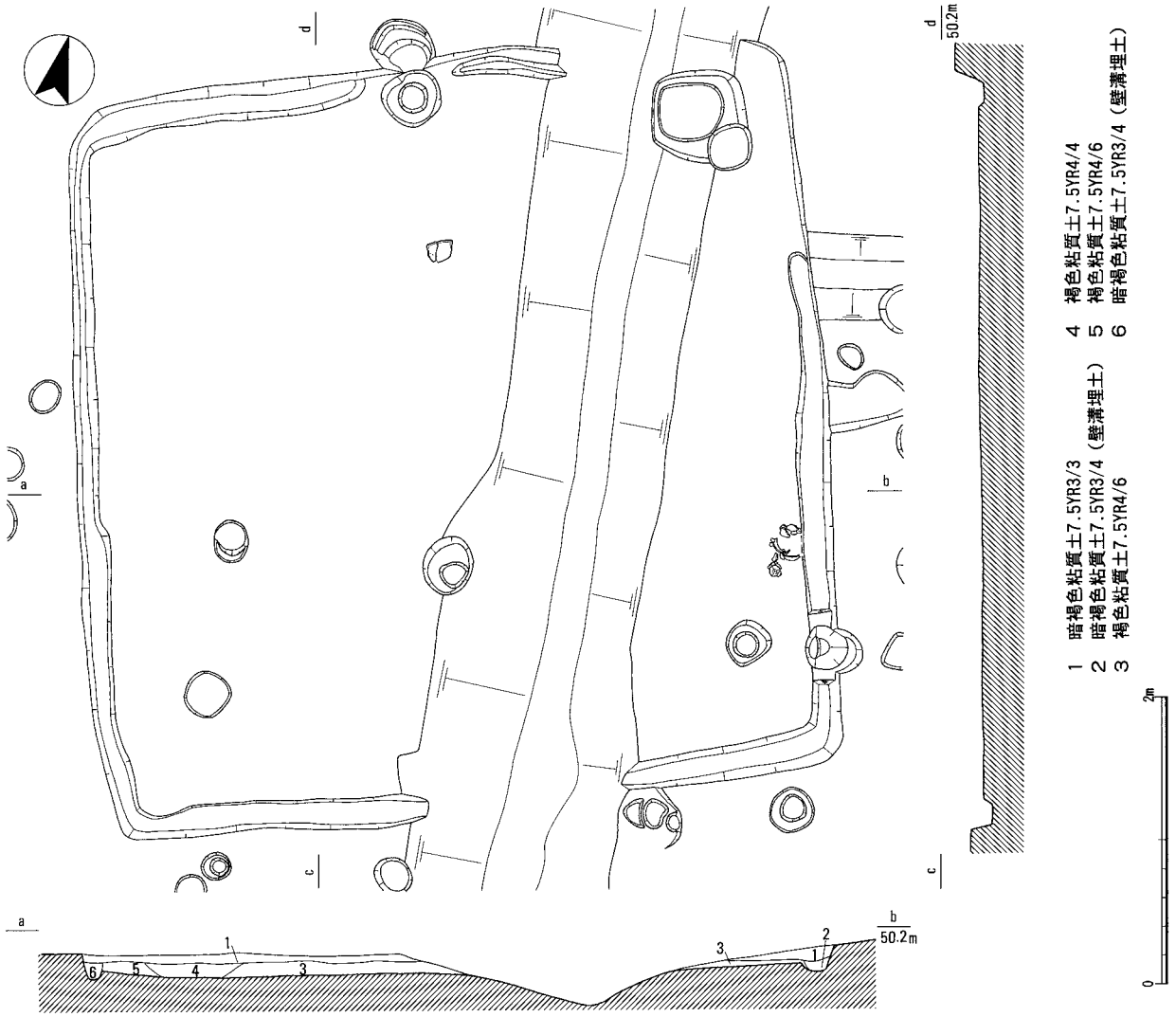
ＳＨ28　長軸4.7m、短軸4.3m、深さ0.14m、隅丸方形の竪穴住居である。建物方向はＮ7.0°Ｗである。竈跡は東辺のほぼ中央に、壁周溝は遺構全周を巡ることを確認した。遺構埋土からは奈良時代に属すると思われる土師器甕口縁部片、須恵器台付杯片などが少量出土した。

ＳＨ32　長軸4.0m、短軸2.5m以上、深さ0.3m、隅丸長方形の竪穴住居である。建物方向はＮ9.0°Ｗである。撹乱溝に切られており全体の様相は判然としない。竈跡は北辺の中央東寄りに確認することができた。壁周溝について確認できた遺構部分の全周を巡る。遺構埋土からは奈良時代と思われる土師器甕・台付杯片、須恵器杯・杯蓋片、砥石が出土した。

ＳＨ35　長軸5.7m、短軸3.4m以上、深さ0.15m、隅丸方形の竪穴住居である。現代溝に南辺を切られていたので、全容を確認することができなかった。建物方向はＮ15.5°Ｅである。遺構埋土からは飛鳥時代に属すると考えられる土師器片、須恵器高杯・杯片などが少量出土した。

ＳＨ42　長軸5.5m以上、短軸1.4m以上、深さ0.25m、隅丸方形の竪穴住居であろうか。撹乱や遺構の重複により、全容を確認することはできなかった。遺構埋土からは、奈良時代のものと考えられる土師器甕片、須恵器高杯・杯片、土錘、鉄滓などが出土した。

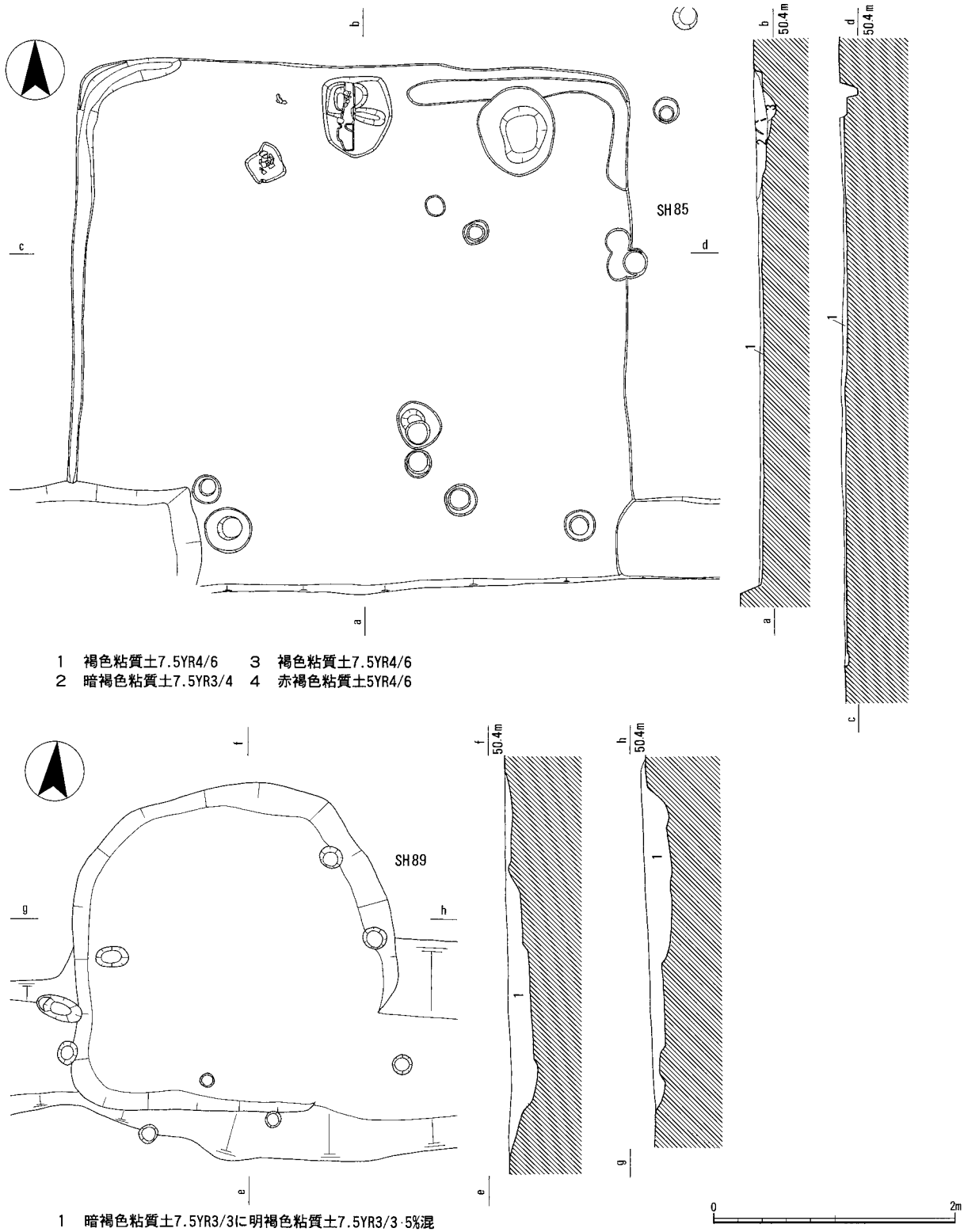
ＳＨ43　長軸5.2m、短軸3.5m以上、深さ0.14m、隅丸方形の竪穴住居である。撹乱溝に切られており、平面プランが原形をとどめていないものの、概ね正方形を呈していたものと考えられる。建物方向はＮ10.0°Ｗである。竈跡については、撹乱を受けてい



第25図　SH64平面図,断面図（1：50）

ることもあり確認できなかった。確認できた遺構を巡るように壁周溝を確認することができた。遺構埋土からは、奈良時代のものと思われる土師器小片、須恵器小片が少量出土した。

ＳＨ45　　長軸5.7ｍ、短軸5.6ｍ、深さ0.15ｍ、隅丸方形の竪穴住居と考えられる。構成の撹乱を受けているので、全容や竈後を確認することはできなかった。同様に壁周溝も確認することができなかった。建物方向はＮ20.0°Ｗである。遺構埋土から飛鳥から奈良時代のものと思われる土師器甕、須恵器杯蓋



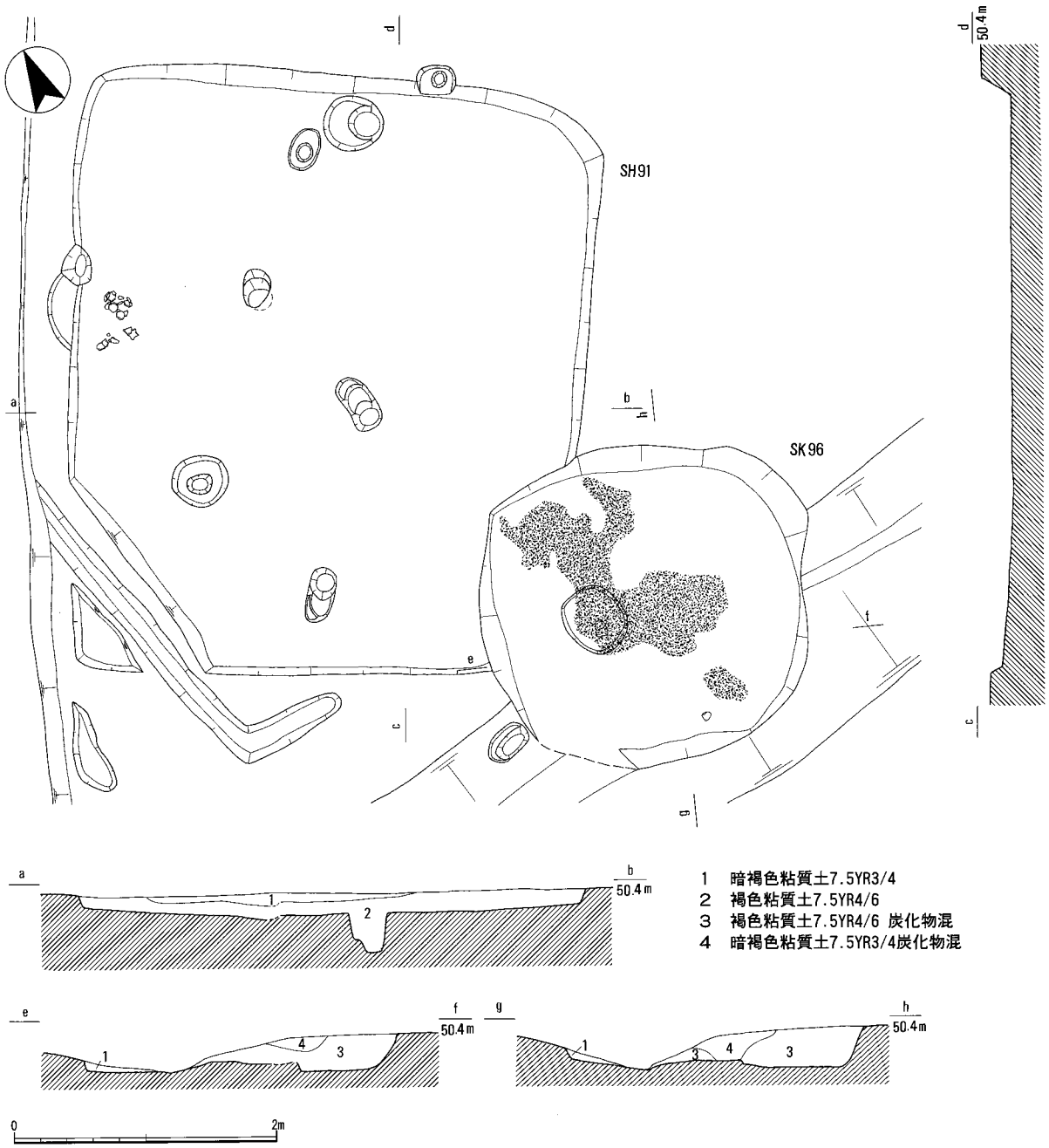
第26図　SH85・89平面図,断面図（1：50）

などが出土した。出土遺物のほとんどが土師器類であった。

ＳＨ46　長軸5.7m、短軸5.6m、深さ0.09m、隅丸長方形の竪穴住居である。方位はＮ19.5°Ｗである。竈跡は北辺東寄りで確認した。壁周溝については、遺構の全周を巡る。その北西端から排水溝と考えられる溝が南へ２m程延びる。竈跡が北辺中央になく、何らかの作業を行う空間を意識したものなのだろうか。遺構埋土から飛鳥から奈良時代ものと思われる土師器甕、須恵器杯蓋などが出土した。ほとんどが土師器類であった。

ＳＨ47　長軸3.6m、短軸3.0m、深さ0.34m、隅丸方形の竪穴住居と考えられる。建物方向はＮ6.0°Ｗである。遺構埋土からは奈良時代のものと思われる土師器甕、須恵器壺などが出土した。

ＳＨ52　長軸5.0m以上、短軸2.0m以上、深さ0.12m、隅丸方形の竪穴住居であろうか。平面プランは、撹乱や遺構の重複により本来の形をとどめていない。残存していた住居跡の床面から立ち上がる部分には、幅0.35m、深さ0.04～0.14mの壁周溝



第27図　SH91・SK96平面図,断面図（１：50）　※スクリーントーンは炭化物

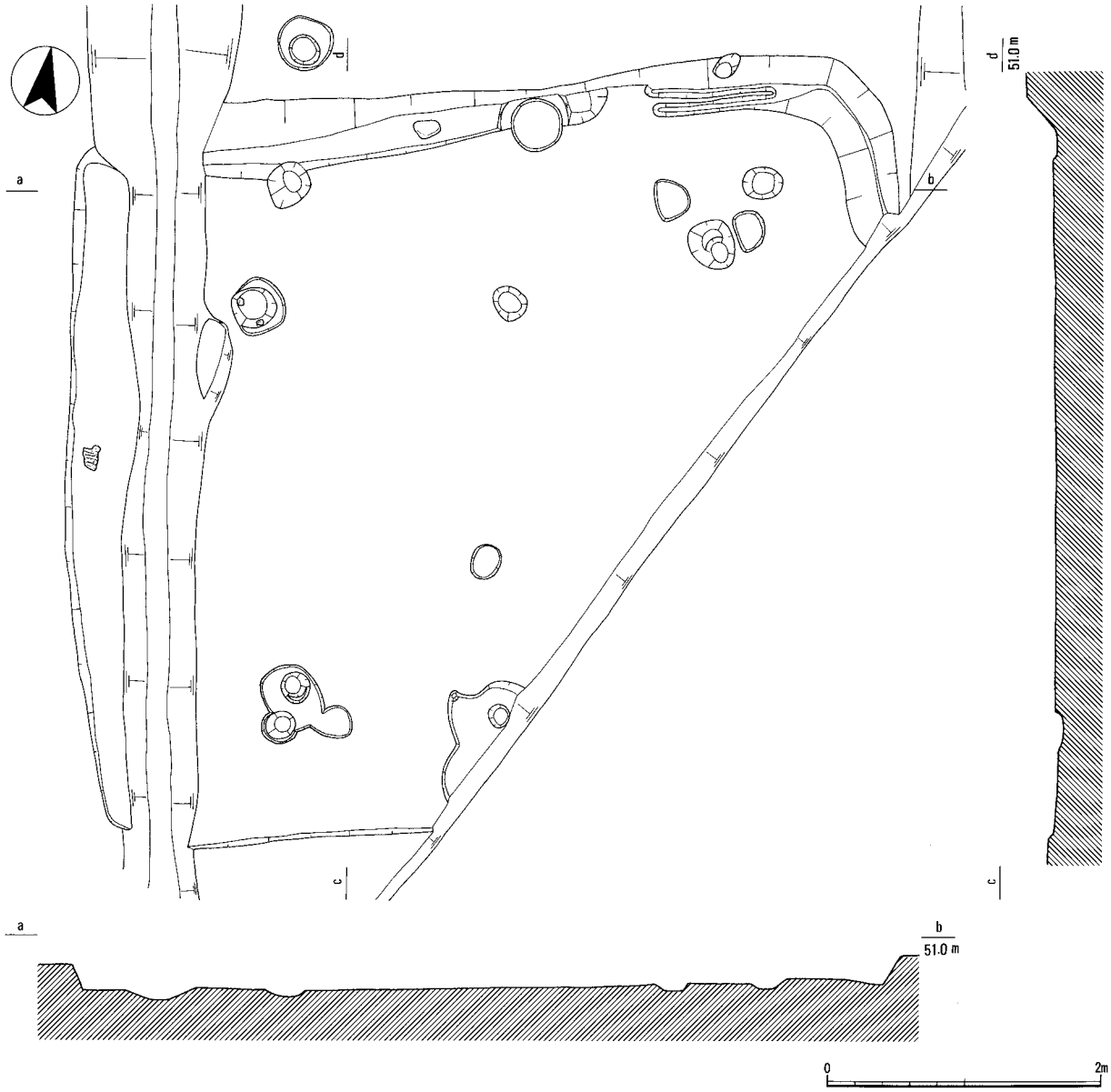
も確認できた。遺構埋土からは奈良時代のものと思われる土師器片を確認した。

ＳＨ64　長軸5.3ｍ、短軸5.0ｍ、深さ0.15ｍの竪穴住居である。平面プランは隅丸方形である。建物方向はＮ18.0°Ｗである。竈跡は北辺のほぼ中央に残骸を確認した。遺構埋土からは、飛鳥時代に属すると考えられる土師器甕片、須恵器短頸壺・杯身片、鉄滓などが出土した。出土した遺物のほとんどが土師器類であった。

ＳＨ85　長軸4.64ｍ、短軸4.25ｍ以上、深さ0.08ｍ。隅丸方形の竪穴住居と考えられる。建物方向はＮ2.0°Ｅである。一部で壁周溝を確認することができたが、竈跡は確認することができなかった。撹乱等により、全容を確認することができなかった。遺構埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器甕などを確認した。

ＳＨ89　長軸3.28ｍ、短軸2.7ｍ、深さ0.2ｍ、隅丸方形の竪穴住居である。建物方向はＮ2.0°Ｗである。壁周溝、竈跡は確認できなかった。遺構埋土からは土師器片が少量出土した。土器が小片であり少量であるので、所属時期の判断に苦しむが、遺構形態から奈良時代に属するものと考えられる。

ＳＨ91　長軸3.7ｍ、短軸3.25ｍ、深さ0.2ｍ、隅丸方形の竪穴住居である。壁周溝、竈跡は確認できなかった。建物方向はＮ29.5°Ｗである。遺構埋土からは、奈良時代に属すると考えられる土師器甕片



第28図　SH98平面図,断面図（１：50）

などが出土し、それらはすべて土師器類であった。

ＳＨ98　長軸5.32ｍ、短軸2.4ｍ以上、深さ0.21ｍの竪穴住居である。調査区外に遺構が延びているので推測の域をでないが、平面プランは隅丸方形を呈していたのだろうか。建物方向はＮ13.0°Ｗである。竈跡は北辺のほぼ中央に基底部底の一部を確認した。遺構が残存する一部分で壁周溝を確認することができた。遺構埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、飛鳥時代に属するものと考えられる。

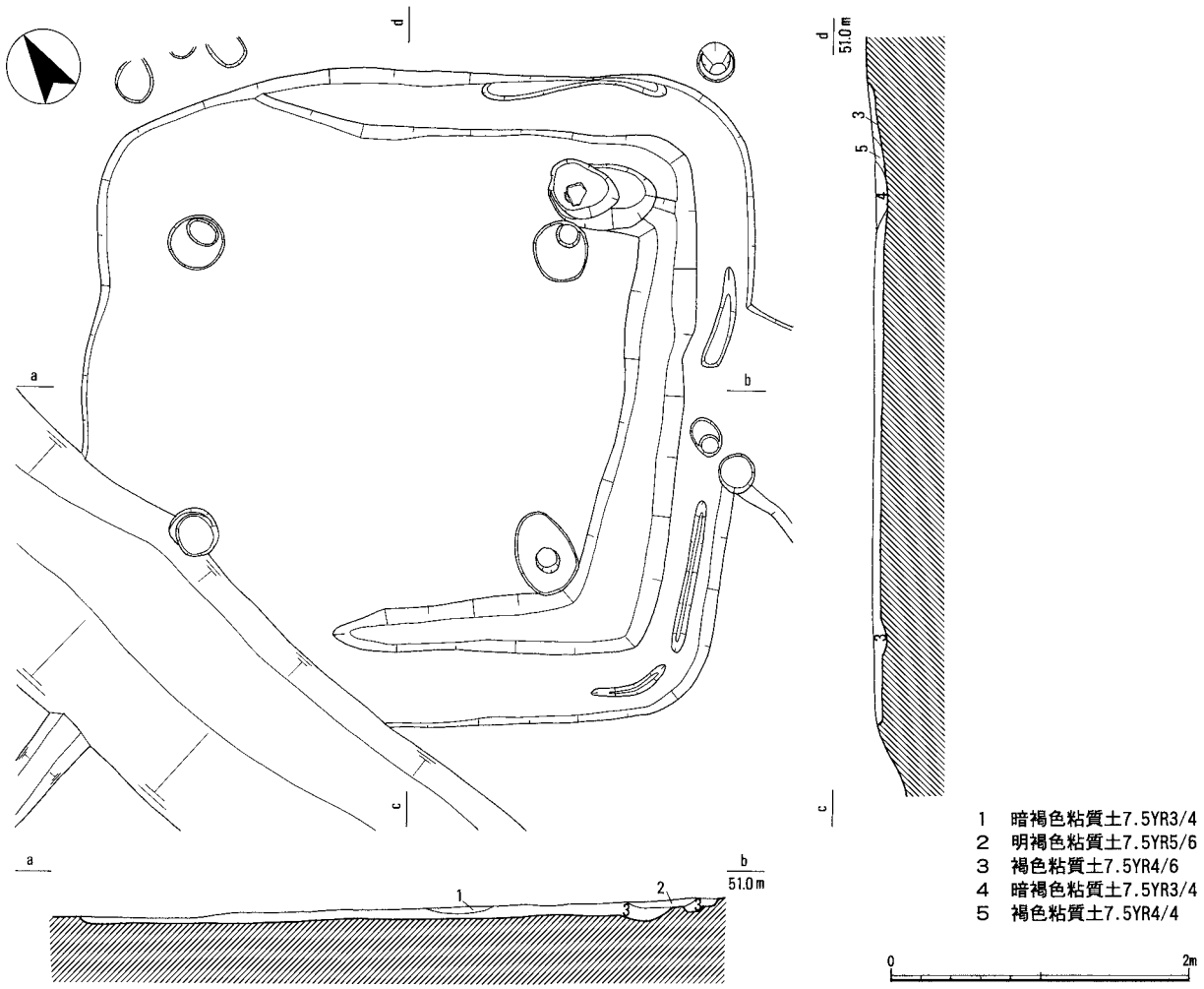
ＳＨ107　長軸4.4ｍ、短軸4.25ｍ、深さ0.18ｍ、隅丸方形の竪穴住居である。建物方向はＮ39.0°Ｅである。竈跡や壁周溝は確認することができなかった。遺構埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、飛鳥時代に属すると考えられる。

ＳＨ126　長軸4.5ｍ、短軸4.0ｍ、深さ0.4ｍ、竪穴住居であろうか。不整形な方形であった。壁周溝や竈は確認することができなかった。遺構埋土からは、奈良時代に属すると考えられる土師器甕・杯片、須恵器壺・杯蓋、鉄滓などが出土した。

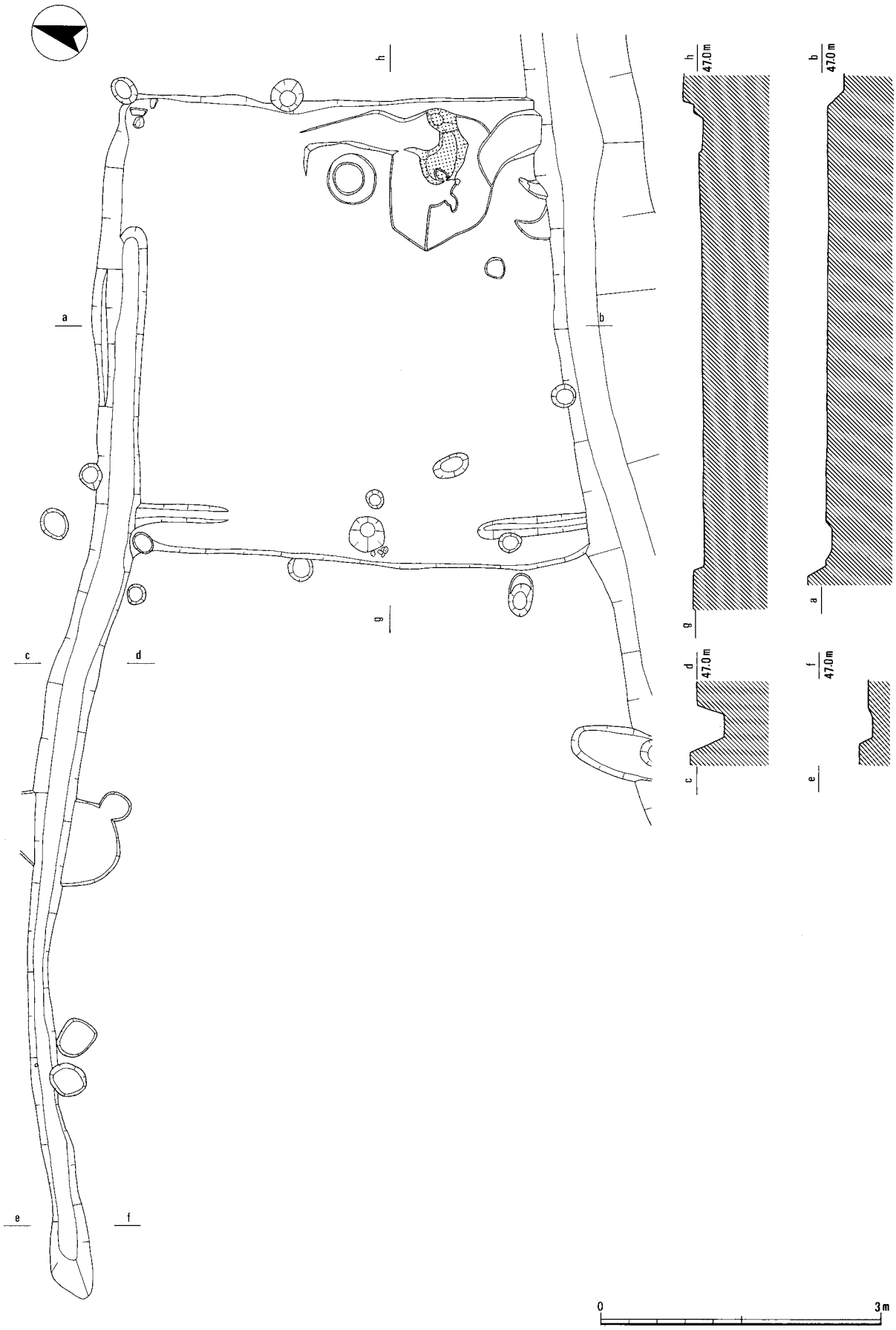
ＳＨ128　長軸3.9ｍ、短軸3.0ｍ、深さ0.35ｍ、竪穴住居であろうか。不整形な方形であった。竈跡や壁周溝は確認することができなかった。遺構埋土からは、奈良時代に属すると考えられる土師器甕・杯蓋片、須恵器壺片などが出土した。

ＳＨ136　長軸5.0ｍ、短軸4.5ｍ、深さ0.23ｍ、隅丸方形の竪穴住居である。撹乱や遺構の重複により、全容は確認できなかった。建物の方向はＮ13.5°Ｗである。竈跡は東辺のほぼ中央に基底部の一部が残存する。遺構の北西隅から西へ排水溝と考えられるものが延びている。遺構埋土からは、奈良時代に属すると考えられる土師器片が出土した。

ＳＨ137　長軸5.0ｍ、短軸1.5ｍ以上、深さ0.23ｍの竪穴住居である。ＳＨ139に切られて原形はと



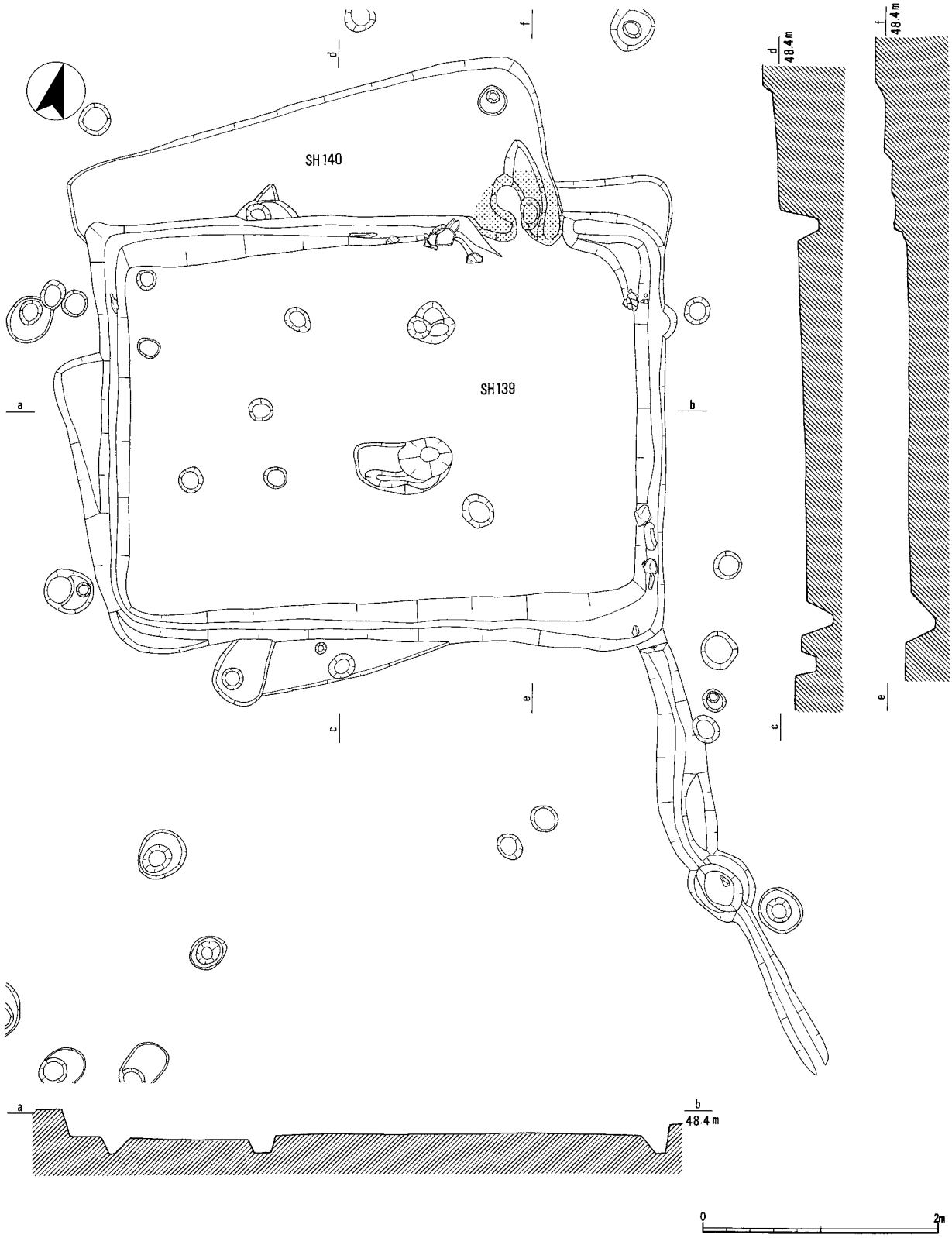
第29図　SH107平面図,断面図（1：50）



第30図　SH136平面図,断面図（1：60）　※網点は焼土

どめていない。隅丸長方形を呈していたと考えられる。炭化物が混入する遺構埋土からは、奈良時代に属すると考えられる土師器甕片、須恵器甕片などが出土した。

ＳＨ139　長軸5.0ｍ、短軸3.8ｍ、深さ0.2ｍ、隅丸長方形の竪穴住居である。建物方向はＮ17.0°Ｗである。壁周溝は遺構に沿って巡っていた。竈跡は北辺の東端寄りに基底部の一部を確認した。ＳＨ46



第31図　SH139平面図,断面図（１：50）　※網点は焼土

と同じ形態である。遺構埋土からは、奈良時代に属すると考えられる土師器片ばかりを確認した。

ＳＨ140　長軸3.8ｍ、短軸1.5ｍ以上、深さ0.15ｍの竪穴住居と思われる。ＳＨ139に切られて原形はとどめていない。建物方向はＮ32.0°Ｗである。遺構埋土からは、奈良時代に属すると考えられる土師器片ばかりを確認した。

＜土坑＞

ＳＫ21　長軸2.2ｍ、短軸1.4ｍ、深さ0.1ｍの土坑であろう。撹乱や遺構の重複を受け全容が判然としない。土師器甕片・須恵器小片が埋土から少量出土した。土器片に混じり炭化物も若干出土した。奈良時代に属するものと考えられる。

ＳＫ33　長軸1.9ｍ、短軸1.6ｍ、深さ0.04ｍの土坑である。平面プランは楕円形を呈する。炭化物が所々にみられる遺構埋土からは主に奈良時代の土師器甕片、須恵器杯片などが少量出土した。

ＳＫ39　長軸1.1ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.05ｍの土坑である。平面プランは楕円形を呈している。遺構埋土からは土師器小片、鉄滓が少量出土した。出土遺物が小片かつ小量であるので時期の判断に苦しむが、奈良時代のものであろうか。

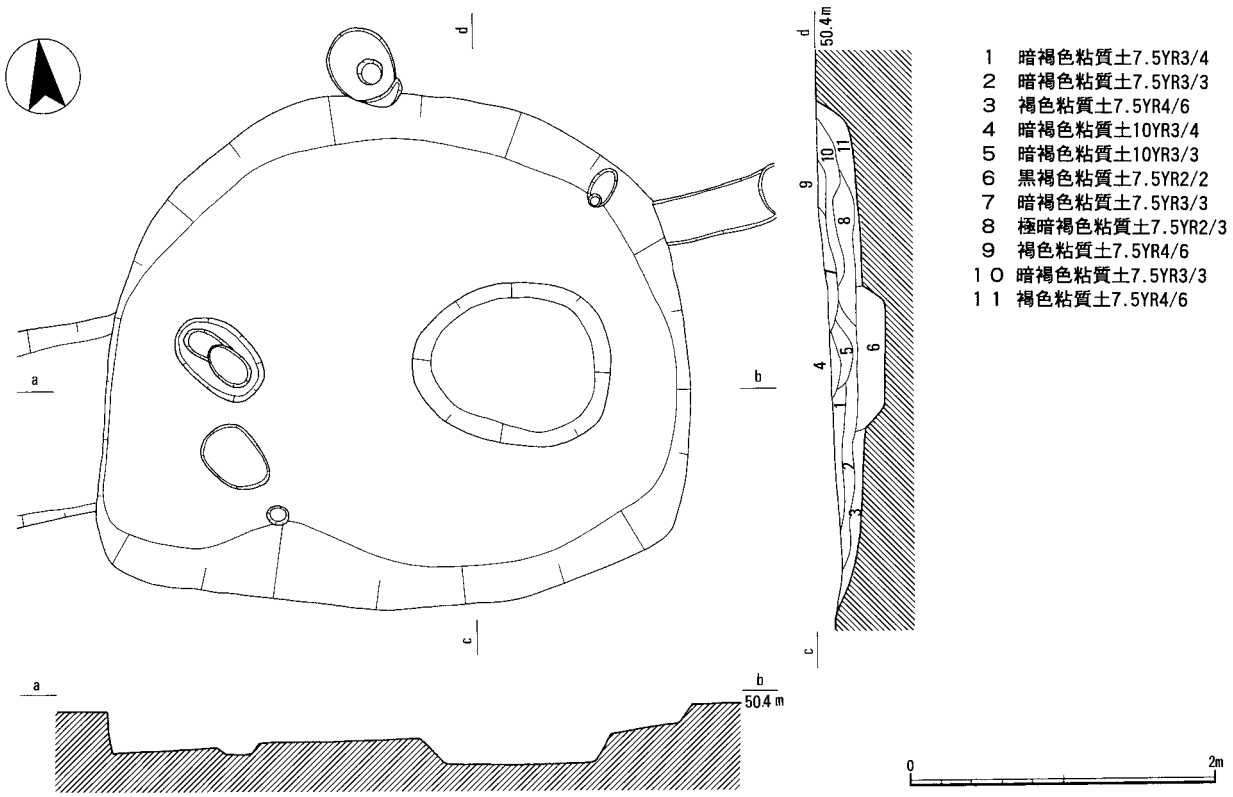
ＳＫ44　長軸2.7ｍ、短軸2.6ｍ、深さ0.17ｍの平面プランが隅丸方形の土坑である。遺構埋土からは奈良時代に属すると考えられる土師器片や須恵器杯蓋などが出土した。竪穴住居の可能性もある。

ＳＫ48　径1.5ｍ、深さ0.11ｍ。平面プランが円形を呈する土坑である。土器などは出土しなかったが、鉄滓の出土を確認した。

ＳＫ51　長軸0.7ｍ、短軸0.4ｍ以上、深さ0.13ｍの楕円形の土坑と思われる。撹乱溝に一部切られていた。遺構埋土からは奈良時代に属すると考えられる土師器片、須恵器片を少量確認した。

ＳＫ66　長軸2.2ｍ、短軸1.4ｍ以上、深さ0.04ｍの土坑である。撹乱溝に切られて平面プランは、原形をとどめていない。遺構埋土からは奈良時代のものと思われる土師器片が少量出土した。

ＳＫ72　長軸1.1ｍ、短軸0.95ｍ、深さ0.23ｍ。平面プランが楕円形の土坑である。炭化物が混入していた遺構埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけてのものと考えられる土師器甕、須恵器壺・杯蓋片などが出土した。ＳＨ32の竈の直近に位置していた。どのような性格であるのか判断に苦しむ。



第32図　SK90平面図,断面図（１：50）

ＳＫ79　長軸1.0ｍ、短軸0.9ｍ、深さ0.17ｍ。平面プランが楕円形の土坑である。炭化物が混じる遺構埋土からは、遺物の出土は確認できなかった。ＳＨ45の竈跡の直近に位置し、埋土には炭化物が混入していた。遺物は出土しなかった。

ＳＫ86　長軸2.95ｍ、短軸2.15ｍ以上、深さ0.3ｍの土坑であろう。平面プランは撹乱溝に切られていて原形をとどめていない。概ね楕円形を呈していたことは容易に推測できよう。遺構埋土からは、飛鳥から奈良時代にかけての土師器甕片、須恵器片が少量出土した。これらとともにサヌカイト片も出土した。

ＳＫ87　長軸2.95ｍ、短軸2.8ｍ、深さ0.12ｍ。平面プランが楕円形の土坑である。遺構埋土からは飛鳥から奈良時代にかけての土師器片、須恵器片が少量出土した。

ＳＫ88　長軸2.55ｍ、短軸1.25ｍ、深さ0.25ｍの土坑である。平面プランは楕円形を呈していた。遺構埋土からは飛鳥時代のものと思われる土師器甕、須恵器壺・杯蓋片などを確認した。

ＳＫ90　長軸3.8ｍ、短軸3.4ｍ、深さ0.25ｍの土坑である。隅丸方形を呈していた。方位はＥ10.0°Ｓである。遺構埋土からは土師器片が少量出土した。土器が小片であり少量であるので、所属時期の判断に苦しむが、奈良時代に属するものと考えられる。

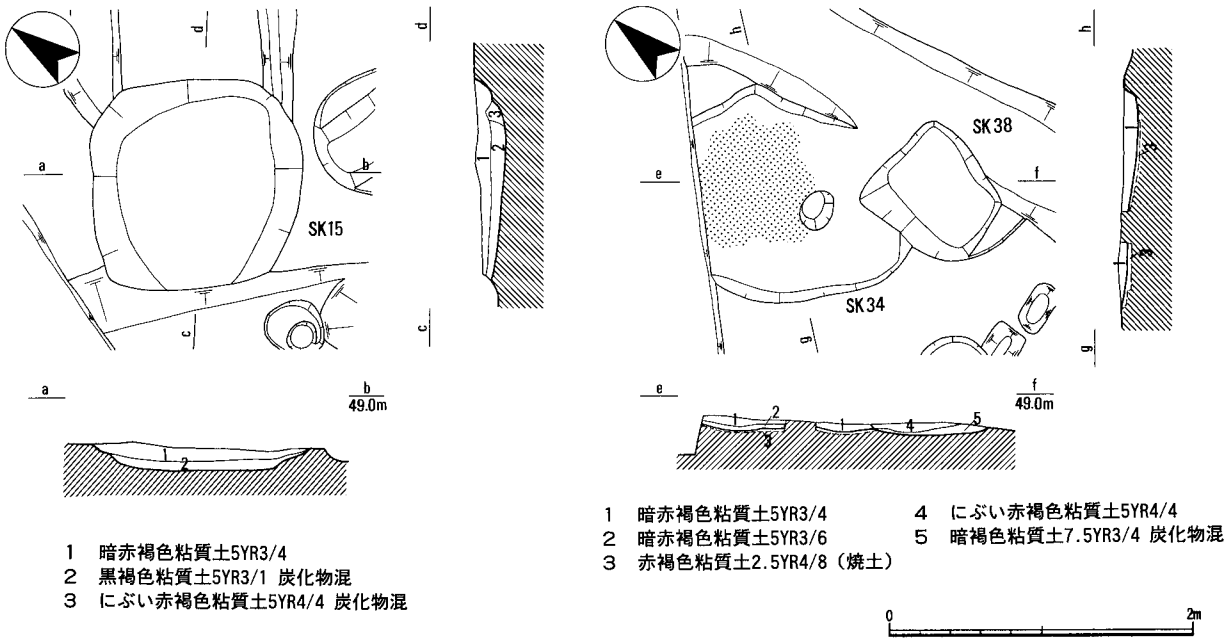
ＳＫ142　長軸2.0ｍ以上、短軸1.8ｍ、深さ0.17ｍの土坑である。平面プランは隅丸方形であろうか。調査区外に延びるようである。遺構埋土からは遺物の出土がなく遺構の所属時期の判断に苦しむが、遺構形態や埋土などから奈良時代のものであろうか。

＜土師器焼成坑＞

ＳＫ15　長軸1.4ｍ以上、短軸1.4ｍ、深さ0.19ｍのほぼ楕円形を呈している。土師器焼成坑であろうか。④底部の一部と遺構検出面から落ち込む部分で、赤変がみられた。埋土からは、少量のロクロ土師器皿・椀片、須恵器小片に混じり焼土や炭化物も出土した。平安時代末期に属するものと考えられる。

ＳＫ34　長軸1.5ｍ、短軸1.1ｍ以上、深さ0.06ｍの土師器焼成坑である。平面プランは楕円形を呈し、南勢地方でみられる二等辺三角形の平面プランとは若干の違和感を覚える。底部と肩部の一部が熱を受け赤変していた。炭化物が多く混入する遺構埋土からは、平安時代末期のものと思われるロクロ土師器椀片、須恵器平瓶片が出土した。

ＳＫ38　長軸1.0ｍ、短軸0.7ｍ、深さ0.12ｍ、平面プランがほぼ楕円形の土師器焼成坑と考えられる。底部の一部がうすく赤変している。炭化物が混



第33図　SK15・34・38平面図,断面図（1：50）　※網点は焼土

じる遺構埋土からは土師器小片、須恵器小片が少量出土した。これらのうちほとんどが土師器片であった。時期については遺物が小片かつ少量であるので判断に苦しむ。他の焼成坑と同時期であろうか。

ＳＫ96　長軸2.38ｍ、短軸2.28ｍ、深さ0.3ｍ。平面プランはほぼ円形であった。底部近くで大量の炭化物が、底部中央に層状に確認することができた。それらを取り除くと底部の一部が赤変しているのを確認した。これらから判断して土師器焼成坑と考えられる。遺構埋土からは遺物の出土がなく、所属時期の判断に苦しむが、同じ性格のものが平安時代末期に属すると考えられることから同時期であろうか。

ＳＫ134　長軸1.63ｍ、短軸1.14ｍ、深さ0.27ｍの土師器焼成坑である。平面プランは楕円形を呈し、南勢地方でみられる二等辺三角形の平面プランとは若干の違和感を覚える。底部と肩部の一部が熱を受け赤変していた。炭化物が多く混入する遺構埋土からは、奈良時代のものと思われる土師器甕片、須恵器高杯片が出土した。

＜溝＞

ＳＤ18　幅0.4～0.6ｍ、深さ0.3～0.5ｍの溝である。断面形はＶ字を呈していた。遺構検出時には竪穴住居に切られている様相であった。遺構埋土からは、土師器甕・鍋体部片、須恵器甕・杯蓋・高杯、水晶片が出土した。概ね飛鳥時代のものと考えられる。

ＳＤ40　幅0.4ｍ、深さ0.06ｍの溝である。遺構埋土からは土師器小片・須恵器小片が少量出土した。これらのほとんどが土師器であった。小片が多く遺構の所属時期の判断に苦しむが、胎土などから奈良時代のものであろうか。

ＳＤ58　幅0.35ｍ、深さ0.11ｍの溝である。遺構埋土から飛鳥時代のものと思われる土師器甕、須恵器杯蓋、土器小片多数などを確認した。

ＳＤ132　幅0.8～1.1ｍ、深さ0.2ｍの溝である。遺構埋土からは土師器甕・皿片が少量出土した。小片が多く遺構の所属時期の判断に苦しむが、胎土などから奈良時代のものであろうか。

ＳＤ138　幅0.4ｍ、深さ0.2ｍの溝である。遺構埋土からは土師器小片・須恵器小片が少量出土した。小片が多く遺構の所属時期の判断に苦しむが、胎土などから奈良時代のものであろうか。

5　中世の遺構

＜溝＞

ＳＤ27　幅0.5ｍ、深さ0.13ｍの溝である。遺構埋土からは弥生土器片、土師器片、須恵器片、山茶椀片、陶器片が少量出土した。室町時代に溝自体は埋没したのであろうか。

ＳＤ130　幅0.7ｍ、深さ0.4ｍの溝である。遺構埋土からは、土師器片、須恵器片、山茶椀片が少量出土した。概ね室町時代のものと考えられる。

ＳＤ131　幅0.8～1.9ｍ、深さ0.33ｍの溝である。遺構埋土からは、飛鳥から鎌倉時代にかけての土師器皿・甕片、須恵器甕・壺・杯蓋片が出土した。須恵器がほとんどであったが、鎌倉時代の遺構と考えられる。　（小濵　学）

[註]

①国土地理院のホームページに掲載の変換プログラムを利用し変換した。

②『四日市市史』(四日市市、1988年)。

③上村安生「弥生土器編年概観」(『三重県史　資料編　考古1』、三重県、2005年)と加納俊介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年　東海編』（木耳社、2002年）を参照した。

④名称については、『北野遺跡（第2・3・4次調査）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1995年）に拠った。

＜遺構一覧表凡例＞

○ 遺構番号は、報告書に掲載した番号である。

○ 調査時番号は、発掘調査時に付した遺構番号である。

○ 性格については、報告時に判断したものである。現地説明会の資料等で発表したものと違う可能性がある。

○ グリッドは、調査時の小地区番号である。

○ 規模については、土坑等が長軸×短軸×深さ、溝が幅×深さで表記している。なお、()が付く表記は切りあい等により規模が不明なものである。

○ 備考は、先に述べたもの以外を表記している。

遺構番号	調査時番号	グリッド	性格	規模（単位：m）	備考	時期
SX1	SZ01	h 43	土器棺墓	0.5×0.5×0.25	弥生土器壺	弥生 後期？
SX2	SD02	h 41～43 i41～43 j 41～43	方形 周溝墓	周溝内側5.5×5.5 周溝 (1.1～1.4)×(1.2～1.7)	弥生土器片 剥片(チャート) N2.0° W	弥生 後期
SK3	SK03	h 40.41	土坑？	4.0×3.2×0.2	炭化物あり 抜根の可能性あり 須恵器片・土師器片少量	
SH4	SH04	h 40	竪穴住居	3.0×3.0×0.05	SK3に切られる 須恵器片・土師器片少量	奈良？
SX5	SZ05	i42	土器棺墓	0.5×0.5×0.2		縄文晩期
SK6	SZ06	i40	土坑？	0.8×0.8×0.16	ピットの可能性あり	
SK7	SZ07	i41	土坑？	0.7×0.7×0.15	ピットの可能性あり 弥生土器片	
SK8	SK08	j 38.39	土坑	2.1×1.6×0.13		
SD9	SD09	i37, j37, k36.37	溝	(0.4～0.8)×0.18	須恵器杯・土師器片少量	
－	SH10	d39	不明		消失 土師器甕・須恵器蓋	
－	SH11	i37, h38	不明		消失 土師器甕	奈良？
SD12	SD12	e39.40	溝	0.4×0.05	土師器片少量	
SB100	SK13	e38	柱穴		SB100のピット 鉄滓 土師器長胴甕	
SK14	SK14	f39.40	土坑	0.8×0.6×0.08		
SK15	SK15	d36, e36	土師器 焼成坑	1.4以上×1.4×0.19	ロクロ土師器出土	平安末期
SD16	SD16	d40.41, e41	溝	0.4×0.12	染付出土・土師器片少量	攪乱
SD17	SD17	g38.39, f39	溝	0.4×0.11	土師器片少量	奈良
SD18	SD18	d39, e38.39, f37.38, g37	溝	(0.4～0.6)×(0.3～0.5)	須恵器・土師器 水晶片	飛鳥
SD19	SD19	d36, e36.37, f37g37.38	溝	(0.4～0.8)×0.11	土師器片少量	攪乱
SD20	SD20	d34, e34.35, f35.36, g35.36, h36	溝	(0.4～1.1)×(0.11～0.23)	須恵器片・土師器片少量	攪乱
SK21	SK21	f37.38	土坑？	2.2×1.4×0.1	SK33を切る 須恵器少量・土師器甕 炭化物	奈良
SD22	SD22	f36.37, g36～38	溝	(0.7～1.0)×0.09	土師器片少量 鉄滓	攪乱
SB100	SH23	d38, e38	柱穴		SB100のピット 須恵器壺・土師器片少量 鉄滓	
－	SK24	d38.39, e38.39	不明		消失 須恵器片・土師器片少量	

第１表　遺構一覧表①

遺構番号	調査時番号	グリッド	性格	規模（単位：m）	備考	時期
SH25	SH25	f38.39	竪穴住居	3.3×0.05	SH26と同一 須恵器片少量・土師器甕 N21.0° W	奈良？
－	SH26	e39,f39	竪穴住居		SH25と同一 須恵器甕・杯・蓋 土師器片少量	奈良？
SD27	SD27	h35.36	溝	0.5×0.13	山茶椀・陶器 須恵器・土師器	室町
SH28	SH28	h33～35,g33～35	竪穴住居	4.7×4.3×0.14	砥石？ 須恵器杯・土師器甕 N7.0° W	奈良
SD29	SD29	d29.30,e30.31, f31.32,g32, h33,i33	溝	(0.5～0.9)×0.13	須恵器・土師器 瓦器・陶器	近世以降
SD30	SD30	g31,h31	溝	0.25×0.08		攪乱
SD31	SD31	d31.32,e30～32, f30	溝	(1.4～2.2)×0.47	須恵器片・土師器片少量	攪乱
SH32	SH32	d31,e30.31	竪穴住居	4.0×2.5以上×0.3	砥石・須恵器杯・蓋 土師器台付杯・甕 N9.0° W	奈良
SK33	SK33	f37.38	土坑	1.9×1.6×0.04	SK21に切られる 炭化材 須恵器杯・土師器甕	奈良？
SK34	SK34	d34,e34	土師器 焼成坑	1.5×1.1以上×0.06	ロクロ土師器出土 須恵器平瓶混入	平安末期
SH35	SH35	h36.37,g36.37	竪穴住居	5.7×3.4以上×0.15	須恵器高杯・杯・蓋 土師器少量 N15.5° E	飛鳥
SB36	SB36	d36.37,e35.36	掘立柱 建物	3(1.7)間×4(1.7)間＋1間	須恵器片少量・土師器蓋 N2.0° E	奈良
SB100	SK37	d38.39,e38.39	柱穴		SB100のピット 炭化物 土師器甕	飛鳥～ 奈良
SK38	SK38	e34	土器 焼成坑	1.0×0.7×0.12	須恵器片・土師器片少量	平安末期？
SK39	SK39	e39.40	土坑	1.1×0.8×0.05	鉄滓出土 土師器片少量	
SD40	SD40	f37.38	溝	0.4×0.06	須恵器片少量・土師器甕	奈良？
SB41	SB41	e32.33,f32～34, g33	掘立柱 建物	3(1.8)間×4(1.75)間	鉄滓 須恵器杯・土師器片少量 N3.0° E	飛鳥
SH42	SH42	e38,f38	竪穴住居	5.5以上×1.4以上×0.25	土錘・鉄滓 土師器甕 須恵器高杯・杯	奈良
SH43	SH43	f23,g23	竪穴住居	5.2×3.5?×0.14	土師器甕・須恵器片少量 N10.0° W	奈良
SK44	SH44	f22.23	土坑	2.7×2.6×0.17	土師器少量・陶器椀 竪穴住居の可能性あり	奈良？
SH45	SH45	j24.25	竪穴住居	5.7×5.6×0.15	土師器甕 須恵器蓋 N20.0° W	飛鳥～ 奈良
SH46	SH46	j27.28,i27	竪穴住居	4.9×3.0×0.09	工房跡　N19.5° W 鉄滓・須恵器台付杯・蓋 土師器片多い	飛鳥～ 奈良
SH47	SH47	j19,k19	竪穴住居	3.6×3.0×0.34	石斧混入 土師器甕・須恵器壺 N6.0° W	奈良
SK48	SK48	d39	土坑	1.5×1.5×0.11	鉄滓	不明

第２表　遺構一覧表②

遺構番号	調査時番号	グリッド	性格	規模（単位：m）	備考	時期
SK49	SK49	d39.40	土坑	0.8×0.8×0.02		
SZ50	SZ50	e37.38	落ち込み	1.6×1.3×0.6	風倒木の可能性も。	
SK51	SK51	e39	土坑	0.7×0.4以上×0.13	須恵器片・土師器片少量	奈良
SH52	SH52	e39	竪穴住居	5.0以上×2.0以上×0.12	土師器片少量	奈良
SD53	SD53	h21	溝	1.0×0.21		攪乱
SH52	SD54	e39	溝	0.35×0.04	SH52周壁溝 土師器片少量	奈良
SH52	SD55	e39	溝	0.35×0.14	SH52周壁溝 土錘 土師器片少量	奈良
SD56	SD56	h36	溝	0.5×0.18	土師器片少量	
SK57	SK57	h34	土坑	0.5×0.45×0.16	須恵器片・土師器片少量	
SD58	SD58	e39	溝	0.35×0.11	土師器甕 須恵器蓋	飛鳥
SD59	SD59	h34	溝	0.2×0.06	風倒木 土師器片少量	
SD60	SD60	k16,l16	溝	(0.2～0.25)×0.06	須恵器片少量	攪乱
SK61	SK61	k18	土坑？	2.4×1.4以上× 0.18	調査区外にのびる	
SD62	SD62	k18	溝	(0.4～0.5)×0.05	現代瓦 須恵器片少量	攪乱
SD63	SD63	i24	溝	(0.2～0.3)×0.07	竪穴住居周壁溝の可能性 須恵器片・土師器片少量	
SH64	SH64	j21.22	竪穴住居	5.3×5.0×0.15	鉄滓・須恵器短頸壺・杯 土師器片多い N18.0° W	
SZ65	SK65	j20	落ち込み	1.0×0.4以上×0.08	陶器 須恵器片・土師器片少量	中近世以降
SK66	SK66	d39	土坑	2.2×1.4以上×0.04	土師器片少量	奈良
SD67	SD67	f22	溝	0.4×0.09		攪乱
SD68	SD68	j24～26	溝	0.7×0.25	土師器片のみ	攪乱
SK69	SK69	k38	土坑	0.3×0.3×0.4		
SD70	SD70	j 36	溝	0.1×0.06		
SK71	SK71	f 23	土坑	1.1×0.6×0.14	土師器片少量	
SK72	SK72	e31	土坑	1.1×0.95×0.23	SH32内土坑 土師器甕 須恵器杯・壺	飛鳥～奈良

第３表　遺構一覧表③

遺構番号	調査時番号	グリッド	性格	規模（単位：m）	備考	時期
SB99	SK73	g39	柱穴		SB99のピット	
SB95	SK74	g39	柱穴		SB95のピット	
SB100	SK75	e38	柱穴		SK13と同一 SB100のピット	
SD76	SD76	j 26	溝	0.9×0.16	土師器片・須恵器片 陶器片	攪乱
SD77	SD77	k 27.28	溝	0.4×0.05	須恵器片	攪乱
SD78	SD78	j 30	溝	0.5×0.06		攪乱
SK79	SK79	j 25	土坑	1.0×0.9×0.17		攪乱
SD80	SD80	h 7.g8	溝	0.6×0.07	須恵器片	攪乱
SD81	SD81	e5	溝	(0.5～1.8)×0.12	土師器片・須恵器片 陶磁器片	攪乱
SD82	SD82	j3	溝	(0.35～0.5)×0.13	陶器片	攪乱
SD83	SD83	j6	溝	(0.5～0.7)×0.12	土師器片・須恵器片 陶磁器片	攪乱
SD84	SD84	k12	溝	(1.1～1.8)×0.25	土師器片・陶磁器片	攪乱
SH85	SH85	i15	竪穴住居	4.64×4.25以上×0.08	土師器甕 N2.0° E	飛鳥～ 奈良
SK86	SK86	h15	土坑	2.95×2.15以上×0.3	SK87に切られる 土師器甕・須恵器片少量 サヌカイト片	飛鳥～ 奈良
SK87	SK87	h15	土坑	2.95×2.8×0.12	SK86を切る 須恵器片・土師器片少量	飛鳥～ 奈良
SK88	SK88	j17	土坑	2.55×1.25×0.25	土師器甕・須恵器壺・蓋	飛鳥
SH89	SH89	c18	竪穴住居	3.28×2.7×0.2	土師器片少量 N2.0° W	奈良？
SK90	SH90	g16.17	土坑	3.8×3.4×0.25	土師器片少量 E10.0° S	奈良？
SH91	SH91	c17	竪穴住居	3.25×3.7×0.2	土師器甕・台石 N29.5° W	奈良
SD92	SD92	d18	溝	(0.7?～1.0?)×0.16	SD93に切られる 須恵器片・土師器片少量 陶器片	近世
SD93	SD93	d18	溝	(0.8～1.0)×0.2	SD92を切る	
SD94	SD94	k10	溝	(0.8～0.9)×0.1	須恵器片・土師器片少量	攪乱
SB95	SB95	e39,f38.39.40, g39.40.41	掘立柱 建物	5(1.85)間×3(1.6)間 N29° W	土師器甕・須恵器壺？ N28.0° E	飛鳥～ 奈良
SK96	SK96	d17	土師器 焼成坑？	2.38×2.28×0.3	遺物なし	平安末期？

第４表　遺構一覧表④

遺構番号	調査時番号	グリッド	性格	規模（単位：m）	備考	時期
SD97	SD97	e17.18, f17	溝	0.4×0.04		攪乱
SH98	SH98	l12	竪穴住居	5.32×2.4以上×0.21	調査区外に伸びる 磨石？ N13.0° W	飛鳥？
SB99	SB99	e39,f38.39.40, g39.40.41	掘立柱建物	5(1.95)間×3(1.6)間	縄文土器片？ 須恵器片・土師器片 N18.0° W	飛鳥～奈良
SB100	SB100	d38.39,e38,39	掘立柱建物	3(1.8)間以上×2(2.2)間以上	調査区外に伸びる 須恵器蓋？・土師器甕？ N21.0° W	飛鳥～奈良
SB101	SB101	g35.36,h35.36	掘立柱建物	2(1.95)間×3(1.8)間	須恵器杯・土師器片 N48.5° W	飛鳥～奈良
SB102	SB102	g32,h31.32	掘立柱建物	2(1.6)間×3(1.65)間	N5.5° W	奈良？
SB103	SB103	f30,g30.31	掘立柱建物	2(1.8)間×3(1.8)間	N6.5° W	奈良？
SB104	SB104	i22,j22	掘立柱建物	2(1.5)間×2(1.8)間	土師器片のみ N6.0° W	飛鳥～奈良
SB105	SB105	j20,k20.21	掘立柱建物	2(1.8)間以上×2(1.8)間	調査区外に伸びる 土師器甕片少量 N2.5° W	飛鳥～奈良
SB106	SB106	e20.21,f20	掘立柱建物	2(1.6)間×2(1.6)間	総柱建物 土師器片少量 N50.0° W	飛鳥～奈良
SH107	SH107	i6.7,j6	竪穴住居	4.4×4.25×0.18	N39.0° E	飛鳥？
SB108	SB108	d15,e15	掘立柱建物	2(1.65)間×2(1.6)間	土師器片少量 N6.0° E	飛鳥～奈良？
SB109	SB109	f15.16, g15.16	掘立柱建物	2(1.5)間×2(1.6)間	総柱建物 N35.0° E	飛鳥～奈良？
SB110	SB110	h13.14, i13.14	掘立柱建物	3(1.2)間×3(1.2)間	総柱建物の可能性 N19.0° E	飛鳥～奈良？
SB111	SB111	h12,i11.12	掘立柱建物	2(1.55)間×2(1.8)間	総柱建物 N17.5° W	飛鳥～奈良？
SB112	SB112	k13.14,l13	掘立柱建物	2(1.5)間×1(1.8)間以上	調査区外に伸びる N18.5° W	飛鳥～奈良？
SB113	SB113	k11.12,l11.12	掘立柱建物	2(1.7)間×2(1.7)間	総柱建物 N4.5° E	飛鳥～奈良？
SB114	SB114	j13	掘立柱建物	2(1.25)間×1(2.1)間	土師器片のみ N54° E	飛鳥～奈良
SB115	SB115	l 10.11	掘立柱建物	1(1.6)間以上×2(2.0)間	調査区外に伸びる N15.0° E	飛鳥～奈良？
SB116	SB116	k6.7	掘立柱建物	4(1.3)間以上×1(2.4)間	土師器片のみ N79.0° E	飛鳥～奈良？
－	SA117	j12	柵列	3(1.4～1.5)間		
－	SA118	i10.11	柵列	3(1.4～1.6)間		
SB119	SB119	e16.17,f16.17	掘立柱建物	3(2.1)間×2(1.8)間	N73.0° E	飛鳥～奈良？
SB120	SB120	c15	掘立柱建物	1(1.6)間以上×2(1.45)間	調査区外に伸びる N37.0° W	飛鳥～奈良？

第５表　遺構一覧表⑤

遺構番号	調査時番号	グリッド	性格	規模（単位：m）	備考	時期
SB121	SB121	d37.38,e37.38	掘立柱建物	2(2.0)間以上×2(2.1)間以上	調査区外に伸びる N19.0° E	飛鳥～奈良？
－	SA122	i11,j11	柵列	2(1.2～1.4)間		
－	SA123	f14,e15	柵列	2(1.15)間		
SZ124	SK124	b2	落ち込み	1.22×0.96×0.04		
SB125	SB125	d30.31,e30.31	掘立柱建物	1(1.5)間以上×3(1.3)間	調査区外に伸びる N34.5° E	飛鳥～奈良？
SH126	SH126	h45.46,i45.46	竪穴住居？	4.5×4.0×0.4	鉄滓 土師器杯・甕 須恵器杯・壺・蓋	奈良
SX127	SX127	g44	土器棺墓	3.7×3.4×0.22		弥生後期？
SH128	SH128	i46.47,j46.47	竪穴住居	3.9×3.0×0.35	土師器片少量 須恵器杯・甕	奈良
SX129	SD129	i44.45.46,j45.46	方形周溝墓	周溝内側:6.1×3.5? 周溝:(0.5～0.6)×0.4	弥生土器片？	弥生後期
SD130	SD130	h47,i47	溝	0.7×0.4	SD143と同一 須恵器片・土師器片少量 山茶椀	室町
SD131	SD131	g49.50.51,h49.50, i47.48,j47	溝	(0.8～1.9)×0.33	土師器皿・甕 須恵器甕・壺・蓋	鎌倉
SD132	SD132	g50.51,h49.50.51, i49.50	溝	(0.8～1.1)×0.2	土師器皿	奈良？
SX133	SD133	h43.44,i43.44.45, j43.44	方形周溝墓	周溝内側:5.5×5.0 周溝 (0.86～1.6)×(0.25～0.4)		弥生後期
SK134	SK134	e44,f44	土師器焼成坑	1.63×1.14×0.27	土師器甕 須恵器高杯	古代
SX135	SX135	i45	土器棺墓	0.73×0.73×0.48		弥生後期
SH136	SH136	g47.48,i48 h47.48.49,	竪穴住居	5.0×4.5×0.23	土師器片のみ N13.5° W	奈良
SH137	SH137	e45.46,f45.46	竪穴住居	5.0×1.5以上×0.23	SH139を切る 炭化物混入 土師器甕・須恵器甕	奈良
SD138	SD138	f46.47	溝	0.4×0.2	須恵器片・土師器片少量	奈良
SH139	SK139	e46,g46,f45.46,	竪穴住居	5.0×3.8×0.2	SH137に切られる 土師器甕 N17.0° W	奈良
SH140	SH140	e45.46,f45.46, g45.46	竪穴住居	3.8×1.5？×0.15	SH137,139に切られる 土師器皿？ N32.0° W	奈良
SK141	SK141	h48,i48	カマド跡？	1.4×1.0×0.01	SH136のカマド跡？ 土師器甕、須恵器杯・甕	飛鳥～奈良
SK142	SK142	i48,j48	竪穴住居？	2.0以上×1.8×0.17		奈良？
SD143	SD143	j45.46	溝	(0.7～1.0)×0.07	SD130と同一	

第６表　遺構一覧表⑥

Ⅳ　遺　物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱(コンテナバット)にして70箱である。飛鳥から奈良時代の遺物が最も多い。以下、縄文時代から順に遺構毎に出土遺物について述べたいと思う。なお個別の遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。

1　縄文時代

ＳＸ５出土遺物(１)　１は縄文土器深鉢。口唇部が外反し、直下に幅広の貝殻による押圧がみられる突帯が認められる。晩期後半の馬見塚式に比定できよう。①

2　弥生時代

ＳＸ１出土遺物(２)　２は大形の弥生土器壺である。②口縁部が欠失している。広口壺であろうか。後期に属するものと考えられる。

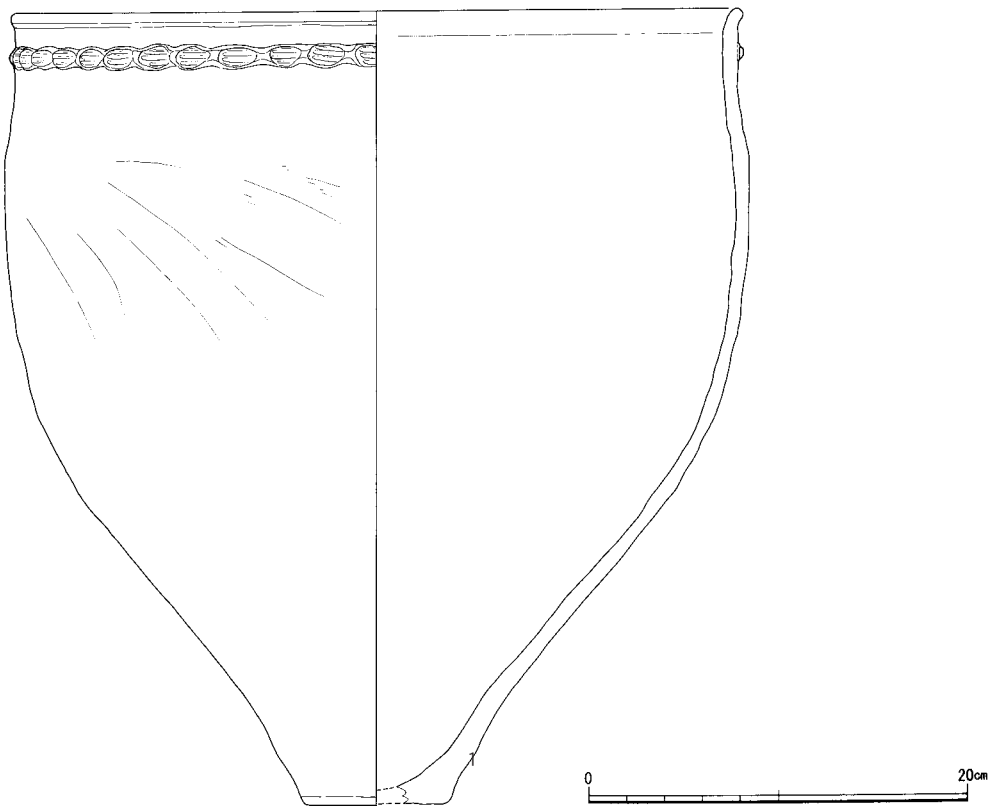
ＳＸ２出土遺物(３・４)　３・４は弥生土器広口壺である。３は胴部が強く張り出し、外傾する頸部がとりつく。胴部下半に二次被熱の痕跡が明瞭に認められるが、口縁部には及んでいない。４は球形の胴部に外傾する頸部がとりつく。口縁端部は上下に面が広がり、その面に刻みが認められる。底部に穿孔がみられる。ともに後期のものと思われる。

ＳＸ135出土遺物(５・６)　５は弥生土器広口壺である。胴部はほぼ球形で、頸部は大きく外傾するが、口縁部は欠失する。６は弥生土器壺である。胴部下半から底部にかけて残存する。外面の一部にハケメが認められた。ともに後期に属すると思われる。

ＳＸ127出土遺物(７・８)　７・８は弥生土器壺である。７は頸部に２条突帯、胴部上半には櫛描横線文が認められる。８は弥生土器壺である。胴部は球形を呈するが、胴部上半に櫛描横線文が認められる。いずれも後期のものと考えられる。

3　古代から中世

ＳＢ36出土遺物(９)　９は須恵器蓋である。③口縁

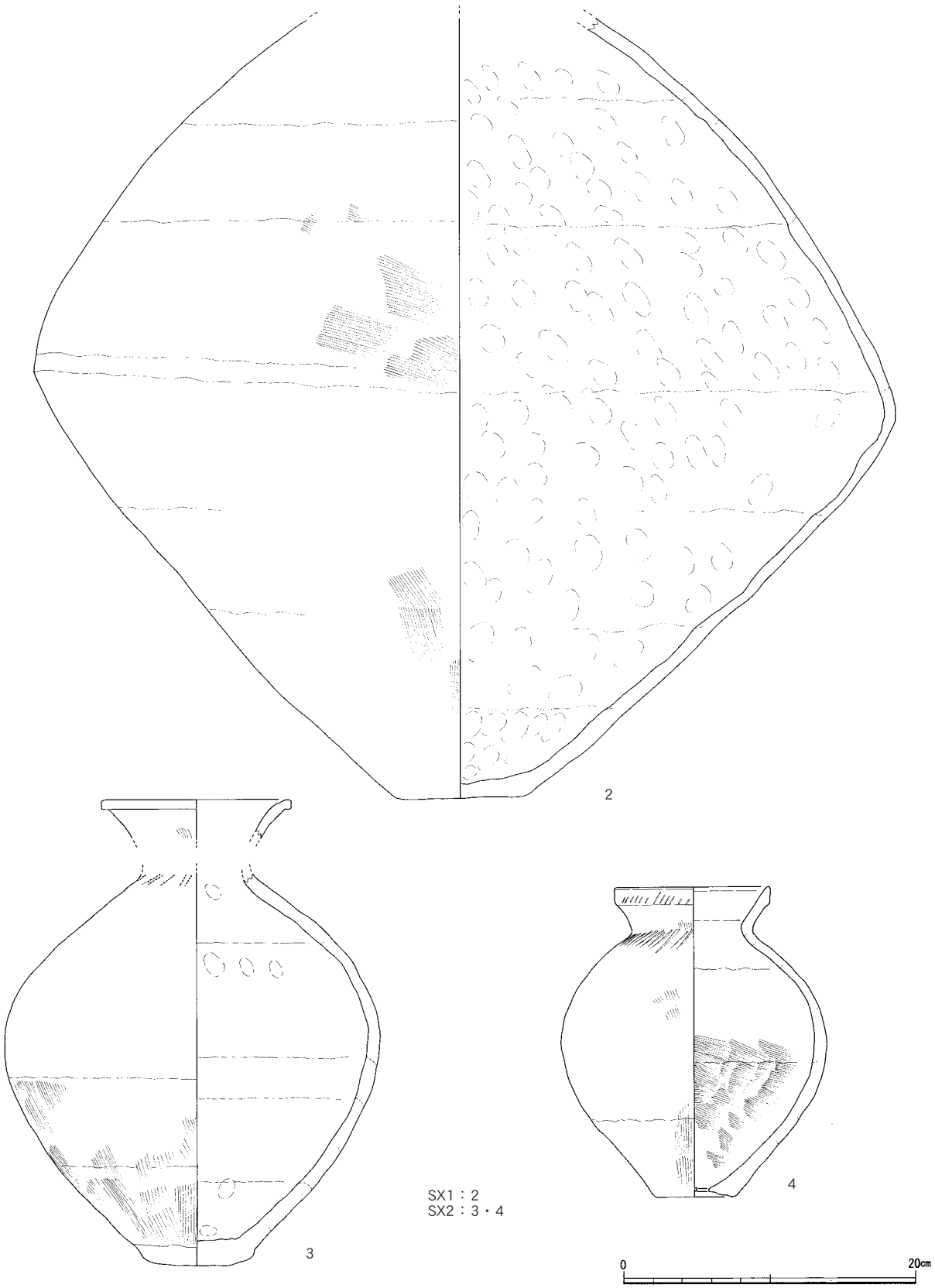


第34図　SX５出土遺物実測図（１：４）

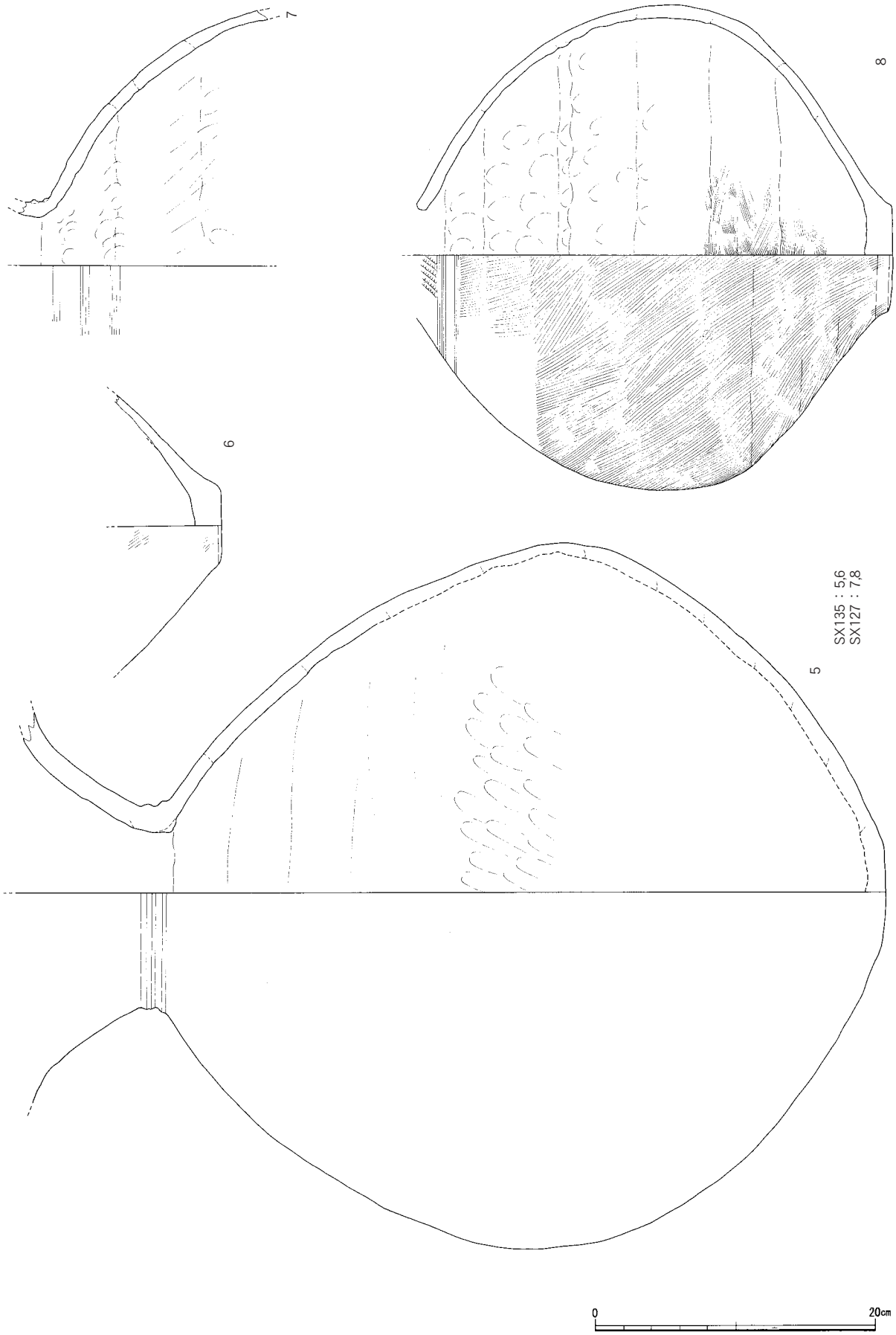
部が残るのみである。奈良時代前半のものと考えられる。

ＳＢ100出土遺物(10)　10は土師器甕の口縁部小片である。飛鳥時代のものであろうか。

ＳＢ101出土遺物(11・12)　11は土師器甕である。口縁部が残るのみである。内外面ともにハケメ



第35図　ＳＸ１、ＳＸ２出土遺物実測図（１：４）



第36図　SX127、135出土遺物実測図（1：4）

がみられる。12は須恵器杯である。平坦な底部から口縁部が直線的に立ち上がる。いずれも飛鳥から奈良時代前半に属するものといえよう。

ＳＨ26出土遺物(13～16)　13は土師器甕。14は須恵器蓋。ツマミが残存する。15は直線的に口縁部が立ち上がる須恵器杯である。16は鏨であろうか。いずれも飛鳥から奈良時代前半のものであろう。

ＳＨ28出土遺物(17～21)　17・18は土師器甕。口縁部が残るのみである。19・20は土師器皿である。21は須恵器台付杯である。これらは奈良時代前半のものと考えられる。

ＳＨ32出土遺物(22～26)　22・23は須恵器蓋である。22はツマミがみられず、23にはツマミが認められる。24は土師器台付椀である。25は切目石錘である。26は砥石である。これらは飛鳥から奈良時代前半のものと考えられる。

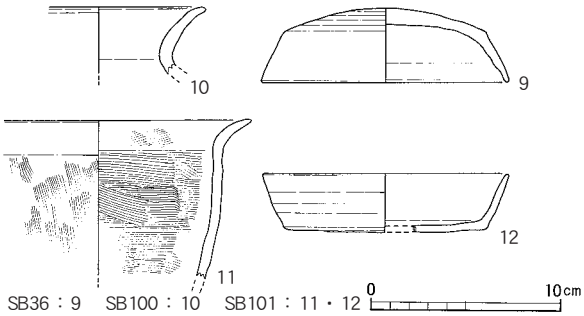
ＳＨ35出土遺物(27・28)　27は須恵器高杯の杯部である。内面に自然釉がかかる。28は土錘である。飛鳥時代のものであろうか。

ＳＨ42出土遺物(29)　29は円筒状の土錘である。

ＳＨ43出土遺物(30)　30は古式土師器壺であろうか。調整も摩滅のため判然としない。古墳時代のものと考えられる。混入遺物であろうか。

ＳＨ46出土遺物(31～33)　31は土師器杯である。内面には放射状暗文が認められる。32は土師器甑であろうか。ラッパ状に開く器形である。33は須恵器蓋である。飛鳥時代に属するものであろう。

ＳＨ47出土遺物(34～38)　34・35は土師器甕の口縁部小片である。36は土師器甑である。口縁部が少し内弯している。37は須恵器壺であろうか。38は石製品。石斧もしくは石斧未製品であろうか。34～37は飛鳥から奈良時代に属するものと考えられるが、38は時期が遡る。



SB36：9　SB100：10　SB101：11・12

第37図　SB36・100・101出土遺物実測図（1：4）

ＳＨ52出土遺物(39・40)　39・40はいずれも円筒状の土錘である。

ＳＨ64出土遺物(41～47)　41～43は小形で丸底の土師器甕と考えられる。44は須恵器蓋である。45は須恵器杯身である。46は須恵器短頸壺である。47は須恵器壺底部である。いずれも飛鳥時代のものと考えられる。

ＳＨ91出土遺物(48～50)　48・49は土師器甕の口縁部小片である。飛鳥から奈良時代に属するものと思われる。50は台石であろうか。

ＳＨ98出土遺物(51)　51は磨石。方形の面に磨痕が残る。古代より時期は遡るものであろうか。

ＳＨ126出土遺物(52～54)　52は土師器甕。53は須恵器蓋。ヘラ記号の一部が認められる。52・53は飛鳥から奈良時代のものとして良いだろう。54は陶器山茶椀。重複する撹乱部分からの混入遺物だろう。

ＳＨ139出土遺物(55～60)　55～58は土師器甕である。55･56は小形、57・58は器高が低く扁平な器形のものである。いずれも奈良時代のものと考えて良いだろう。59・60は用途不明の石製品である。

ＳＫ15出土遺物(61～66)　61～65はロクロ土師器椀である。底部には糸切り痕が認められる。平安時代後半のものと考えられる。66は須恵器平瓶である。時期が若干遡るものと考えられる。

ＳＫ34出土遺物(67)　土師器鉢である。口縁部が残るのみである。

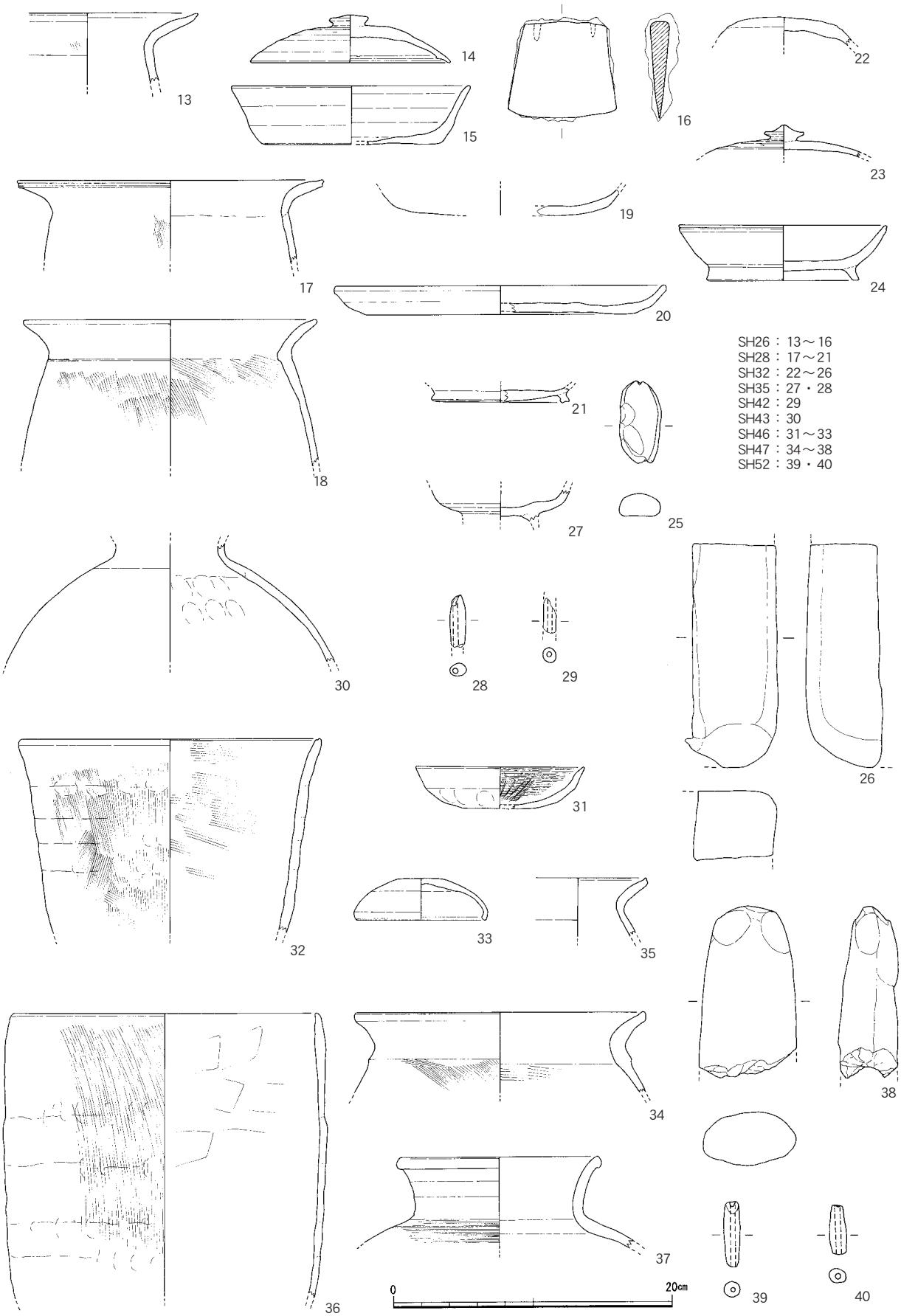
ＳＫ72出土遺物(68)　須恵器蓋である。飛鳥時代のものであろう。

ＳＫ86出土遺物(69)　須恵器杯身である。かえり部分が短く内傾して立ち上がる。飛鳥時代のものであろう。

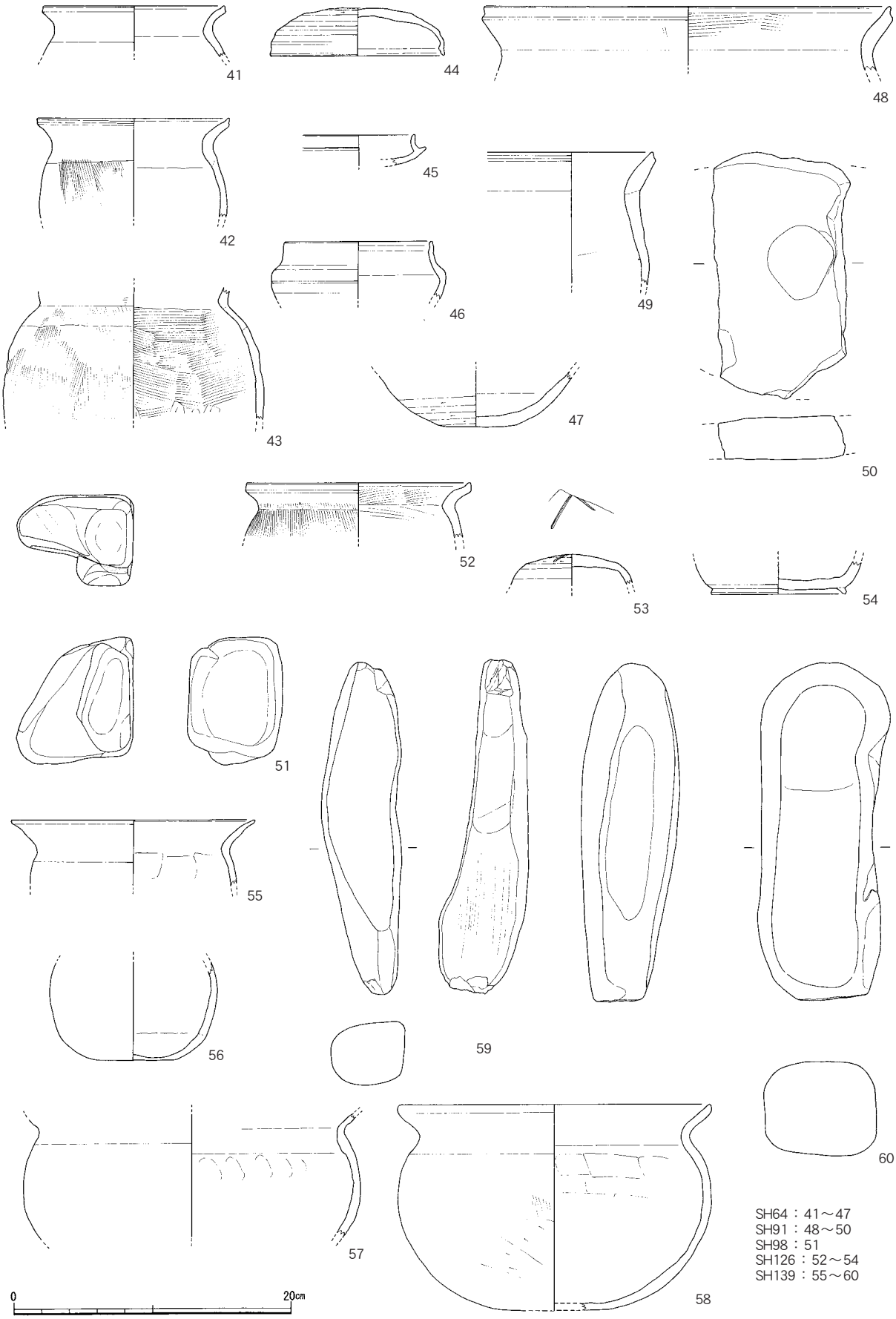
ＳＫ88出土遺物(70～72)　70・71は土師器甕である。大きく外反する頸部で、口縁端部に面をもつ。調整は摩滅のため判然としないが、内面にはハケメが認められた。72は宝珠つまみのつく須恵器蓋である。いずれも飛鳥時代のものと考えられる。

ＳＫ134出土遺物(73)　須恵器高杯脚部である。飛鳥時代のものだろう。

ＳＤ９出土遺物(74・75)　74は須恵器杯蓋。ヘ



第38図　SX26・28・32・35・42・43・46・47・52出土遺物実測図（1：4）



第39図　SH64・91・98・126・139出土遺物実測図（1：4）

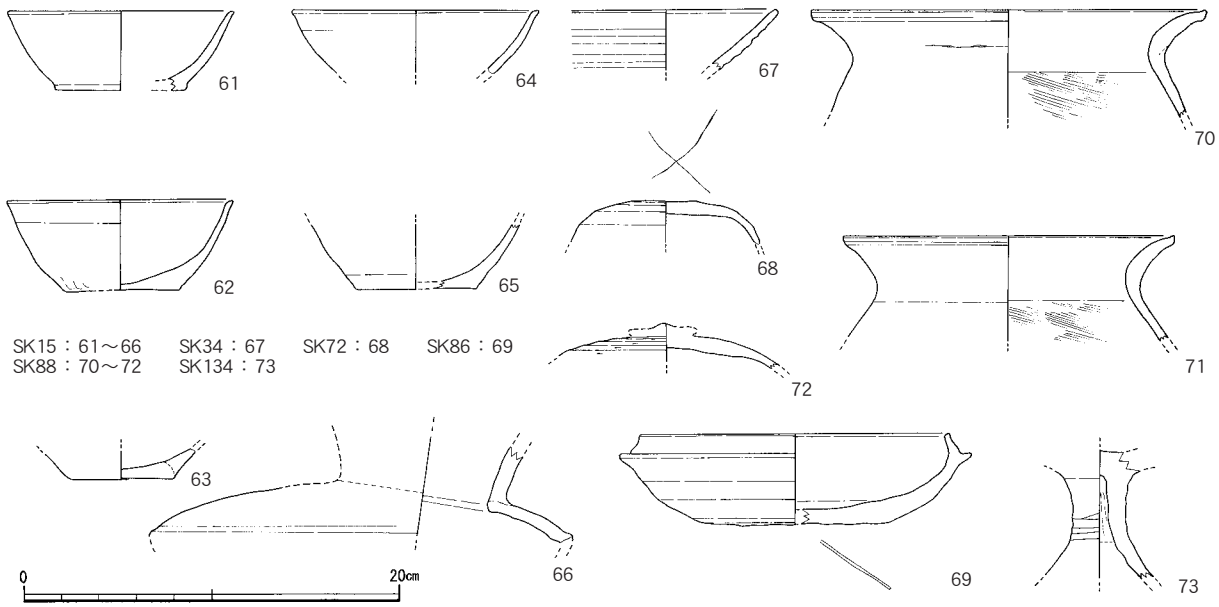
ラ記号「×」が天井部に認められる。75は須恵器杯身。これらは飛鳥時代に属すると考えられる。

ＳＤ18出土遺物(76～80)　76は土師器甕である。77・78は須恵器蓋。ツマミはともに認められない。79は須恵器高杯脚部である。80は円筒状の土錘である。これらは、飛鳥時代に属すると考えられるものである。

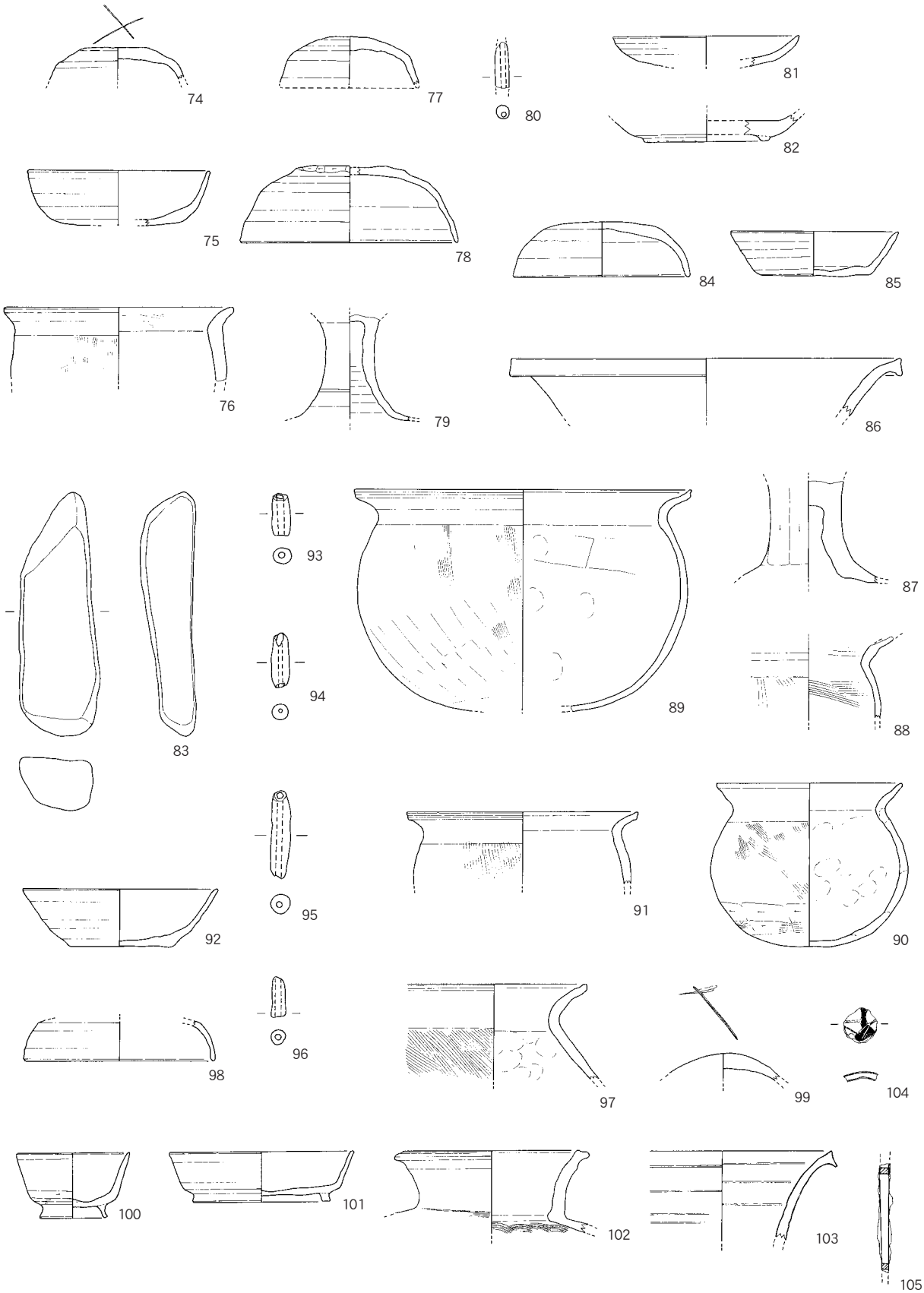
ＳＤ131出土遺物(81・82)　81は土師器皿である。④ 82は陶器山茶椀底部片である。低い高台が認められる。これらは鎌倉時代のものであろうか。

柱穴出土遺物(83～96)　83はｃ16pit2出土の石製品。砥石であろうか。84・85はｅ36pit3から出土である。84は須恵器蓋、85は須恵器杯。86はh38pit1出土の須恵器甕口縁部小片である。これらは奈良時代のものと考えられる。87はｊ42pit1の土師器高杯脚部である。短い脚部に面取りがみられる。88はi20pit1出土の土師器甕である。89はe31pit3出土の土師器甕。器形は57・58と同様の特徴を持つが、89はより明瞭な口縁端部の面取りが認められる。90はe31pit4出土の土師器甕である。91はe37pit7出土の土師器甕である。大きく外反する頸部に、面取りした口縁端部がつく。これらは奈良時代のものと思われる。92はh44pit3より出土のロクロ土師器椀である。底部に糸切り痕が認められる。平安時代末期のものであろう。93～96は円筒状の土錘である。93はi27pit2出土、94はe38pit2出土、95はg37pit4出土、96はe39pit8出土である。これら以外にも、g32pit1から石鏃が１点出土している。法量は、長さ1.56cm、幅1.55cm、厚さ0.32cm、重量0.65ｇ。石材はサヌカイト。ほぼ完形である。縄文時代のものか。

包含層出土遺物(97～105)　97は土師器甕の口縁部片である。外反する口縁部の端部には面取りが認められる。奈良時代に属するだろうか。98・99は須恵器蓋である。いずれも奈良時代に属するであろう。100は須恵器杯である。小さい杯部に高台がつく。101は須恵器台付杯である。奈良時代のものだろう。102・103は須恵器甕である。奈良時代に属するものと考えられる。104は染付磁器の転用と考えられる加工円盤である。立体的に屈曲が認められることから、椀を加工したものと考えられる。器壁は乳白色で染付の発色もよいが、断面は褐色を呈する。近世以降のものと思われる。105は鉄釘である。断面が方形で、近世以前のものと考えられる。これら以外にも、包含層から石鏃が１点出土している。法量は長さ1.92cm、幅1.51cm、厚さ0.29cm、重量0.66ｇがある。石材はサヌカイト。ほぼ完形である。縄文時代のものか。古代のものと考えられるフイゴ羽口も出土した。　（伊藤文彦）



第40図　SK15・34・72・86・88・134出土遺物実測図（１：４）



SD9：74・75　SD18：76～80　SD131：81・82　ピット：83～96　包含層出土遺物：97～105

0　20cm

第41図　SD９・18・131・ピット・包含層出土遺物実測図（１：４）

報告番号	実測番号	種類	器種	出土位置	法径（cm）			調整技法	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	底径	器高						
1	001 -01	縄文 土器	深鉢	SX5	38.8	7.8	42.0	外:ヨコナデ 突帯貼付 ケズリ 内:ヨコナデ	粗	並	外:にぶい橙5YR7/4 にぶい黄橙10YR7/3 ・6/3 褐灰10YR5/1・4/1 内:灰黄褐10YR5/1 にぶい黄橙10YR6/3	口縁3/12 底部10/12	土器棺
2	005 -01	弥生 土器	壺	SX1	体部 59	9.0		外:ハケ残る 内:オサエ・ナデ	粗	並	明黄褐10YR7/6 橙7.5YR6/6 にぶい黄橙10YR7/4	底部10/12	
3	002 -01	弥生 土器	壺	SX2	13.0	7.7	体部 最大 25.7	外:ハケ5～6本/cm 刺突 内:ナデ オサエ	粗	並	にぶい黄橙10YR7/4 橙7.5YR6/6	口縁4/12 体部10/12 底部完存	
4	003 -01	弥生 土器	壺	SX2	10.6 体部 最大 18.1	5.2	21.2	外:刺突・ハケ 内:ナデ ハケ11本/cm	粗	並	橙7.5YR6/6	口縁小片 体部9/12 底部 ほぼ完存	底部 穿孔
5	026 -01	弥生 土器	壺	SX135		7.0		外:不明瞭 内:ナデ・オサエ 工具ナデ	粗	並	にぶい橙7.5YR6/4 にぶい褐7.5YR5/4 明褐7.5YR5/6	口縁3/12 体部10/12	
6	023 -03	弥生 土器	壺	SX135		5.5		外:ハケ痕跡 内:ナデ	粗	並		底部完存	
7	023 -02	弥生 土器	壺	SX127				外:クシ描き横線 内:オサエ・ナデ	やや 粗	やや 良	外:にぶい黄橙10YR6/4 内:暗灰黄2.5Y5/2	口縁部のみ 欠	
8	023 -01	弥生 土器	壺	SX127	体部 34.6	7.5		外:刺突・ナデ クシ描き横線 ハケ5本/cm 内:オサエ・ナデ ハケ10本/cm	やや 粗	並	浅黄橙10YR8/3・ にぶい黄橙10YR6/4	口縁部のみ 欠	黒変
9	016 -06	須恵器	蓋	SB36	12.8		3.9	外:ロクロナデ ヘラ記号 内:ロクロナデ	やや 密	やや 良	灰黄2.5Y7/2・6/2	口縁小片	
10	007 -03	土師器	甕	SB100				外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗	並	浅黄橙10YR8/4	口縁小片	
11	007 -02	土師器	甕	SB101				外:ヨコナデ タテハケ 内:ハケ・ナデ ヨコハケ9本/cm ヨコナデ	粗	並	外:にぶい橙5YR6/4 にぶい赤褐5YR5/4 内:浅黄橙10YR8/4	口縁小片	
12	016 -04	須恵器	杯	SB101	12.9	10.7	3.1	外:ロクロナデ ロクロケズリ 内:ロクロナデ	やや 密	良	灰白5Y7/1・7/2	口縁2/12 底部4/12	
13	009 -03	土師器	甕	SH26				外:ヨコナデ 内:ヨコナデ・ナデ	粗	良	外:浅黄橙10YR8/4・ にぶい黄橙10YR7/4 内:にぶい褐7.5YR5/4 断:灰7.5Y4/1	口縁小片	
14	004 -02	須恵器	蓋	SH26	14.3	ツマミ 径 2.7	3.4	外:貼付ナデ ロクロケズリ ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや 粗	並	外:灰黄2.5YR7/2 内:灰白2.5YR7/1 灰白10YR7/1	口縁11/12	
15	004 -03	須恵器	杯	SH26	17.1		4.2	外:ロクロナデ ヘラ切り 内:ロクロナデ	やや 密	並	外:灰7.5Y6/1 内:灰7.5Y6/1 灰N4/0	口縁4/12	歪み大
16	027 -02	鉄製品	鏨	SH26	長6.9	幅7.8	厚1.3						
17	009 -02	土師器	甕	SH28	20.7			外:ヨコナデ ハケ 内:ヨコナデ	粗	良	にぶい褐2.5YR5/3	口縁小片	
18	009 -05	土師器	甕	SH28	20.8	頸部 17.4		外:ヨコナデ ハケ5本/cm 内:ヨコナデ ハケ	粗	良	外:にぶい褐7.5YR6/3 内:にぶい褐7.5YR5/4	口縁小片 頸部3/12	
19	018 -06	土師器	皿	SH28				外:ミガキ 内:不明瞭	やや 粗	やや 不良	にぶい赤褐2.5YR5/4 ・2.5YR4/4	底部3/12	
20	008 -07	土師器	皿	SH28	23.6		2.05	外:ナデ・ケズリ ヨコナデ 内:ヨコナデ ナデ	やや 密	良	外:にぶい褐7.5YR5/4 内:橙5YR7/6	口縁2/12	
21	008 -04	須恵器	杯	SH28		9.0	残1.0	外:貼付ナデ 糸切り・ナデ 内:ロクロナデ	やや 密	良	外:灰褐7.5YR6/2 にぶい褐7.5YR6/3 内:にぶい橙7.5YR7/3 灰褐7.5YR6/2	高台6/12	

第７表　出土遺物観察表①

報告番号	実測番号	種　類	器　種	出土位置	法　径（cm）			調整技法	胎土	焼成	色　調	残　存	備考
					口径	底径	器高						
22	025 -04	須恵器	蓋	SH32				外:ヘラケズリ 内:ロクロナデ	やや密	やや不良	灰白10YR8/2	小片	
23	016 -05	須恵器	蓋	SH32	ツマミ径2.8			外:ロクロケズリ ロクロナデ 貼付ナデ 内:ロクロナデ	やや良	良	灰黄2.5Y6/2	小片	
24	004 -01	土師器	椀	SH32	15.0	11.0	4.0	外:ロクロナデ 高台貼付ナデ ナデ 内:ロクロナデ	やや密	並	橙5YR6/6	高台6/12	
25	014 -01	石製品	切目石錘	SH32	長5.9	幅2.9	厚1.6						
26	012 -02	石製品	砥石	SH32	残存長16.0	残存幅5.0							
27	007 -08	須恵器	高杯	SH35 周溝		高台貼付部5.5		外:ロクロナデ 貼付ナデ 内:ロクロナデ	やや密	良	黄灰2.5Y5/1・4/1	高台貼付部4/12	内面自然釉
28	006 -08	土製品	土錘	SH35	残存長3.8	幅1.15	重量2.9g		やや密	並	橙7.5YR7/6		
29	006 -09	土製品	土錘	SH42	残存長2.6	幅1.0	重量1.9g		やや粗	並	淡黄2.5Y8/3 黄灰2.5Y5/1		
30	009 -01	土師器	壺	SH43	頸部8.4			外:ヨコナデ 内:ヨコナデ ナデ・オサエ	やや粗	良	外:浅黄橙10YR8/4 黄橙10YR8/6 内:黒褐2.5Y3/1	頸部4/12	
31	010 -03	土師器	杯	SH46	12.0		3.0	外:ヨコナデ ナデ・オサエ 内:ヨコナデ ミガキ・暗文	やや密	やや良	明赤褐2.5YR5/6	口縁3/12	
32	010 -01	土師器	甑	SH46	21.6			外:ヨコナデ ハケ10本/cm 内:ナデ ハケ10本/cm	粗	並	外:浅黄橙10YR8/3 にぶい黄橙10YR7/3 灰黄褐10YR6/2 内:にぶい黄橙7/4	口縁2/12	
33	011 -02	須恵器	蓋	SH46	9.3		3.0	外:糸切り ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや密	やや良	外:黄灰2.5Y6/1 灰N5/0 内:灰5Y6/1・灰5Y5/1	口縁3/12	
34	019 -01	土師器	甕	SH47	20.6			外:ヨコナデ ハケ8本/cm 内:ヨコナデ ハケ	粗	やや良	浅黄橙10YR8/3 断:暗灰N3/0	口縁3/12	
35	008 -08	土師器	甕	SH47				外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	良	褐7.5YR4/3 橙7.5YR7/6 浅黄橙10YR8/4	口縁小片	
36	011 -01	土師器	甑	SH47	21.8			外:ヨコナデ タテハケメ5本/cm 内:ヨコナデ 工具ナデ	やや粗	やや良	外:浅黄橙10YR8/4 灰N4/0 内:浅黄橙10YR8/4	口縁2/12	
37	020 -02	須恵器	甕	SH47	14.0			外:ロクロナデ カキメ 内:ロクロナデ	やや密	やや良	灰白N8/0	口縁1/12	
38	014 -02	石製品	石斧	SH47	残存長12.2	最大幅6.9	最大厚3.8						
39	008 -10	土製品	土錘	SH52			重量5.76g		やや粗	良	にぶい褐7.5YR5/4 ・淡黄2.5Y8/3		
40	006 -06	土製品	土錘	SH52	全長3.5	幅1.2	重量4.2g		粗	並	浅黄2.5Y7/3 黄灰2.5Y4/1		
41	022 -02	土師器	甕	SH64	12.8	頸部11.2		外:ヨコナデ 不明瞭 内:ヨコナデ 不明瞭	やや粗	並	にぶい黄橙7.5YR7/4	口縁4/12 頸部4/12	
42	025 -01	土師器	甕	SH64	13.5			外:ヨコナデ ハケ6本/cm 内:ヨコナデ ナデ	粗	良	外:赤橙10R6/6・6/8 内:浅黄橙7.5YR8/4 ・8/6 赤橙10R6/6	口縁8/12	
43	010 -02	土師器	甕	SH64				外:ナデ ハケ5本/cm 内:ナデ・ケズリ ハケ6本/cm	やや密	やや良	外:にぶい黄橙10YR6/3 にぶい褐7.5YR5/3 にぶい橙5YR6/4 内:灰黄褐10YR4/2 灰黄褐10YR5/2 にぶい黄褐10YR5/3	体部片	
44	008 -03	須恵器	蓋	SH64	12.4		3.4	外:ロクロケズリ ロクロナデ ヘラ切り 内:ロクロナデ	やや粗	良	外:灰N6/0 内:灰白N7/0	口縁3/12	

第８表　出土遺物観察表②

報告番号	実測番号	種類	器種	出土位置	法径（cm）			調整技法	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	底径	器高						
45	020 -05	須恵器	杯身	SH64				外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや密	やや良	灰N6/0	口縁小片	
46	022 -04	須恵器	短頸壺	SH64	10.4	頸部 11.0 体部 12.4		外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰7.5Y6/1	口縁小片 頸部4/12 体部4/12	
47	011 -03	須恵器	壺	SH64				外:ロクロナデ ロクロケズリ 内:ロクロナデ	やや粗	やや良	外:灰白5Y7/1 内:灰白5Y7/1	底部10/12	
48	017 -02	土師器	甕	SH91	28.9			外:ヨコナデ ハケ 内:ヨコナデ ハケ・ナデ	やや粗	やや良	橙7.5YR6/6	口縁小片	
49	018 -01	土師器	甕	SH91				不明瞭	やや粗	やや不良	浅黄橙10YR8/4	口縁小片	
50	012 -01	石製品	台石	SH91	残存長 17.4	残存幅 3.0							
51	021 -01	石製品	磨石	SH98									
52	019 -02	土師器	甕	SH126	15.8			外:ヨコナデ ハケ5～6本/cm 内:ハケ4～5本/cm	やや粗	やや良	にぶい橙7.5YR7/4 浅黄橙7.5YR8/4	口縁8/12	
53	022 -07	須恵器	蓋	SH126				外:ロクロケズリ ロクロナデ ヘラ記号 内:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	小片	
54	020 -04	陶器 山茶椀	椀	SH126		高台径 9.6		外:ロクロナデ 糸切り 高台貼付ナデ ナデ 内:ロクロナデ	やや粗	やや不良	灰白2.5Y8/2	高台3/12	
55	025 -02	土師器	甕	SH139	17.2	頸部 12.6		外:ヨコナデ ナデ? 内:ヨコナデ 工具ナデ	粗	良	外:浅黄橙7.5YR8/4 にぶい橙7.5YR6/4 内:浅黄橙10YR8/4 にぶい黄橙10YR6/3	口縁1/12 頸部2/12	
56	024 -03	土師器	壺	SH139				外:ナデ・剥離 内:ナデ・剥離	粗	良	外:淡赤橙2.5YR7/4 淡黄橙10YR8/3 淡黄橙10YR8/4 内:黄橙10YR8/6 明黄褐10YR7/6	底部8/12	
57	024 -02	土師器	甕	SH139	頸部 22.0			外:ヨコナデ 調整不明 内:ヨコナデ ナデ? オサエ?	粗	良		胴部3/12	
58	024 -01	土師器	甕	SH139	22.2		14.7	外:ヨコナデ ハケ? ケズリ? 内:ヨコナデ ナデ?	粗	良	外:浅黄橙10YR8/3 内:浅黄橙10YR8/3 にぶい褐7.5YR5/4 断:暗灰N3/0	口縁3/12	
59	015 -01	石製品	不明	SH139	最大長 23.8	最大幅 5.3	最大厚 4.4						
60	013 -01	石製品	不明	SH139	長 24.0	幅7.9 ～9.2	厚6.7						
61	018 -03	土師器	椀	SK15	11.8	6.8	6.7	外:ロクロナデ 糸切り 内:ロクロナデ	やや密	やや良	橙7.5YR7/6	口縁3/12	
62	010 -04	土師器	椀	SK15	12.0	6.0	4.8	外:ヨコナデ ナデ・オサエ 糸切り 内:ヨコナデ ナデ	やや密	やや良	外:橙5YR7/6・ にぶい橙7.5YR7/4 内:橙5YR7/6 底:にぶい褐7.5YR6/3	口縁6/12 底部 ほぼ完存	
63	018 -05	土師器	椀	SK15				外:ロクロナデ 糸切り 内:ロクロナデ	やや密	やや良	外:浅黄橙10YR8/4 内:橙7.5YR7/6	底部9/12	
64	018 -02	土師器	椀	SK15	12.4			ロクロナデ	やや密	やや良	浅黄橙7.5YR8/6	口縁3/12	
65	018 -04	土師器	椀	SK15		6.2		外:ロクロナデ 糸切り痕 内:ロクロナデ	やや密	やや良	橙7.5YR7/6	底部3/12	
66	022 -05	須恵器	平瓶	SK15		頸部 9.0 体部 22.5		外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや密	良	灰5Y6/1・5/1	小片	

第９表　出土遺物観察表③

報告番号	実測番号	種類	器種	出土位置	法径（cm）			調整技法	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	底径	器高						
67	007 -04	土師器	鉢	SK34				外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	やや密	並	橙5YR7/6	口縁小片	
68	017 -03	須恵器	蓋	SK72				外:ヘラ切り ヘラ記号 ロクロケズリ ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや粗	やや良	外:淡黄2.5Y8/3 内:にぶい黄橙10YR7/4	小片	
69	016 -02	須恵器	杯身	SK86	16.4		4.8	外:ロクロナデ ヘラ切り ナデ・ヘラ記号 内:ロクロナデ ナデ	やや密	良	外:灰5Y6/1 内:灰5Y6/1	口縁小片	
70	006 -01	土師器	甕	SK88	20.7	頸部 16.4		外:ヨコナデ 内:ヨコナデ ハケ	やや密	並	にぶい黄橙10YR7/4 ・6/4	口縁1/12 頸部2/12	
71	022 -01	土師器	甕	SK88	17.4	頸部 13.9		外:ヨコナデ ハケ 内:ヨコナデ ハケ7本/cm	やや密	並	にぶい黄橙10YR7/4	口縁3/12 頸部3/12	
72	007 -07	須恵器	蓋	SK88				外:ロクロケズリ 内:方向ナデ ロクロナデ	やや密	良	灰白10Y7/1	小片	
73	020 -03	須恵器	高杯	SK134				外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや密	やや不良	灰白N7/0	脚部8/12	
74	007 -06	須恵器	蓋	SD9				外:ヘラ記号 ヘラ切り ナデ ロクロナデ ロクロケズリ 内:ロクロナデ	やや密	良	灰5Y6/1・5/1	小片	
75	007 -09	須恵器	杯身	SD9	12.6		3.85	外:ヘラ切り ナデ ロクロナデ 内:乱ナデ ロクロナデ	やや粗	良	灰7.5Y6/1	口縁1/12	
76	006 -02	土師器	甕	SD18	15.6	頸部 14.4		外:ヨコナデ タテハケ5本/0.8cm 内:ヨコナデ ハケ4本/cm	粗	並	にぶい橙7.5YR6/4	口縁1/12 頸部2/12	
77	006 -03	須恵器	蓋	SD18	9.5		3.5	外:ヘラ切り ナデ ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや粗	並	灰白2.5Y8/2・7/1	口縁3/12	
78	006 -05	須恵器	蓋	SD18	15.0		5.4	外:ナデ ヘラケズリ ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰10Y6/1	口縁2/12	
79	021 -02	須恵器	高杯	SD18				外:ロクロナデ ヨコナデ 内:ロクロナデ ヨコナデ	やや粗	やや不良	外:橙2.5YR7/6 内:橙5YR7/6	脚部8/12	
80	006 -07	土製品	土錘	SD18	残存長 3.2	幅1.0	重量 2.3g		やや粗	並	浅黄橙10YR8/3		
81	008 -05	土師器	皿	SD131	13.0		残2.1	外:ヨコナデ ナデ 内:ヨコナデ ナデ	密	良	外:橙5YR7/6 内:橙2.5YR7/6	口縁2/12	
82	008 -06	陶器 山茶椀	椀	SD131		高台径 8.6		外:ロクロナデ 糸切り 貼付ナデ 内:ロクロナデ	やや粗	良	灰白10YR8/2 浅黄橙10YR8/3	底部小片	
83	014 -03	石製品	不明	c16 P2	最大長 17.0	最大幅 5.6	最大厚 3.5						
84	023 -04	須恵器	蓋	e36 P3	12.0 ～ 12.6		3.9	外:ヘラ切り ナデ ロクロナデ 内:ナデ	やや粗	やや良	灰5Y5/1・灰N5/0	口縁9/12	
85	016 -03	須恵器	杯	e36 P3	11.5	7.5	3.1	外:ロクロナデ ヘラ切り 内:ロクロナデ	やや密	不良	灰白2.5Y8/2 灰10Y6/1	口縁4/12	
86	016 -01	須恵器	甕	h38 P1	27.0			外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや密	やや良	外:灰5Y6/1 内:灰5Y6/1	口縁2/12	

第10表　出土遺物観察表④

報告番号	実測番号	種類	器種	出土位置	法径（cm）			調整技法	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	底径	器高						
87	021 -03	土師器	高杯	j42 P1				外:ケズリ ヨコナデ 内:ナデ・摩滅	やや粗	やや良	橙7.5YR7/6	脚部8/12	
88	021 -04	土師器	甕	i20 P1				外:ヨコナデ ハケ 内:ハケ3本/cm ハケ7本/cm	やや粗	やや良	外:浅黄橙10YR8/3 内:淡赤橙2.5YR7/4	口縁小片	
89	017 -01	土師器	甕	e31 P3	23.7	体部 23.0		外:ヨコナデ ケズリ・ハケ 内:ヨコナデ・ナデ	やや粗	やや不良	明黄褐10YR7/6 黄橙10YR8/6	口縁2/12	
90	022 -03	土師器	甕	e31 P4	12.8	頸部 10.6 体部 13.8	11.4	外:ヨコナデ ハケ・ケズリ 内:ヨコナデ オサエ・ナデ	粗	並	にぶい黄橙10YR7/4	口縁小片 頸部3/12 体部6/12	
91	019 -03	土師器	甕	e37 P7	16.0			外:ヨコナデ ハケ6本/cm 内:ヨコナデ	やや粗	やや良	外:淡赤橙2.5YR7/4 内:浅黄橙10YR8/4	口縁2/12	
92	019 -04	土師器	椀	h44 P3	13.4	7.2	4.1	外:ロクロナデ 糸切り 内:ロクロナデ	やや密	やや良	外:橙5YR 内:橙7.5YR7/6	口縁3/12 底部完存	
93	018 -07	土製品	土錘	i27 P2	長3.0	幅1.3	重量 3.5g		やや密	やや良	灰白2.5Y8/2		
94	025 -03	土製品	土錘	e38 P2	残存長 3.8	幅1.1	重量 4.85g		密	良	にぶい褐7.5YR5/4・ にぶい黄橙10YR7/4		
95	025 -05	土製品	土錘	g37 P4	残存長 6.1	幅1.3	重量 9.38g		やや密	良	灰黄褐10YR5/2 灰黄褐10YR6/2		
96	020 -06	土製品	土錘	e39 P8	長2.8	幅1.1	重量 2.39g		やや粗	やや良	淡黄2.5Y8/3		
97	007 -01	土師器	甕	包含層				外:ヨコナデ ハケ7本/cm・ 内:不明瞭・指圧痕	粗	並	にぶい黄橙10YR7/4	口縁小片	
98	006 -04	須恵器	蓋	包含層	13.0			外:ロクロケズリ ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	口縁6/12	
99	022 -06	須恵器	蓋	包含層				外:ヘラ記号 ヘラ切り ナデ ロクロナデ 内:ロクロナデ	やや密	良	灰7.5Y6/1	小片	
100	007 -05	須恵器	杯	包含層	7.8	高台径 4.6	4.6	外:ロクロナデ ヨコナデ ロクロケズリ 貼付ナデ 内:ロクロナデ	密	良	灰5Y5/1 灰褐7.5YR5/2	口縁10/12 高台完存	
101	008 -02	須恵器	杯	包含層	12.8	高台径 9.4	3.4	外:ロクロナデ 貼付ナデ ヘラ切り ナデ 内:ロクロナデ ナデ	やや密	良	外:灰白7.5Y7/1 底外:灰白10YR8/2 内:灰白10YR8/2 灰白2.5Y7/1	口縁3/12 高台4/12	
102	020 -01	須恵器	甕	包含層	12.0			外:ロクロナデ タタキ 内:ロクロナデ 青海波	やや粗	やや良	灰白N7/0・6/0 暗白N3/0	口縁8/12	
103	008 -01	須恵器	甕	包含層				外:ロクロナデ 施釉 内:ロクロナデ	密	良	外:灰5Y6/1 内:灰白7.5Y8/2 灰黄2.5Y7/2 灰黄2.5Y6/2 断:にぶい黄橙10YR7/4	口縁1/12	
104	009 -04	陶器	加工 円盤	包含層			重量 3.58g	外:施釉 内:施釉	密	良	外:青色 暗緑灰10G7/1 断:浅黄橙10YR8/3		
105	027 -01	鉄製品	鉄釘	包含層	残存長 7.4	幅0.7							

第11表　出土遺物観察表⑤

[註]

①岡田登「五　桜地区　1　土丹遺跡」(『四日市市史　第二巻　資料編考古１』、四日市市、1988年)。

②弥生土器については下記の文献に拠った。

上村安生「弥生土器編年概観」(『三重県史　資料編　考古1』、三重県、2005年)。

加納俊介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年　東海編』(木耳社、2002年)。

③古代の土器については下記の文献に拠った。

伊藤裕偉「雲出島貫遺跡における古代の土器」(伊藤裕偉・川崎志乃『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター、2001年)。

斎宮歴史博物館「斎宮跡の土器」(『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ　内院地区の調査』、斎宮歴史博物館、2001年)。

④中世の土器については下記の文献に拠った。

伊藤裕偉「中世成立期における伊勢の土器相～雲出島貫遺跡出土資料を中心に～」(『嶋抜Ⅱ』、三重県埋蔵文化財センター、2000年)。

藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要』第３号、三重県埋蔵文化財センター、1994年)。

Ⅴ　結　語

今回の発掘調査の成果について、遺構や遺物を時代別に概観し、結語としたい。

1　検出遺構の状況

(1)　縄文時代

晩期土器棺を確認することができた。住居跡など集落の存在を窺わせる遺構群を調査区内では検出することができなかった。調査区周辺に縄文時代の遺構群が広がる可能性があろう。当時の人々の精神世界を知る上で、大きな成果を得ることができたといえる。

(2)　弥生時代

中～後期の方形周溝墓を３基、土器棺墓３基を確認することができた。住居跡など集落の存在を窺わせる遺構群を調査区内では検出することができなかったものの、遺構の検出の状況から周辺への広がりが感じられる。また、墓と考えられる遺構群の形態が違うことについては、当時の人々の葬送儀礼を考える上で、大きな成果を得ることができたのではないだろうか。

(3)　飛鳥から奈良時代

調査をした部分に限定されるが、当遺跡での最盛期といえなくもない。掘立柱建物24棟、竪穴住居23棟を確認することができた。建物や竪穴住居の方向から５～６期に分別することが可能ではないかと思われる。なお、遺跡周辺は昔の朝明郡に含まれ、小牧北遺跡のある小牧町保々地区は杖部郷で、東に約４kmのところには大金郷（現在の大鐘町・西大鐘町あたり、『和名類聚抄』より）があったのではといわれている。郷の境界は未だに定かではない。『勢陽五鈴遺響』などの文献には、大金郷に「鍛工金作部がおかれ」とあり、鉄製品の加工などが行われていたのではと以前から考えられていて、小牧北遺跡との関連を考えると興味深いものがある。[①] 小牧北遺跡を含む周辺まで大金郷に含まれている可能性もある。また、竪穴住居跡群からは律令期前後の時期の土器が出土しており、大金郷になる前から小鍛冶を行う集団がいたことも考えられる。このことからも掘立柱建物についても、先に述べた「鍛工金作部」に関わる施設群であった可能性があるのではないだろうか。また、竪穴住居跡群の平面形態を比較すると、隅丸方形であることは間違いのないところであるが、ＳＨ28等のように正方形を呈するものと、ＳＨ46等のように長方形を呈しているものが確認できた。小鍛冶等の作業を行う空間を想定しているもの（長方形）とそうでないもの（正方形）に分別がなされていたのではないだろうか。

(4)　平安時代

建物や住居跡は確認することはできなかったが、土師器焼成坑を４基確認することができた。時期は平安時代末期の遺物が出土していて、その時期に属するもの[②]といえよう。明和町北野遺跡で確認されたものとは、遺構の平面形や所属時期の差もあり、一見別の遺構に見えなくもない。先の時期にも述べた

ような、ものの製作等に関わる集団が当該期にも存在するのであろうか。

（5）　中世以降

明確な遺構は確認することができなかった。出土遺物についてもあまり多くはない。調査を行った部分だけの判断であるが、遺跡自体が衰退する時期となるのだろう。（小濵　学）

2　出土遺物の概観

出土した遺物の時期は縄文時代晩期から中世まで長い年代幅にわたっていたが、遺物のうち最も目立つのは、飛鳥時代から奈良時代にかけてのものである。遺物の残存状況はいずれの時代の土器も良くない。これは台地上という遺跡の立地によるものであろう。以下時代毎に記述する。

（1）　縄文時代

縄文時代に属する遺物は、土器棺として使用されていたと考えられる深鉢1点、石鏃2点であった。この深鉢は馬見塚式に属すると考えられ、縄文晩期後半に属するものである。調査区内だけの傾向であるが、縄文晩期に属する遺物は少なく、それに継続する弥生時代前期の遺物は確認することはできなかった。こうしたことから、周辺に縄文時代の集落等が広がる可能性はあるが、あまり濃密ではないようである。

（2）　弥生時代

後期に属すると考えられる弥生土器の出土を確認することができた。これらについては、ほとんどが方形周溝墓の周溝から出土しているものである。4のように底部に穿孔が施される土器が認められることも、これら溝が方形周溝墓の周溝であることの傍証となろう。土器の器形は2のように胴部が強く張り出す中期的な要素を持つものもあるが、全体としては後期の範疇におさまるものと思われる。

（3）　飛鳥時代から奈良時代

出土量が最も多い時期にあたる。その中でも特に飛鳥時代後半から奈良時代前半にかけてのものが多いようである。土師器は杯・甕が多く、甑・高杯も見られる。須恵器は杯身・杯蓋が多く、若干高杯や甕なども見られる。これら土師器・須恵器のほとんどは掘立柱建物や竪穴住居などの遺構に伴って出土しており、これら遺構の時期もまたこの時期と考えて良いだろう。このほか土錘が数点出土しており、河川での漁撈も想定できる。また砥石と考えられる石製品も出土している。このような遺物のあり方から考えると、この時期の集落は遺構数から、長期間にわたって継続している可能性がある。

（4）　平安時代以降

遺物は飛鳥時代から奈良時代にかけての一群のあと平安時代末期まで認められない。集落は一度奈良時代の終わりまでに、廃絶あるいは周辺への移動が考えられる。平安時代末期の遺物としては、ロクロ土師器皿・椀、陶器山茶椀を確認することができた。但し、遺物の出土量は前代と比較して、相対的に多くないことから、この時期の集落についても、中心は当遺跡にはなく周辺に展開していたことが想定できよう。（伊藤文彦）

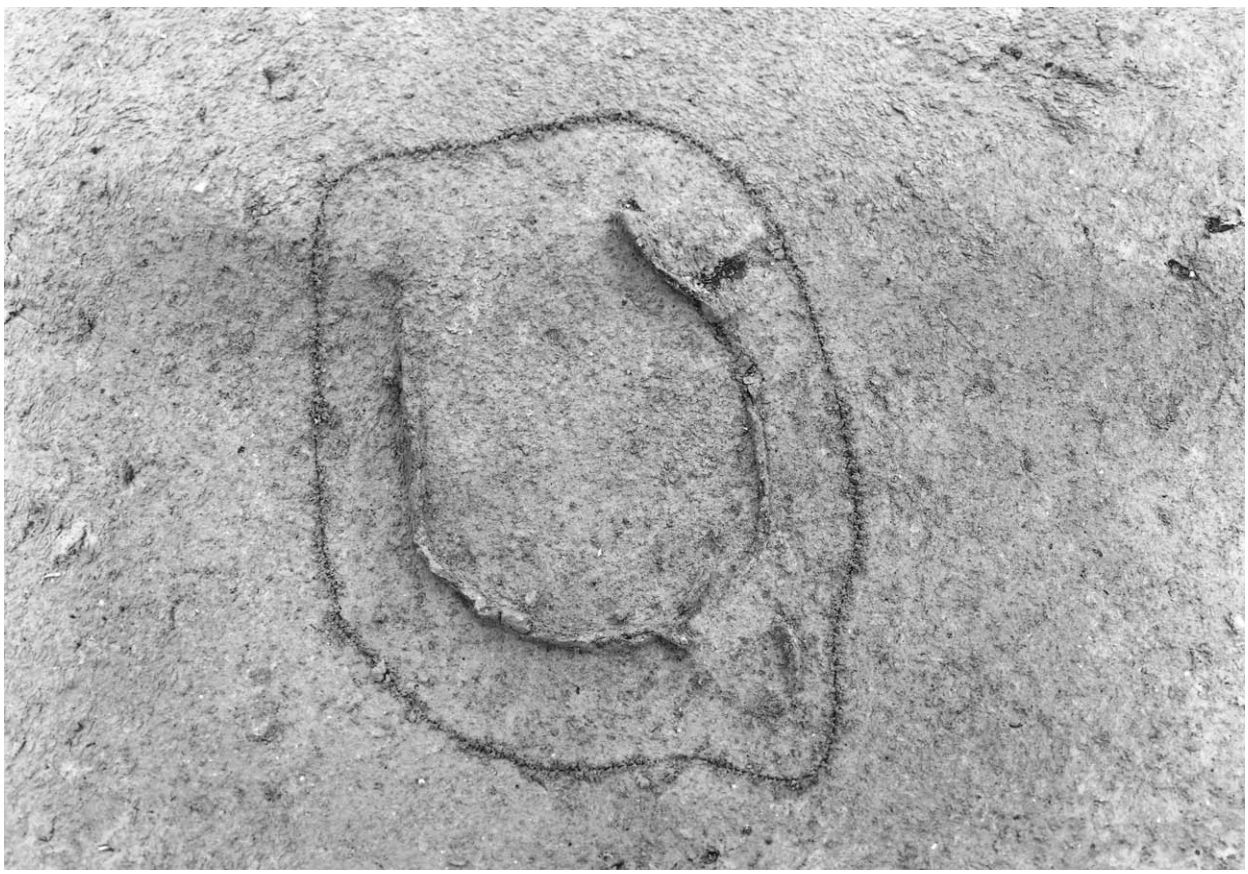
[註]

①『四日市市史　第二巻　史料編　考古』(四日市市、1988年)と『四日市市史　第三巻　史料編　考古Ⅱ』(四日市市、1993年)。に拠った。
『四日市市史』(四日市市、1988年)。

②『北野遺跡（第2・3・4次調査）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1995年）に詳しい。

写 真 図 版

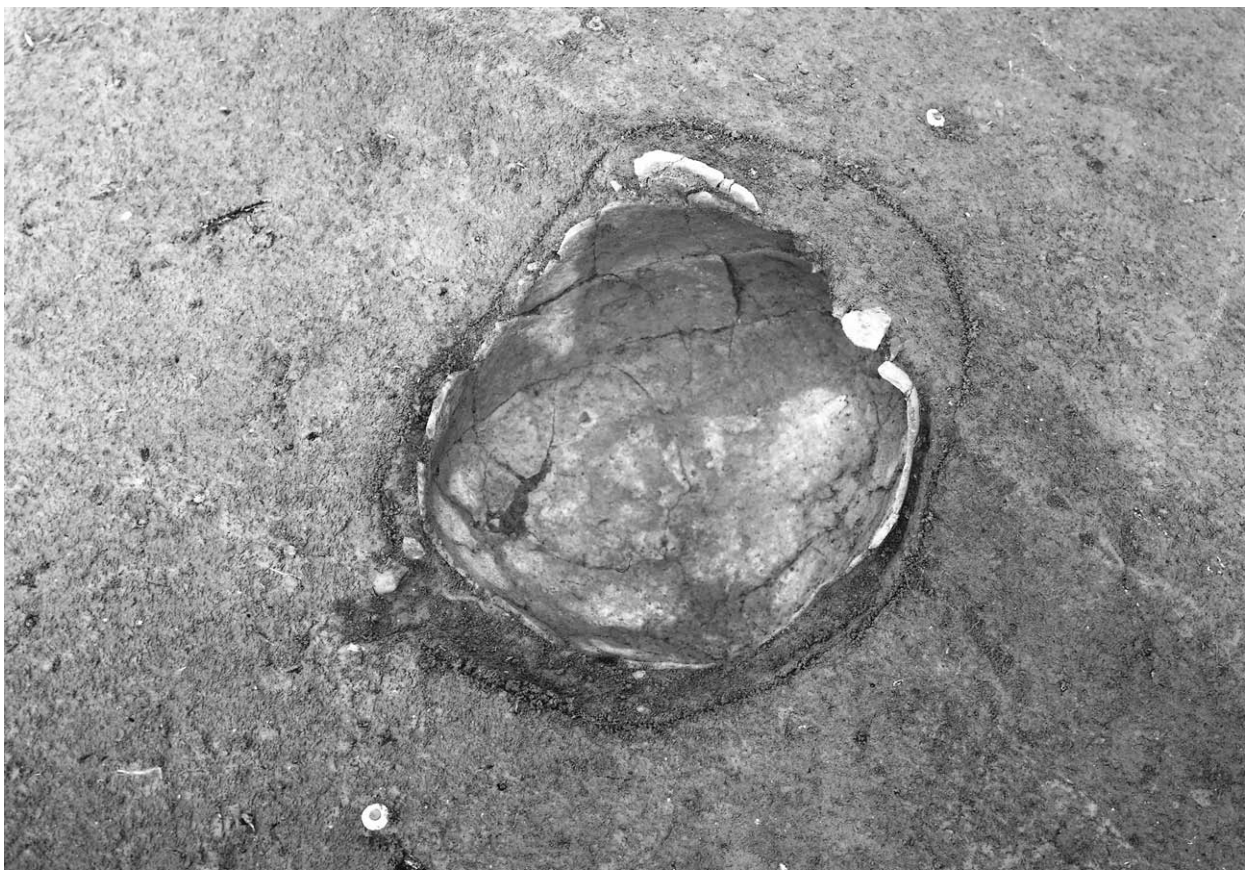
SX 5 遺物出土状況（南から）



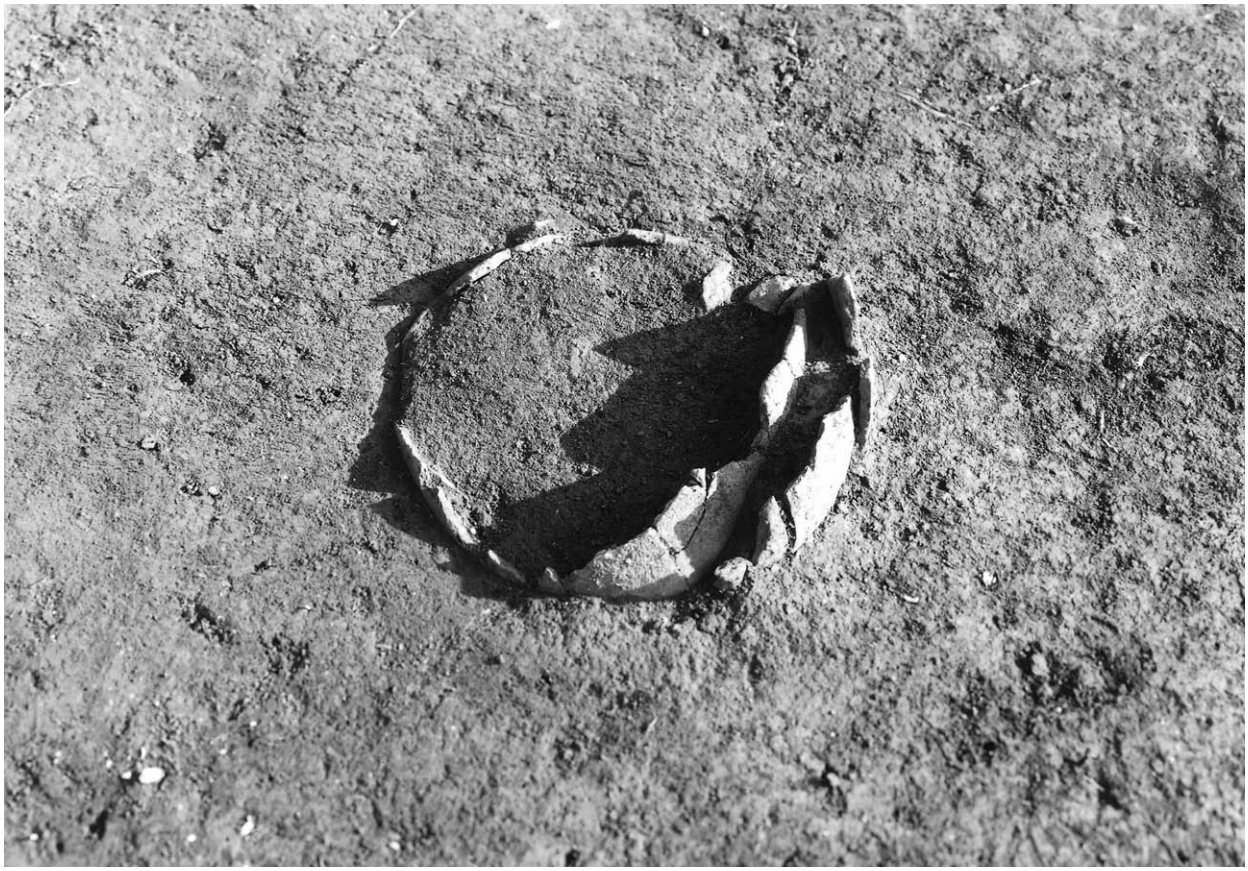
SX 5 遺物出土状況（南東から）

写真図版 2

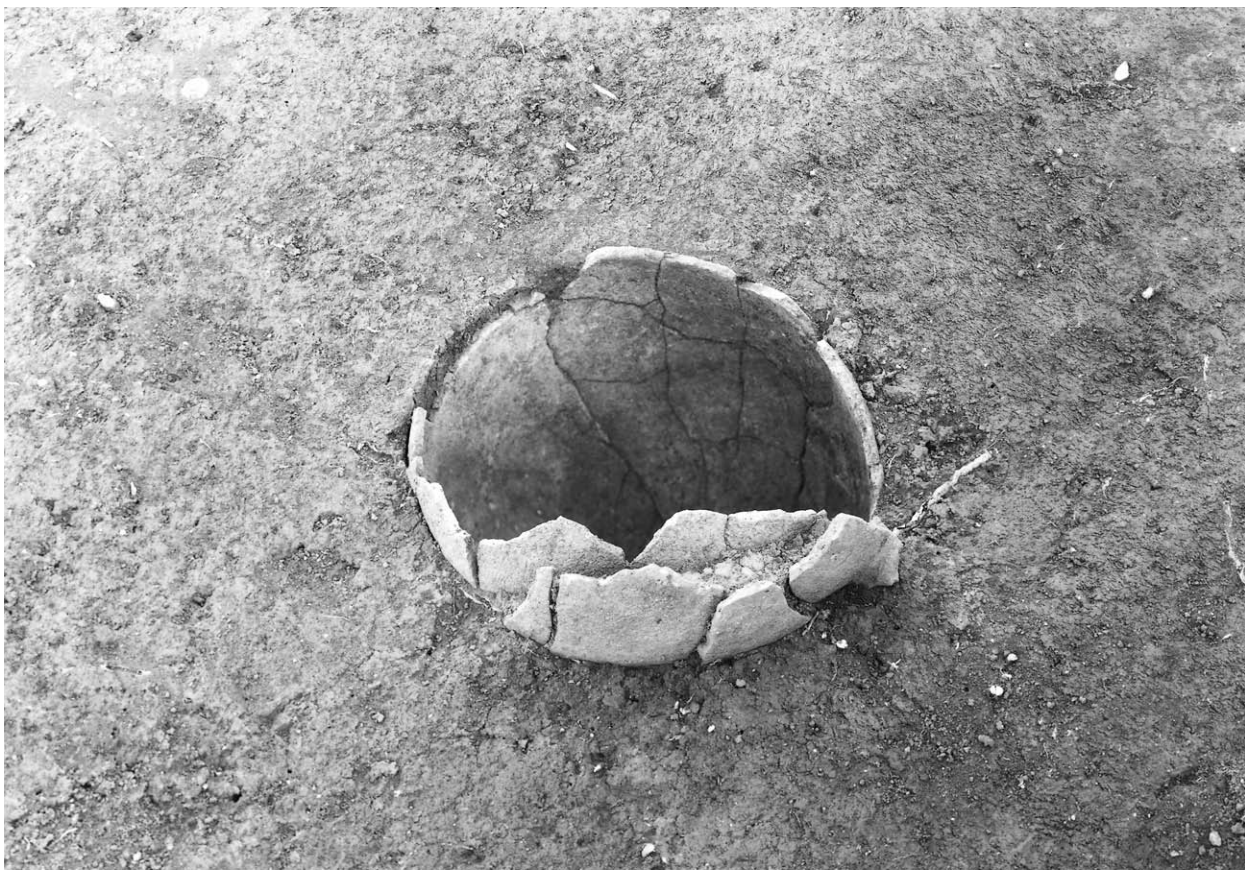
SX 1 遺物出土状況（西から）



SX 1 遺物出土状況（北から）



SX127土器棺（西から）



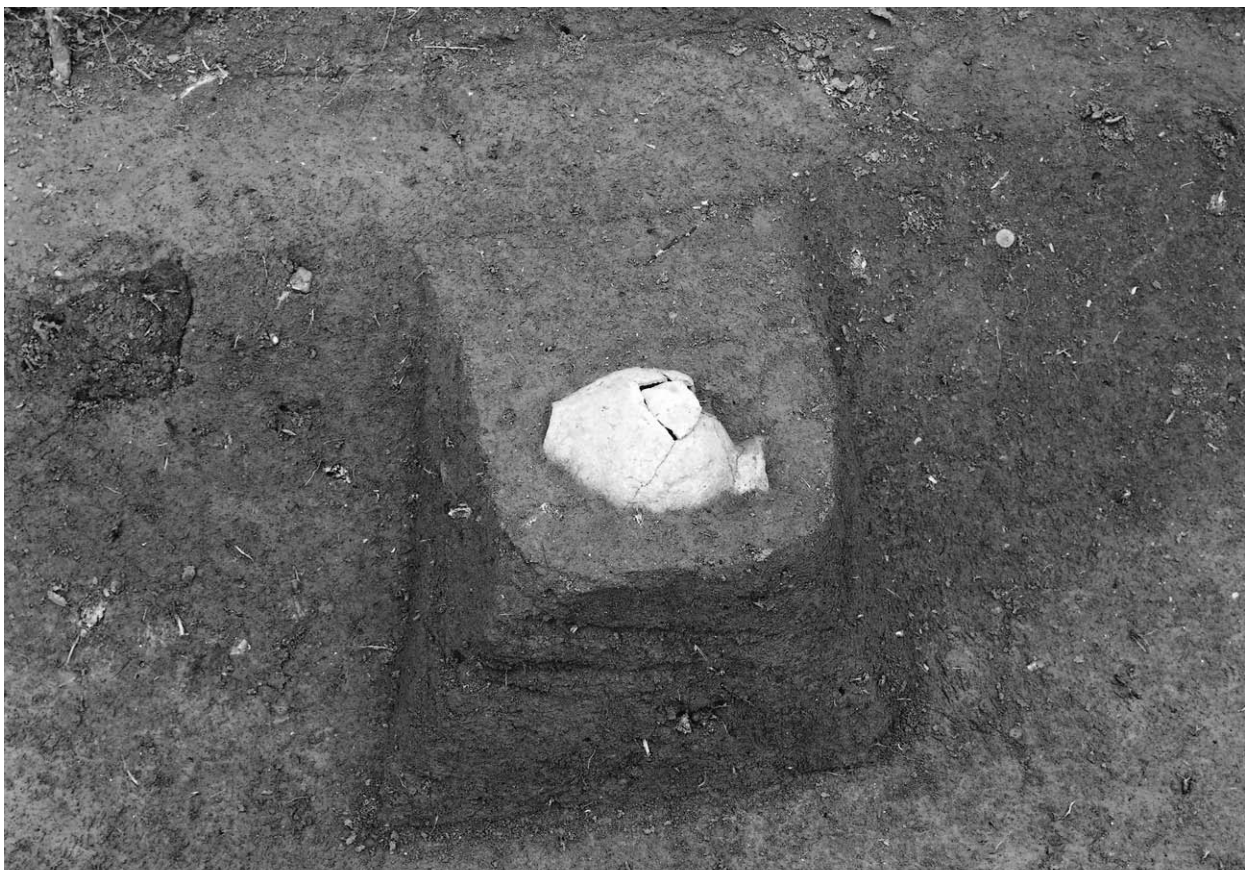
SX127遺物出土状況（南から）

写真図版４

SX135遺物出土状況（東から）

SX２完掘状況（北から）

SX 2 遺物出土状況（東から）



SX 2 遺物出土状況（北から）

写真図版 6

SX133完掘状況（西から）

SX 2 ・129・133完掘状況（北から）

SB36完掘状況（北東から）

SB41完掘状況（南東から）

写真図版８

SB95・99完掘状況（南西から）

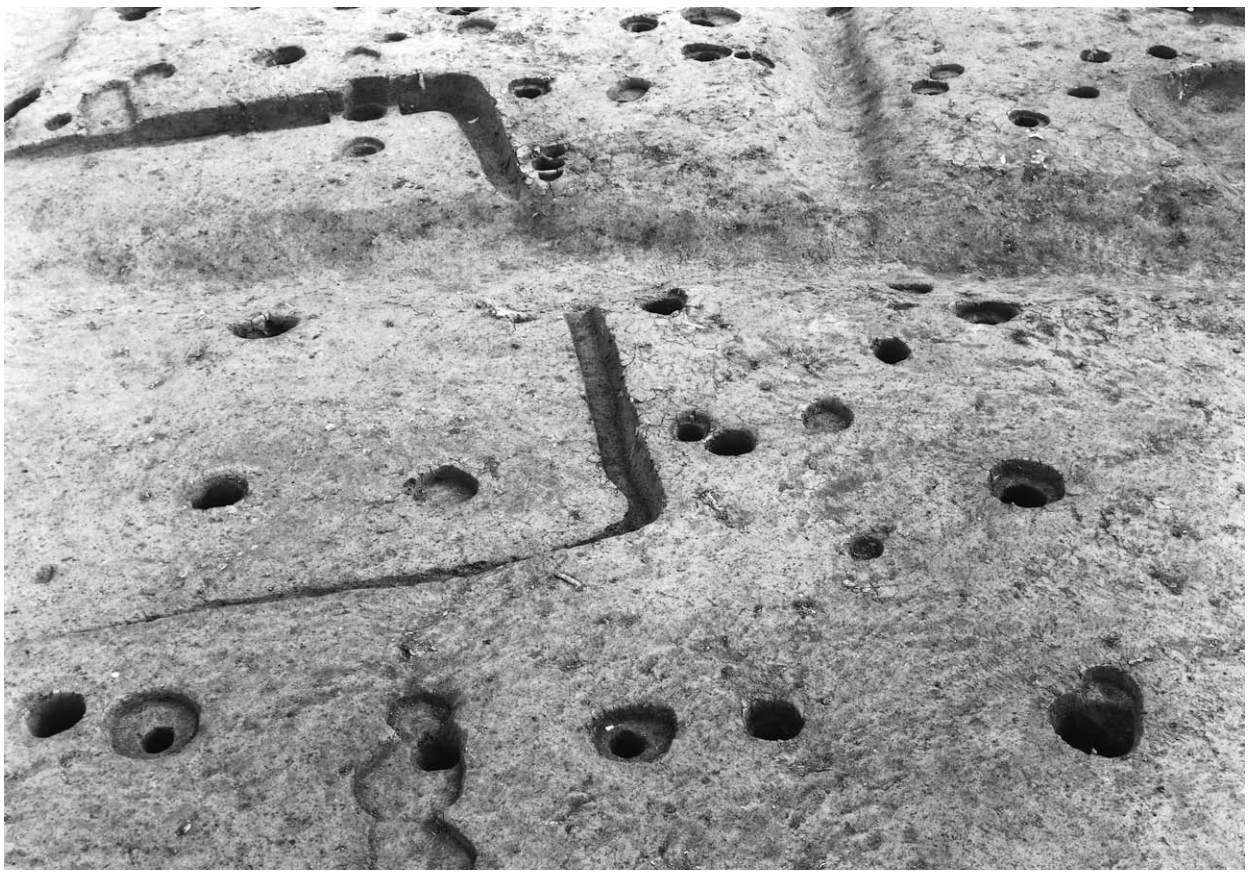
SB95・99完掘状況（南東から）

SB101完掘状況（西から）

SB102完掘状況（南から）

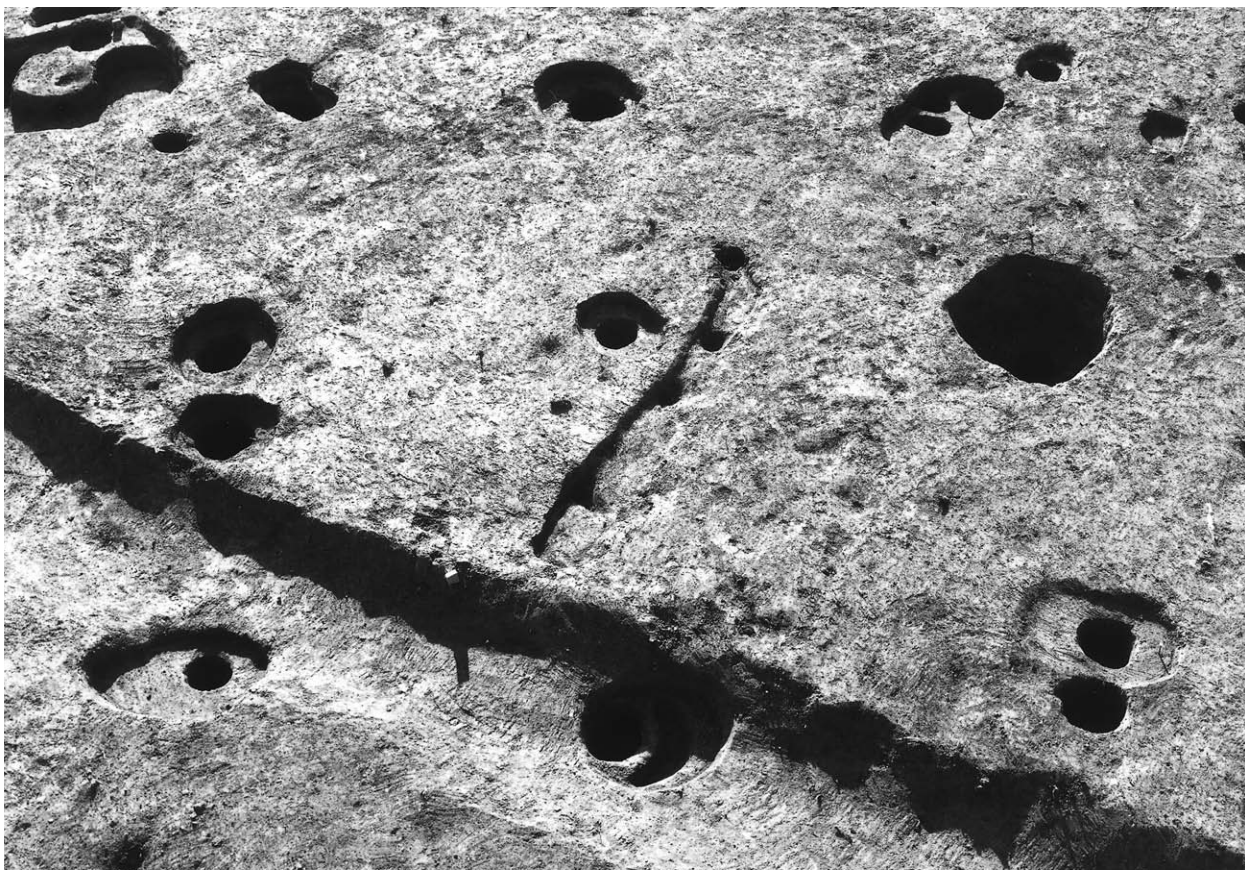
写真図版10

SB103完掘状況（南から）



SB104完掘状況（西から）

SB105完掘状況（西から）



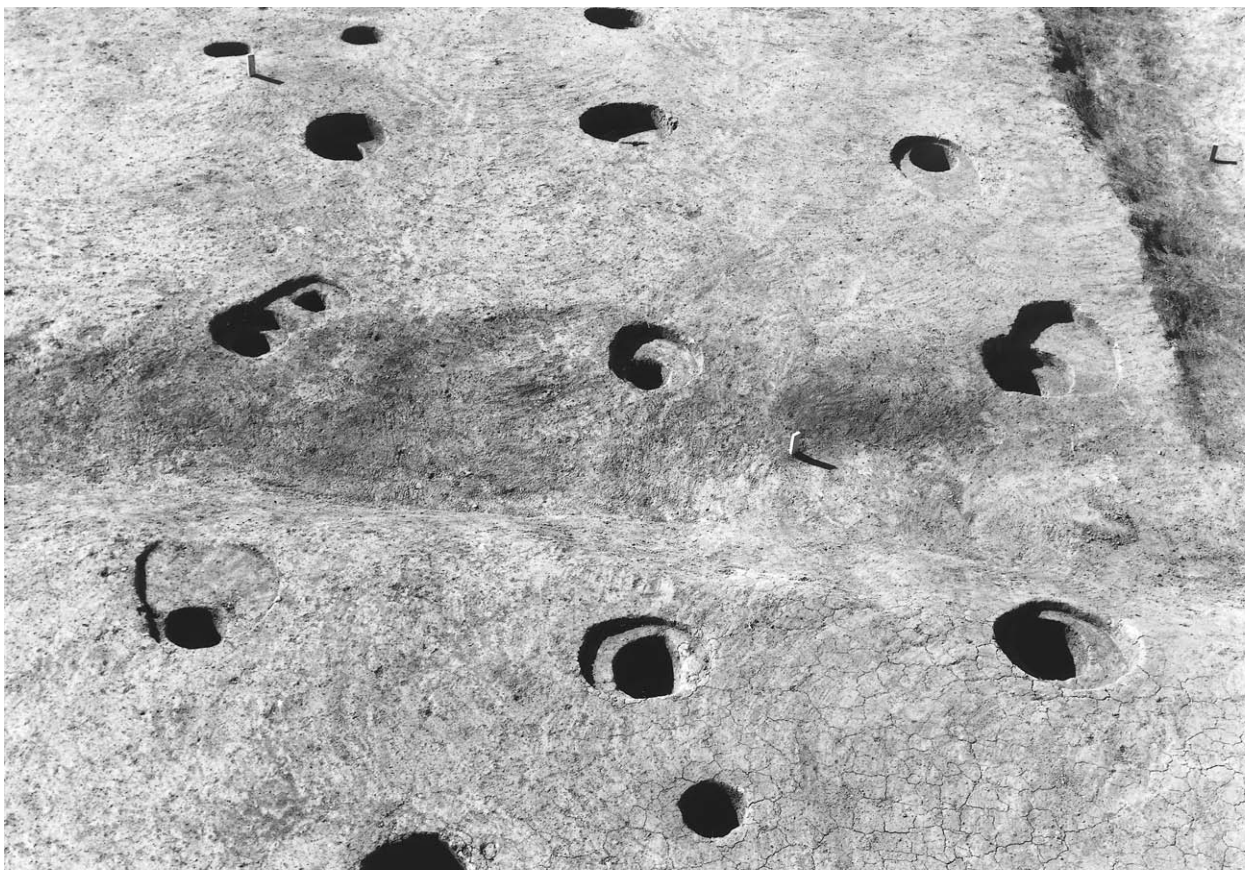
SB106完掘状況（北から）

写真図版12

SB108完掘状況（北から）

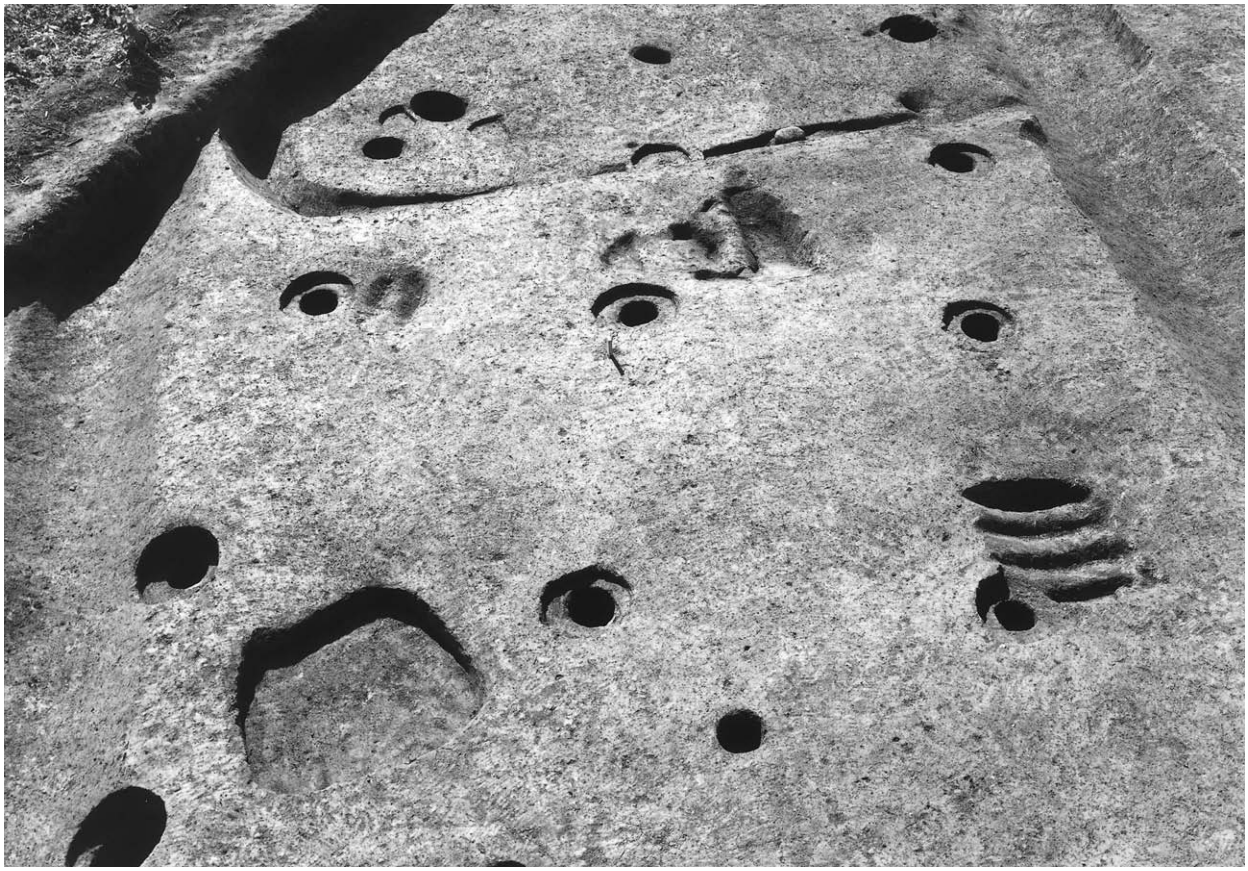
SB109完掘状況（西から）

SB110完掘状況（北西から）

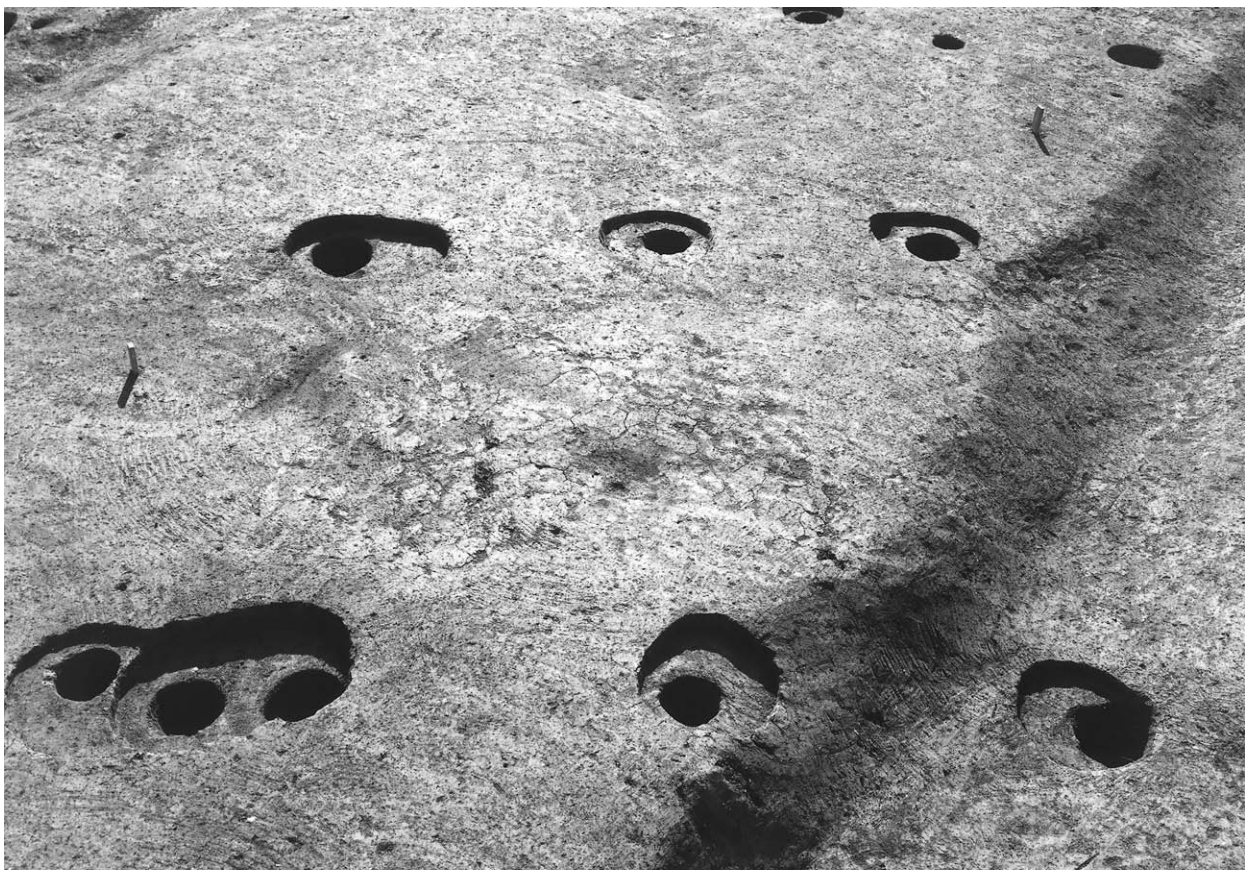


SB111完掘状況（東から）

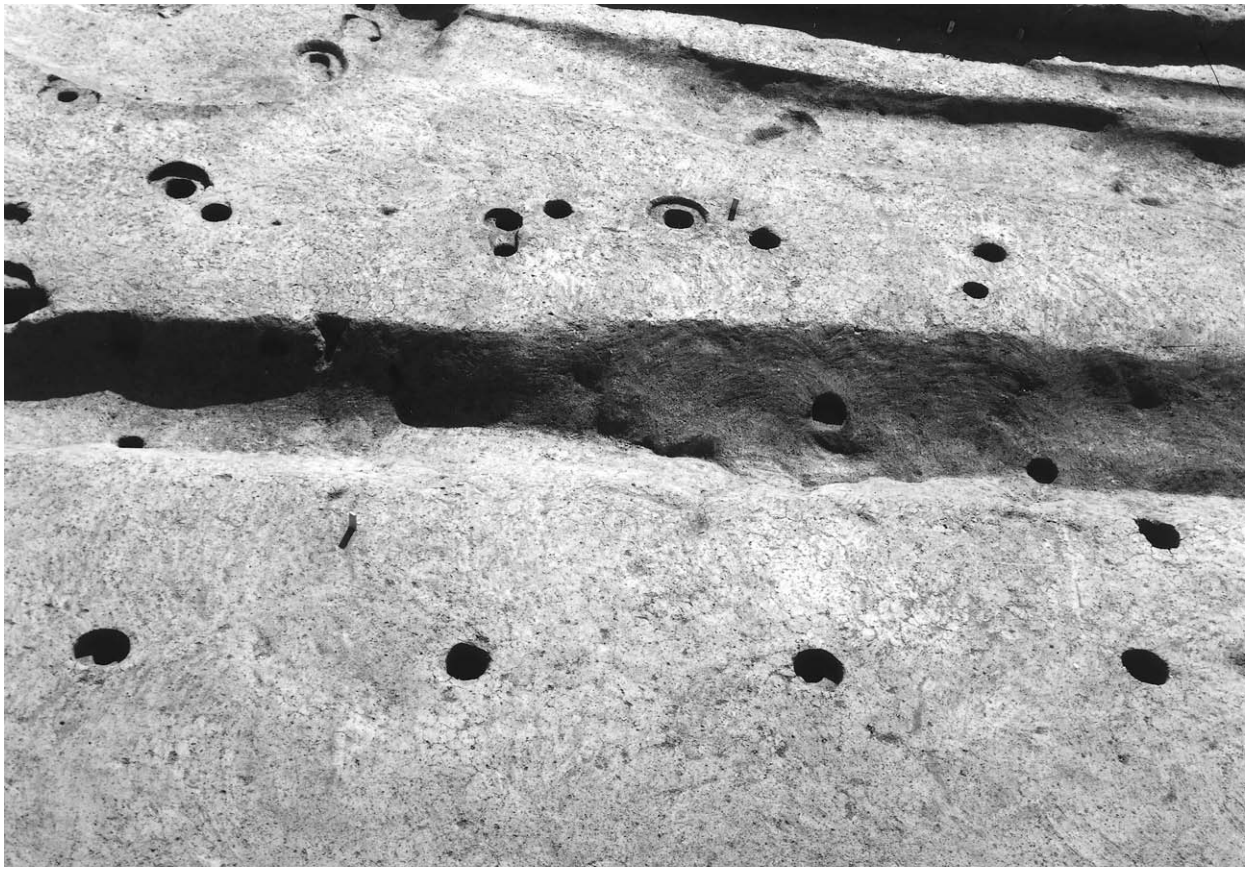
写真図版14



SB113完掘状況（北から）



SB114完掘状況（北から）

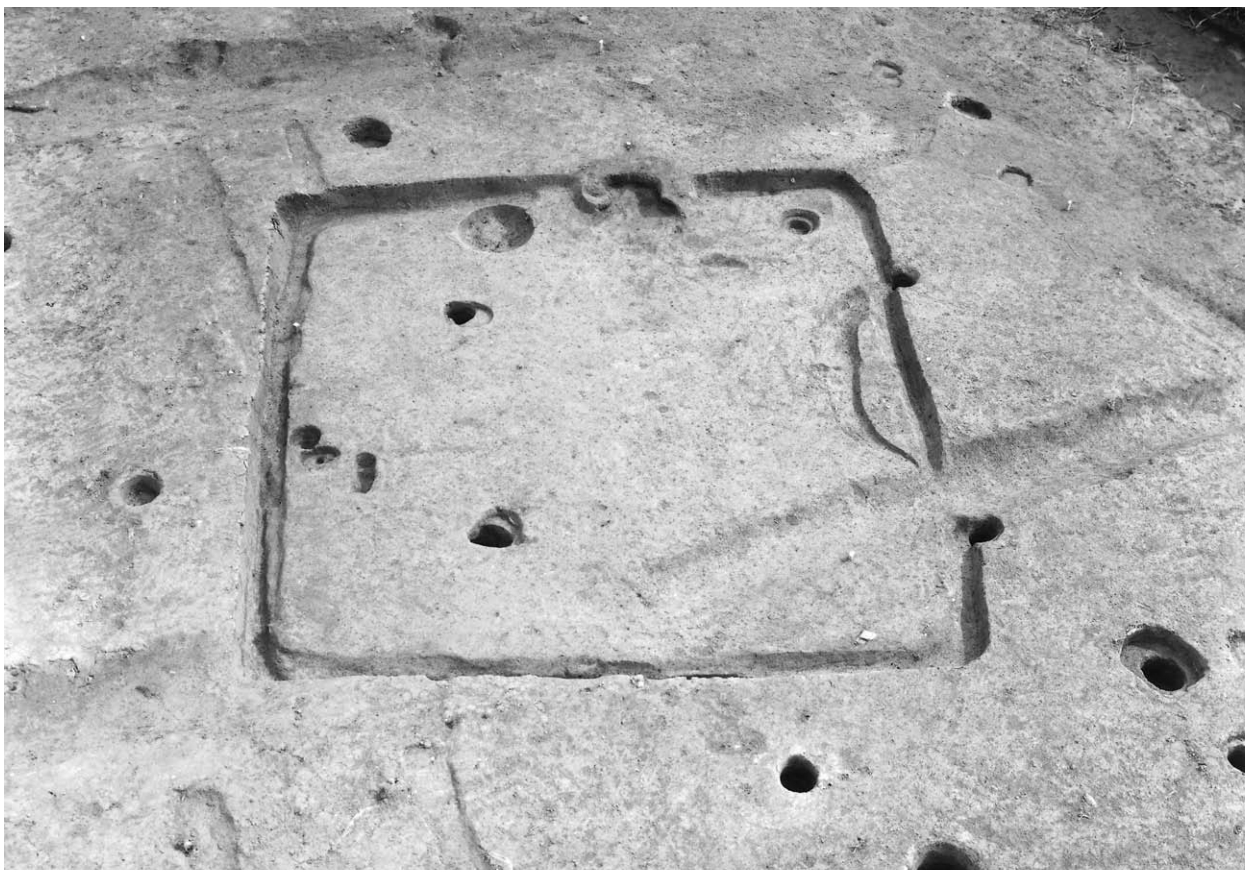


SB119完掘状況（北から）

SB125完掘状況（南東から）

写真図版16

SH25・26・42完掘状況（南東から）



SH28完掘状況（南西から）

SH28カマド跡（南西から）

SH32完掘状況（南東から）

写真図版18

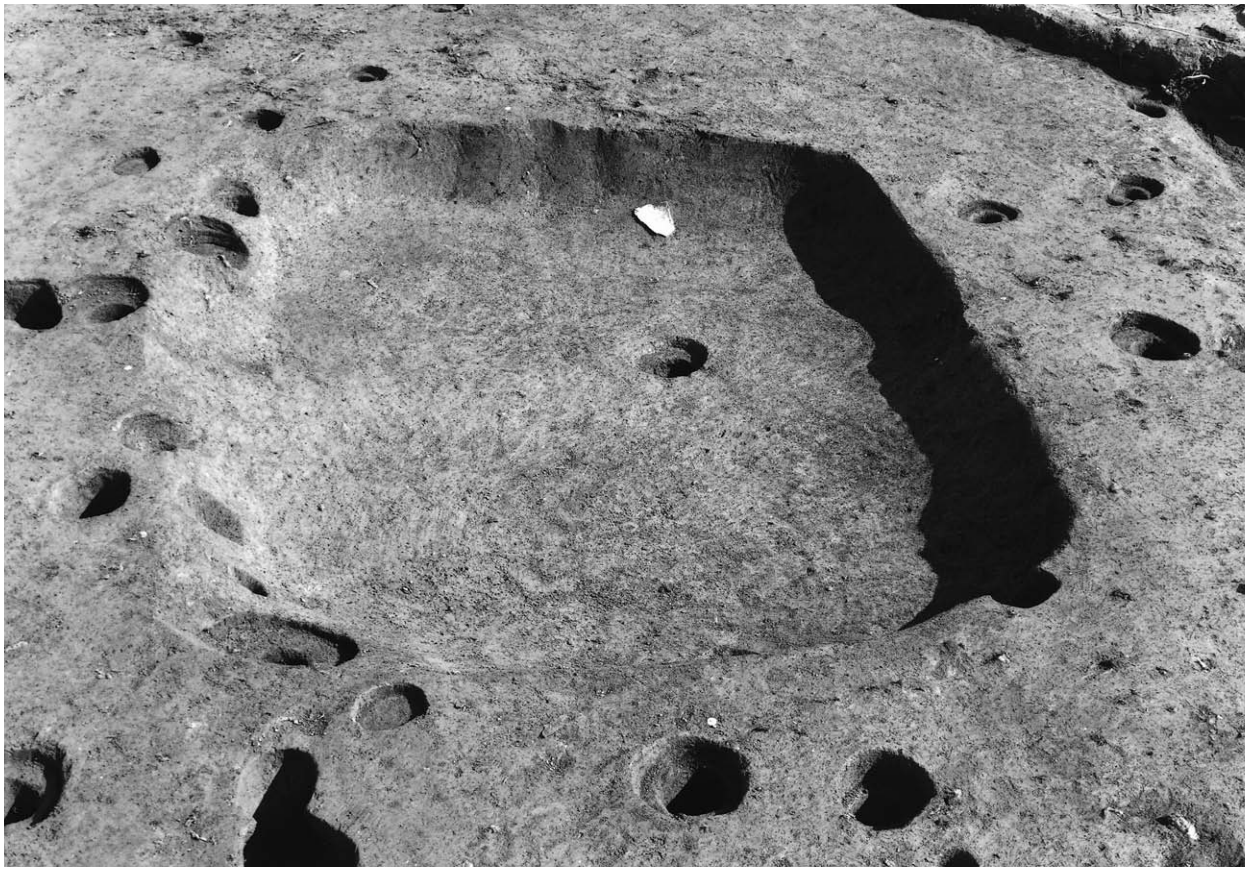
SH32カマド跡（南から）

SH35完掘状況（北西から）

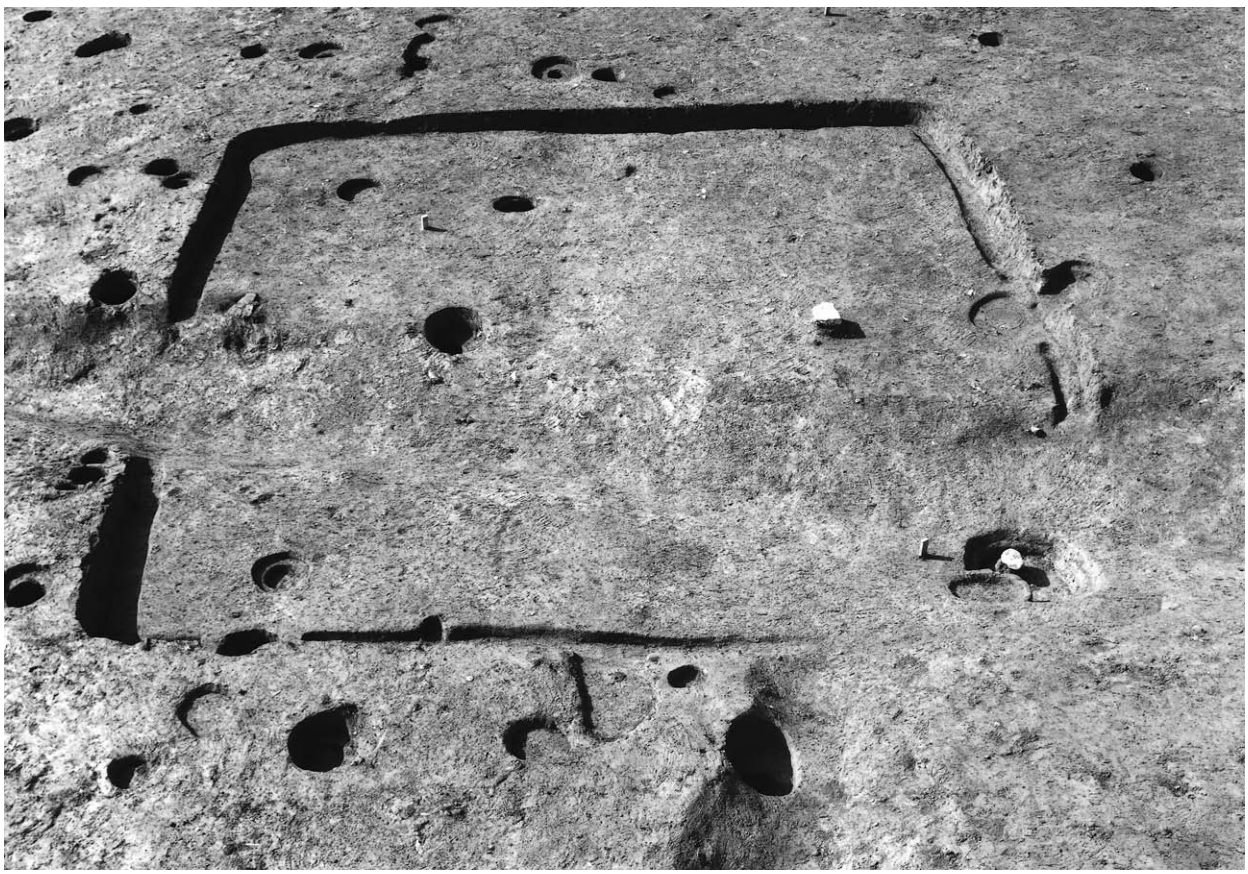
SH43・SK44完掘状況（西から）

SH46完掘状況（東から）

写真図版20



SH47完掘状況（西から）



SH64完掘状況（北東から）

SH85完掘状況（北から）

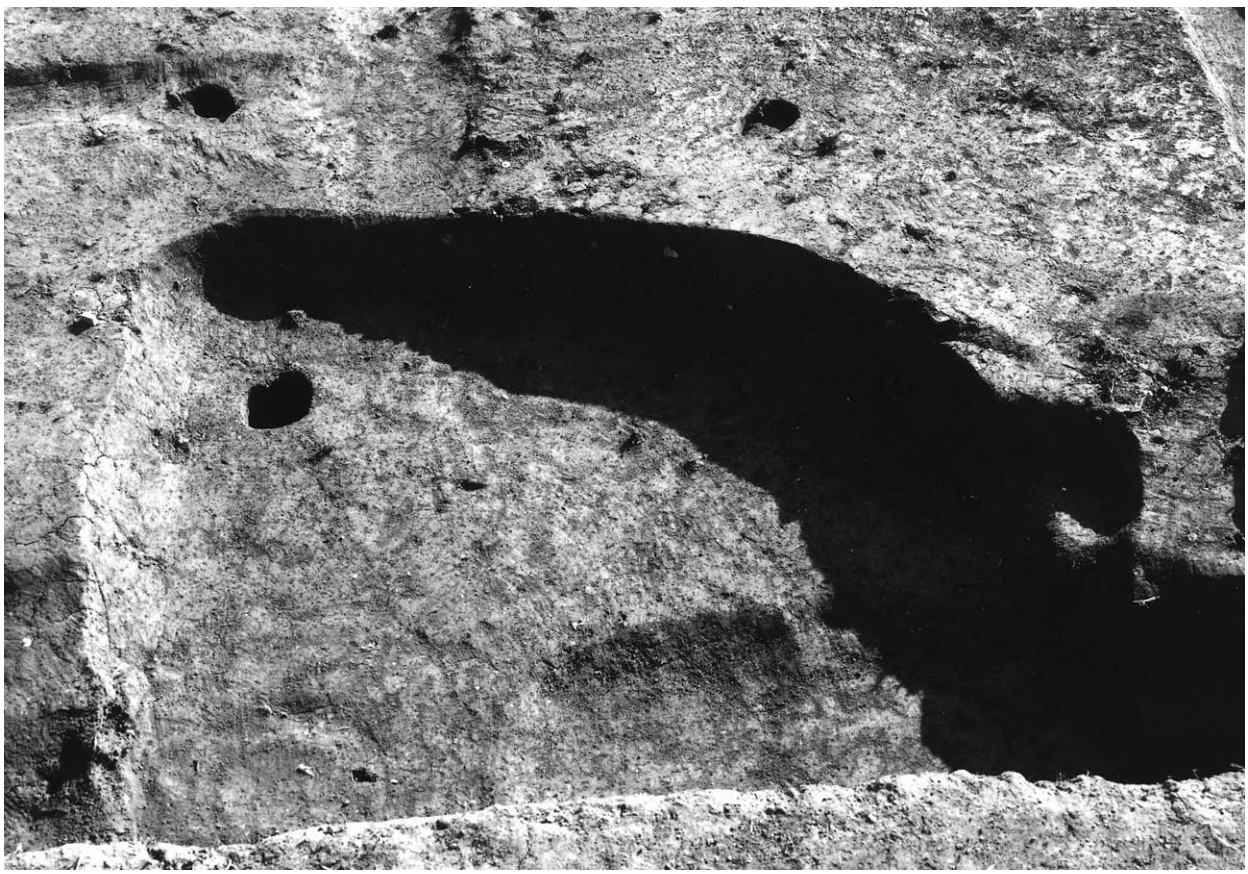
SH91遺物出土状況（東から）

写真図版22

SH107完掘状況（西から）

SH136完掘状況（南から）

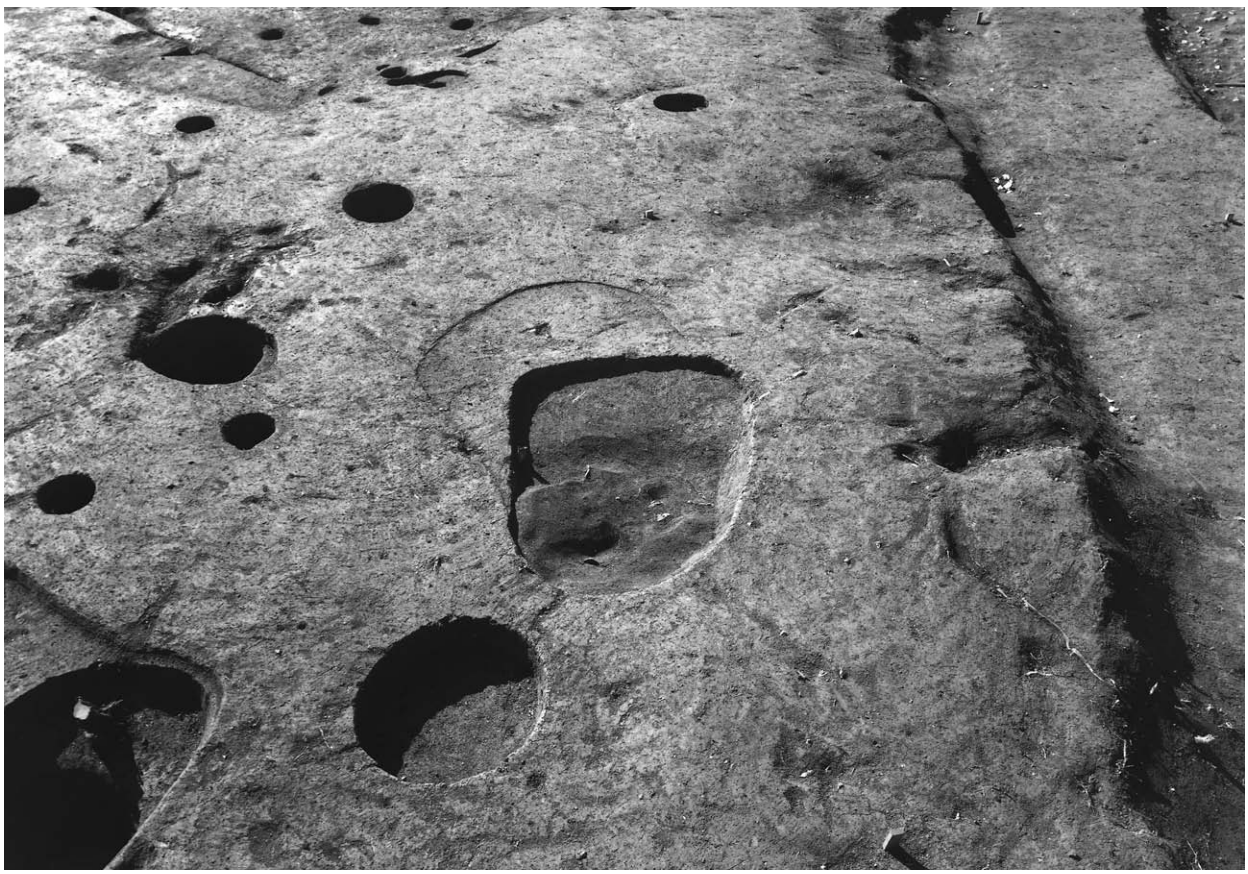
SK137・139・140完掘状況（南西から）



SK88完掘状況（北から）

写真図版24

SK96遺物出土状況（南東から）



SK134完掘状況（北から）

SK15遺物出土状況（南から）

SK34遺物出土状況（西から）

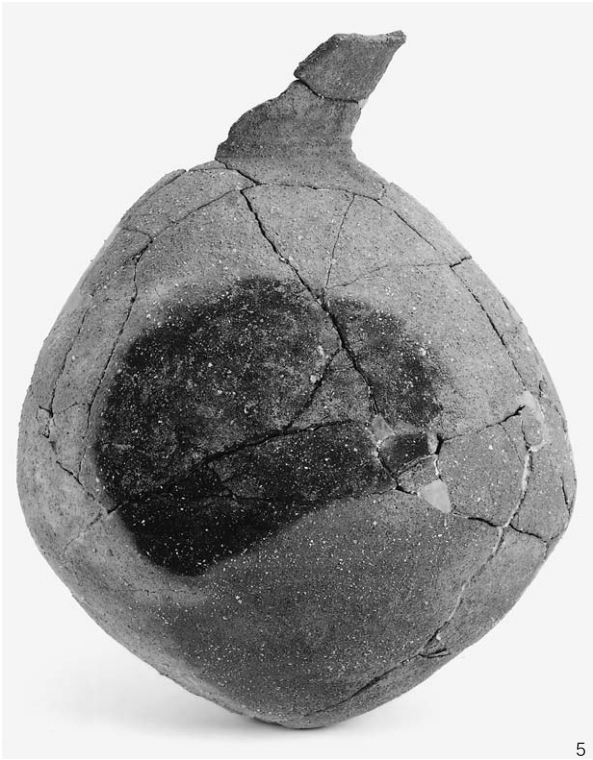
写真図版26

1

2

3

4


5

8

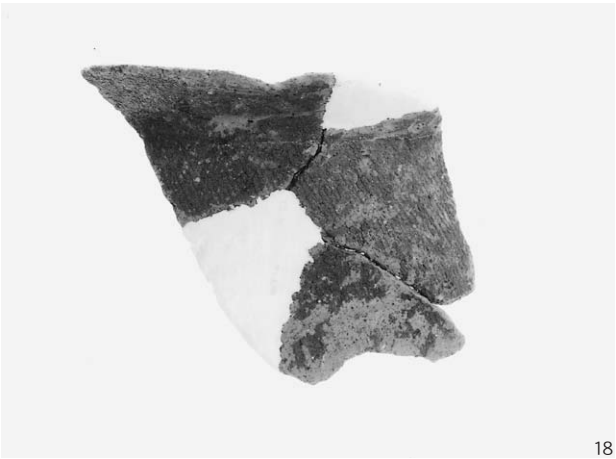
遺物写真①

12

13

14

15


18

20

23

24

25

30

31

32

遺物写真②

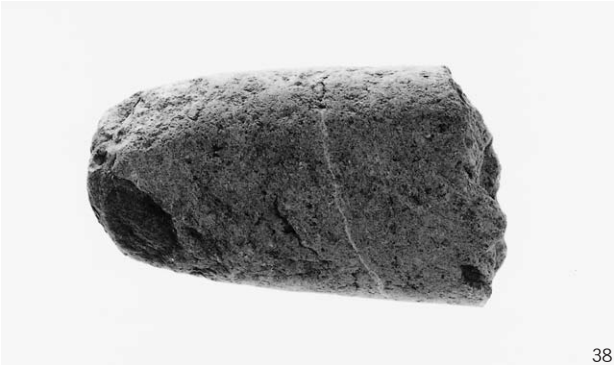
写真図版28

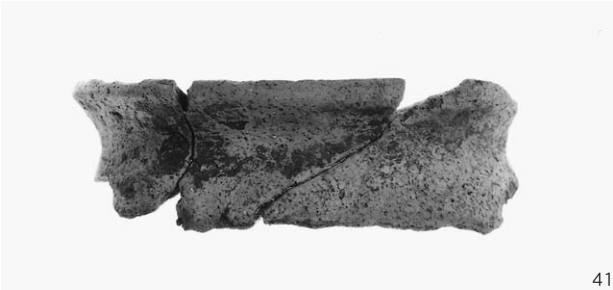
33

34

36

37


38


41

42

43

44

46

47

遺物写真③

48

50

52

53

56

57

58

60

62

66

69

72

遺物写真④

写真図版30

79

89

85

92

90

100

101

102

遺物写真⑤

報　告　書　抄　録

ふりがな	こまききたいせきはっくつちょうさほうこく
書名	小牧北遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	284
編著者名	小濵学・伊藤文彦・野嶌美沙子
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５－０３２５　三重県多気郡明和町竹川５０３　℡０５９６－５２－１７３２
発行年月日	西暦　２００７年　３月２６日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
こまききたいせき 小牧北遺跡	よっかいちし 四日市市 こまきちょう 小牧町 のばた・ひがしやま 野畑・東山	202	a 235	３５° ０２′ ５２″	１３６° ３４′ ５７″	2001.09.03 ～ 2002.01.21	5,900	平成13年度国道365号員弁バイパス国補道路改築事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小牧北遺跡	集落跡	縄文時代晩期	土器棺	縄文土器	
		弥生時代後期	方形周溝墓・土器棺墓	弥生土器	
		飛鳥時代	竪穴住居・掘立柱建物	須恵器	
		平安時代末期	土師器焼成坑など	フイゴ羽口・鉄滓 水晶の破片　など	

要約

飛鳥から奈良時代にかけての竪穴住居は、平面形が長方形であったり主柱穴がないものや、鞴羽口や鉄滓の出土や、遺構のほとんどで埋土に炭化物、灰、焼土が混入していた。このことから、竪穴住居の中には、鉄製品などの加工や修理をしていた工房跡ではないかと思われる。集落の中で鉄製品などの修理を行っていたものと考えられる。おそらくは、遺跡の周辺にも遺跡が広がるものと考えられる。

三重県埋蔵文化財調査報告284

小牧北遺跡発掘調査報告

２００７（平成１９）年　３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　株式会社アイブレーン